

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第115集

名古屋城三の丸遺跡(Ⅵ)

2003

財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第115集

なごやじょうさんまる
名古屋城三の丸遺跡(VI)

2003

財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

名古屋市は愛知県西部のほぼ中央に位置し、伊勢湾に面しています。城下町から発展したこの都市は、県全体だけでなく、東海地方の中心としても、その役割を果たしてきました。

名古屋城が位置する台地北西端は、近世のみならず、原始の時代より我々の祖先の生活が営まれてきました。このことは、各地点での過去の発掘調査結果が物語っています。この名古屋城では、三の丸地区を囲む土塁と外堀が国の特別史跡に指定されており、その内側の官庁街では近年、耐用年数を超えた建物の建て替えなどに伴い、発掘調査が行われてきました。

名古屋城三の丸地区では、このたび国土交通省中部地方整備局によって、名古屋地方裁判所執行部・簡易家庭裁判所交通部合同庁舎が建設されることとなりました。(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて国土交通省からの委託を受け、建設工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、近世を中心とし、古代から戦国時代までも含む遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供できました。

調査にあたりまして、国土交通省中部地方整備局営繕部、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域のみなさまから多大なご協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成 15 年 3 月 31 日

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 井 上 銀 治



S D 501 出土 磚仏

例 言

1. 本書は愛知県名古屋市中区三の丸に所在する、名古屋城三の丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は国土交通省中部地方整備局営繕部計画課により名古屋地方裁判所執行部・簡易家庭裁判所交通部合同庁舎建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査面積は1000m²である。
3. 発掘調査は平成13年5月から9月にかけて実施した。さらに平成14年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課主査・石黒立人、同主任・松田訓、同調査研究員・堀田剛史が担当し、玉野総合コンサルタント株式会社に調査事業の支援を依頼した。
5. 調査にあたっては、国土交通省中部地方整備局営繕部計画課、名古屋地方裁判所事務局、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、名古屋市教育委員会文化財保護室をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の編集は松田訓が担当し、執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ～Ⅴ・Ⅶ章＝松田訓、第Ⅵ章＝鬼頭剛（調査研究員）・森勇一（愛知県立明和高校教諭）・上田恭子（調査研究補助員）
7. 遺物整理作業については松田訓が担当し、実測、トレース作業には次の方々の参加を得た。
土倉崇子（調査研究補助員）、阿辺山孔子、伊藤恵、妹尾美佐穂、手嶋悦子（整理補助員）
8. 本書掲載の遺構写真は前田武志・内藤省三（玉野総合コンサルタント株式会社）が撮影し、遺物写真は福岡栄（スタジオピュア）に依頼した。
9. 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、旧基準「日本測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。
10. 本書で使用する土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
11. 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付CDに収録した。
12. 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
13. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
14. 本書の作成にあたり、藤澤良祐氏には出土遺物の時期的解釈において多くのご指導を得た。さらに本遺跡の調査・報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）

浅野弘子 伊藤嘉章 岩崎仁志 内野正 遠藤才文 柏本秋生 金子健一 立松 宏
谷口哲一 永松実 福原茂樹 藤本史子 森 勇一 山崎純男
財団法人広島市文化財団 萩市教育委員会 山口県埋蔵文化財センター

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置	2
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 調査の概要

8

第Ⅳ章 遺 構

第1節 基本層序	9
第2節 遺 構	11

第Ⅴ章 遺 物

第1節 概 要	24
第2節 主要遺構別出土遺物	24
第3節 器種別出土遺物	28

第Ⅵ章 自然科学的分析

第1節 地質概要	46
第2節 試料及び分析方法	46
第3節 分析結果	49
第4節 考 察	50

第Ⅶ章 ま と め

57

挿図目次

第1図	遺跡位置図	(2)	第31図	出土遺物実測図⑨	(38)
第2図	遺跡周辺地形図	(3)	第32図	出土遺物実測図⑩	(39)
第3図	周辺遺跡分布図	(5)	第33図	出土遺物実測図⑪	(40)
第4図	名古屋城三の丸・屋敷配置図	(6)	第34図	出土遺物実測図⑫	(41)
第5図	調査位置該当図	(6)	第35図	出土遺物実測図⑬	(42)
第6図	調査地点位置図	(7)	第36図	出土遺物実測図⑭	(43)
第7図	調査区位置図	(8)	第37図	出土遺物実測図⑮	(44)
第8図	調査区基本層序概念図	(9)	第38図	出土遺物実測図⑯	(45)
第9図	調査区壁土層断面図	(10)	第39図	南北トレンチ層序断面写真	(48)
第10図	遺構位置図	(12)	第40図	深掘層序断面写真	(48)
第11図	調査区北西部下面検出遺構図	(16)	第41図	深掘層序断面図と試料採取層準	(48)
第12図	調査区中央部下面検出遺構図	(17)	第42図	南北トレンチ断面の鉤物組成と 屈折率ヒストグラム	(51)
第13図	調査区東部下面検出遺構図	(18)	第43図	深掘層序断面の鉤物組成と 屈折率ヒストグラム	(52)
第14図	S D 505・508・514断面図	(19)	第44図	堆積層、堆積年代と古環境	(52)
第15図	調査区北西部上面検出遺構図	(20)	第45図	戦国期変遷図	(59)
第16図	S X 002平・断面図	(20)	第46図	遺構別遺物組成図	(60)
第17図	調査区中央部上面検出遺構図	(21)			
第18図	調査区上面検出土坑列群位置図	(22)			
第19図	調査区南東部上面検出遺構図	(22)			
第20図	S X 002・S K 003平面図	(23)			
第21図	S X 007・S K 003・S D 001・ S K 175断面図	(23)			
第22図	埴仏原寸実測図	(25)			
第23図	出土遺物実測図①	(30)			
第24図	出土遺物実測図②	(31)			
第25図	出土遺物実測図③	(32)			
第26図	出土遺物実測図④	(33)			
第27図	出土遺物実測図⑤	(34)			
第28図	出土遺物実測図⑥	(35)			
第29図	出土遺物実測図⑦	(36)			
第30図	出土遺物実測図⑧	(37)			

表目次

第1表	調査工程	(1)
第2表	居住者の変遷	(7)
第3表	南北トレンチ断面のテフラ鉤物組成	(51)
第4表	深掘層序断面のテフラ鉤物組成	(51)
第5表	¹⁴ C年代測定結果	(52)
第6表	遺構別遺物カウント表	(60)

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

名古屋城三の丸遺跡は、愛知県名古屋市中区三の丸地内に位置する。愛知県教育委員会が1986年に発行した愛知県遺跡分布地図には、名古屋城跡について、本丸跡、二の丸庭園、天守閣貝塚、那古野城跡が記載されている。名古屋城跡には、このほかに国指定特別史跡として外堀と三の丸土塁が含まれる。この三の丸土塁内は現在、官公庁舎が建ち並んでおり、近年まで遺跡としては範囲指定されていなかった。

1987年、名古屋市では市公館建設に伴い、名古屋城三の丸地区に所在する建設予定地の試掘調査を行い、近世を中心とした遺跡の存在を確認した。このため名古屋市教育委員会では、この地点の本調査を実施するとともに、1988年には名古屋市遺跡分布地図に、旧三の丸域を「名古屋城三之丸遺跡」として追加指定した。これ以降、名古屋市教育委員会、愛知県埋蔵文化財センターによって、10地点以上の発掘調査が行われている。

名古屋城三の丸遺跡の範囲内に、このたび国土交通省中部地方整備局営繕部によって、名古屋地方裁判所執行部・簡易裁判所交通部合同庁舎（以下、地裁簡裁合同庁舎と略す）の建設が行われることとなり、事前に発掘調査が必要となった。

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて国土交通省中部地方整備局営繕部からの委託を受け、平成13年5月より、発掘調査を実施した。調査面積は、1000㎡である。

第2節 調査の経過

調査区は合同庁舎建設予定地に、一括して設定した。この調査区に平成13年5月9日より表土剥ぎを実施し、資材搬入を行って発掘作業を開始したのは5月14日であった。調査期間は約4ヶ月を要し、この間、8月26日には発掘調査現場の普及、公開を目的として現地説明会を開催し、小雨の中ではあったが多くの見学者の参加を得た。

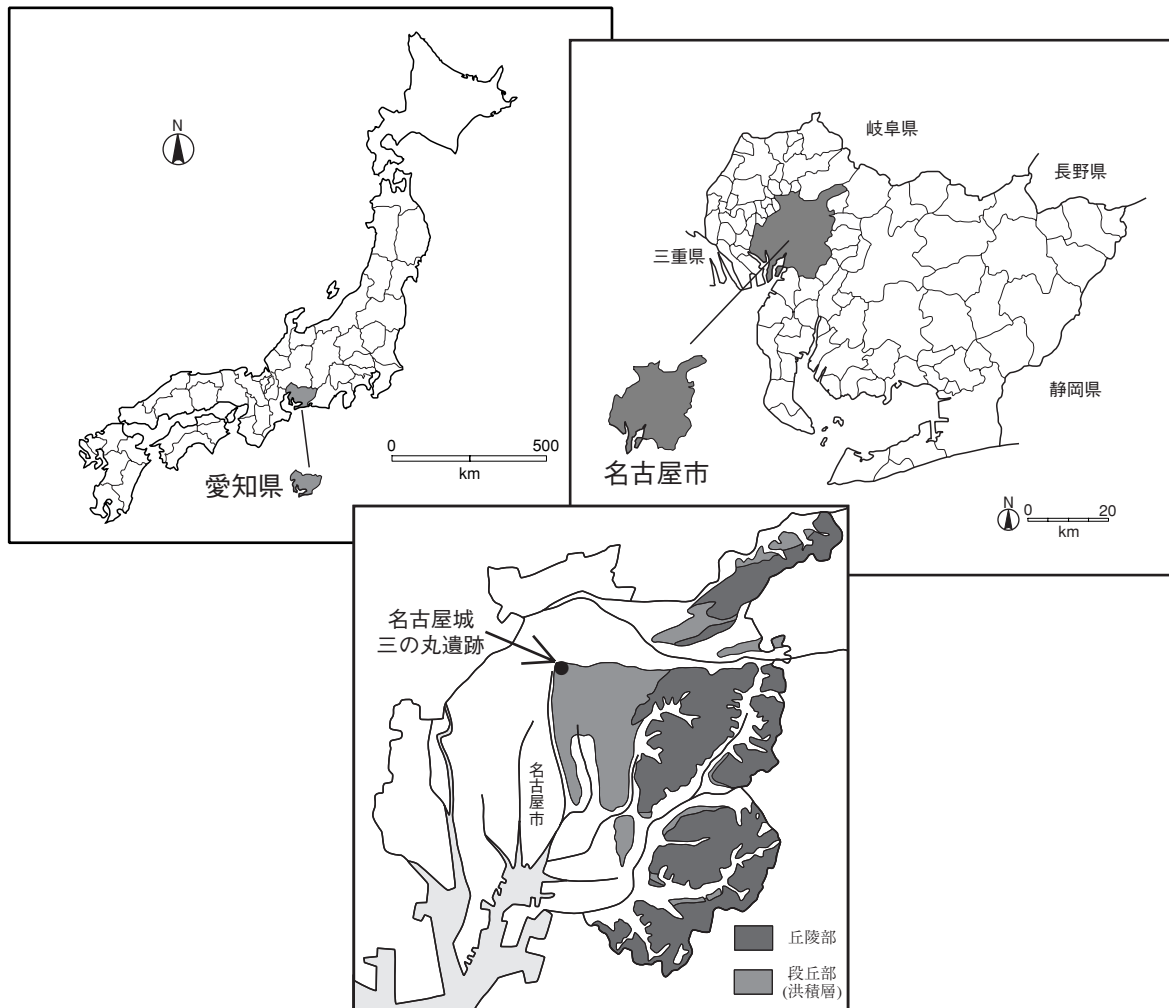
出土遺物の整理作業は、調査終了後、洗浄・注記作業を行い、引き続き平成14年4月より、調査報告書作成までの作業を行った。

第1表 調査工程

	H.13	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	H.14	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作業員説明会			●																							
資材搬入																										
表土剥ぎ																										
上層調査																										
下層調査																										
補足調査																										
空撮				●		●																				
現地説明会						●																				
資材等撤収																										
基礎整理																										
報告書作成																										...

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では尾張と三河にあたる。名古屋城三の丸遺跡の位置する名古屋市は、愛知県西部を占める尾張部のほぼ中央で、伊勢湾のもっとも奥に位置する。市域は木曽三川（木曽・長良・揖斐）などによって形成された濃尾平野南端、名古屋台地、尾張丘陵などに広がる。市域の中央部に位置する台地の北・西・南側は沖積低地がめぐり、この低地と台地の標高差を防御の利点として築城地点が選ばれたことが推測できる。



第2図 遺跡周辺地形図（国土地理院1/20万地勢図「名古屋」）

第2節 歴史的環境

名古屋城三の丸遺跡は、旧石器時代の細石核、弥生時代の集落跡、円筒埴輪片の出土した溝、古代の遺構・遺物なども確認されている複合遺跡であるが、主体は中世末（戦国時代）から近世である。

『愛知県遺跡分布地図（Ⅰ）尾張地区』によれば、名古屋市内に分布する埋蔵文化財包蔵地は909ヶ所が確認されている。本節では、市域の中で名古屋台地北西部周辺に分布する遺跡について、名古屋城三の丸遺跡も含めて概観してみる。

名古屋城周辺で確認できる遺跡は、まず、台地の落ち際にみられる貝塚である。縄文時代の遺物が出土する貝塚は、滅失した名古屋城天守閣貝塚をはじめ、長久寺遺跡、東二葉町遺跡などがある。

やがてこの付近は、西志賀・片山神社遺跡で確認されているように、初期弥生文化を受容し始める。さらに、名古屋城三の丸遺跡県図書館地点においては、弥生時代中～後期の集落が確認され、台地縁辺部での人々の生活がより具体的に見え始める。

古墳時代にはいると、県三の丸庁舎地点においては、古墳の周濠と思われる溝跡から円筒埴輪が見つかり、県図書館地点においても古墳時代前期の集落が確認されるなど、名古屋台地の端においては、一定の規模をもつ集団の生活が営まれていたようである。

古代においては、簡易・家庭裁判所地点の調査で掘立柱建物跡が確認され、瓦葺きの回廊状建物の存在が想定されている。

中世のこの地域については、当該期の遺跡・文献資料等においてもはっきりした材料が少なく、戦国期までは実像がつかみにくい。戦国期には、本遺跡に重なる那古野城が駿府の今川氏によって築かれる。少ない資料ながら那古野城の年譜を記すと、大永年間（1521～28）駿河國の守護で西への領地拡大を目論む今川氏親によって築城。氏豊が城主に。天文元年（1532）頃、織田信秀が今川氏より城を奪う。信長はこの後城主に。弘治元年（1555）、織田信長は清須城に居を移し、織田信光が城主となり、さらに林通勝に譲られる。天正十年（1582）頃、廃城。

近世に至ると、徳川家康は関ヶ原の戦いの後、四男の忠吉を清須城主とし、太平洋側における西への押さえとした。しかし、忠吉が若年で死去すると、家康はさらに幼年の九男義直を甲府城主から清須城主へと転出させた。慶長十四年（1609）、家康は西国に対するさらに強力な拠点が必要との考えから、名古屋台地の北西端に名古屋城の築城を決意する。

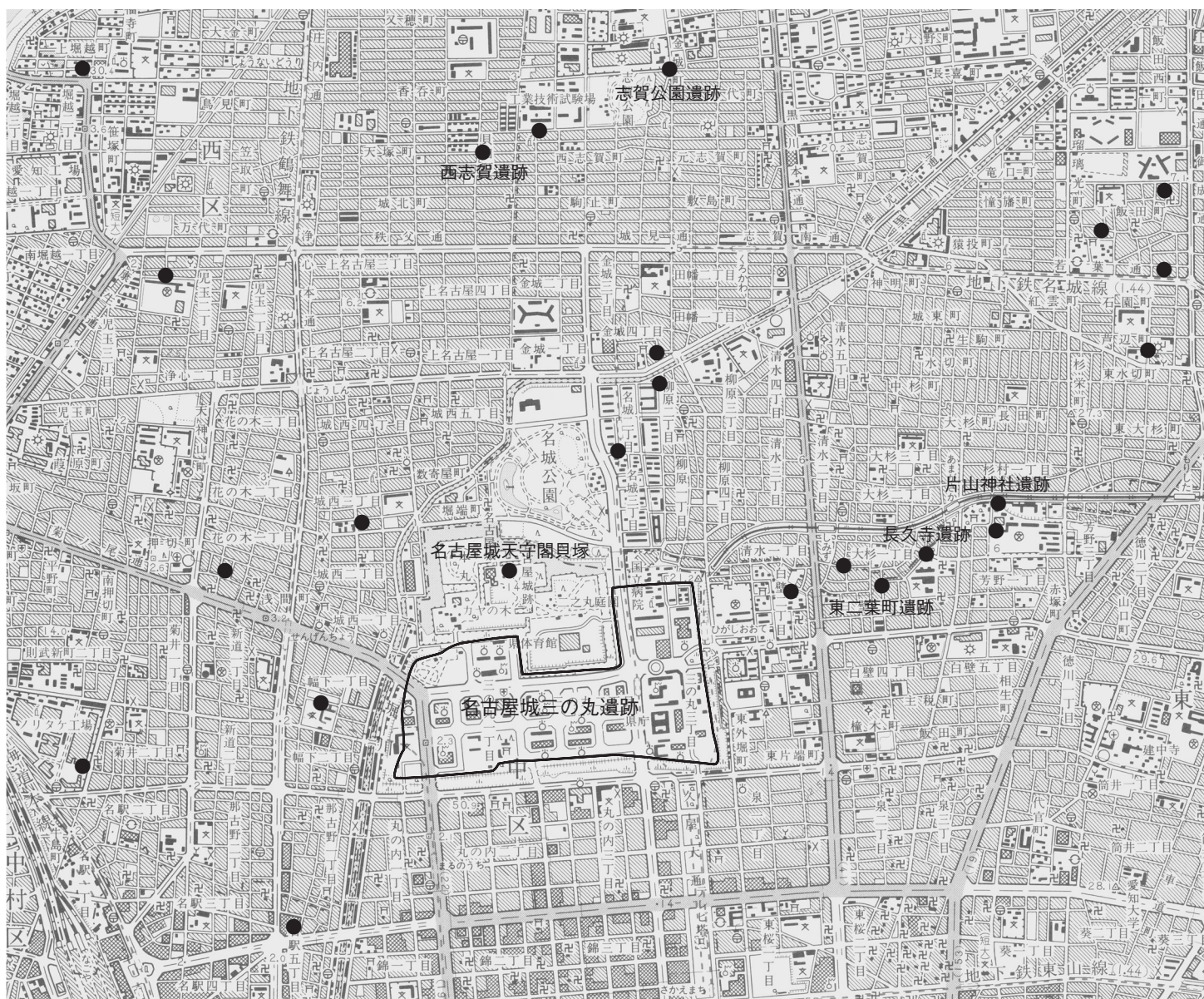
江戸に幕府を構える徳川家にとっては、旧豊臣恩顧の大名が群雄する西日本に対し、複数の押さえを必要とした。名古屋は、太平洋側における上方と江戸の間にあって最大規模の平野を背し、街道筋にもあたり陸・海路の要衝にもあたる。徳川幕府にとっては、どうしてもこの地域に拠点が必要であった。

名古屋城とその城下町は、この慶長十四年以降順次築かれてゆく。外堀の内側（三の丸地区）には、役割を重んじられた家臣が、ブロックごとに区画整理された役宅を割り当てられる。外堀の外側には城下町が碁盤の目状に割り当てられ、武家屋敷、寺社、町屋などが入る。この新しい城と城下町に、清須から人が移り、地名・橋名にも清須のものを用いた、いわゆる「清須越し」が挙行された。

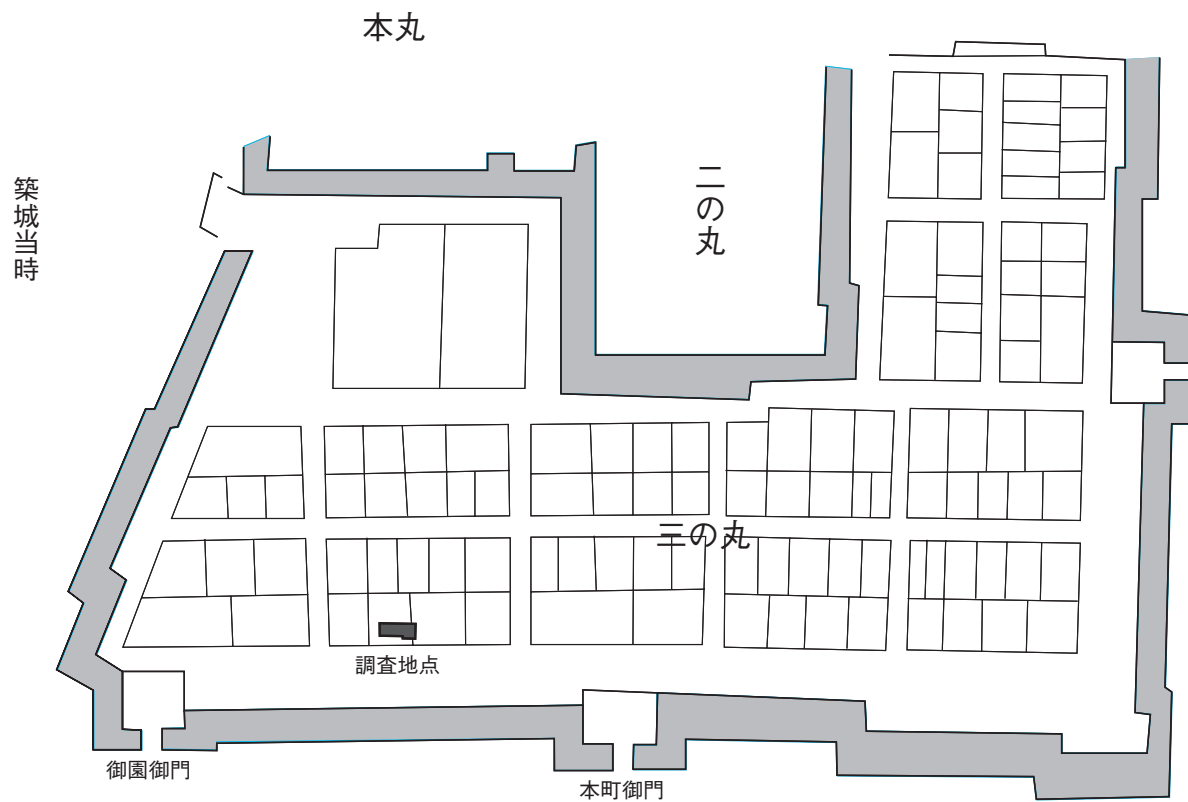
名古屋城三の丸遺跡は、現在まで本調査地点を含めて10地点以上（第6図）で発掘調査が実施されている。平成13年度の調査区は、三の丸の区画の中では、南端でやや西寄りのブロックにあたる。このブロックは、南辺を南御土居筋、北辺を中小路、東辺を大名小路、西辺を御鹽屋筋に囲まれ、7区画の屋敷割がなされている。この中で、南御土居筋に北面する東西4区画分の屋敷地のうち、中央に位置する

2区画が調査地点にあたる部分である。便宜上、この2区画を屋敷地1・2と呼称する。

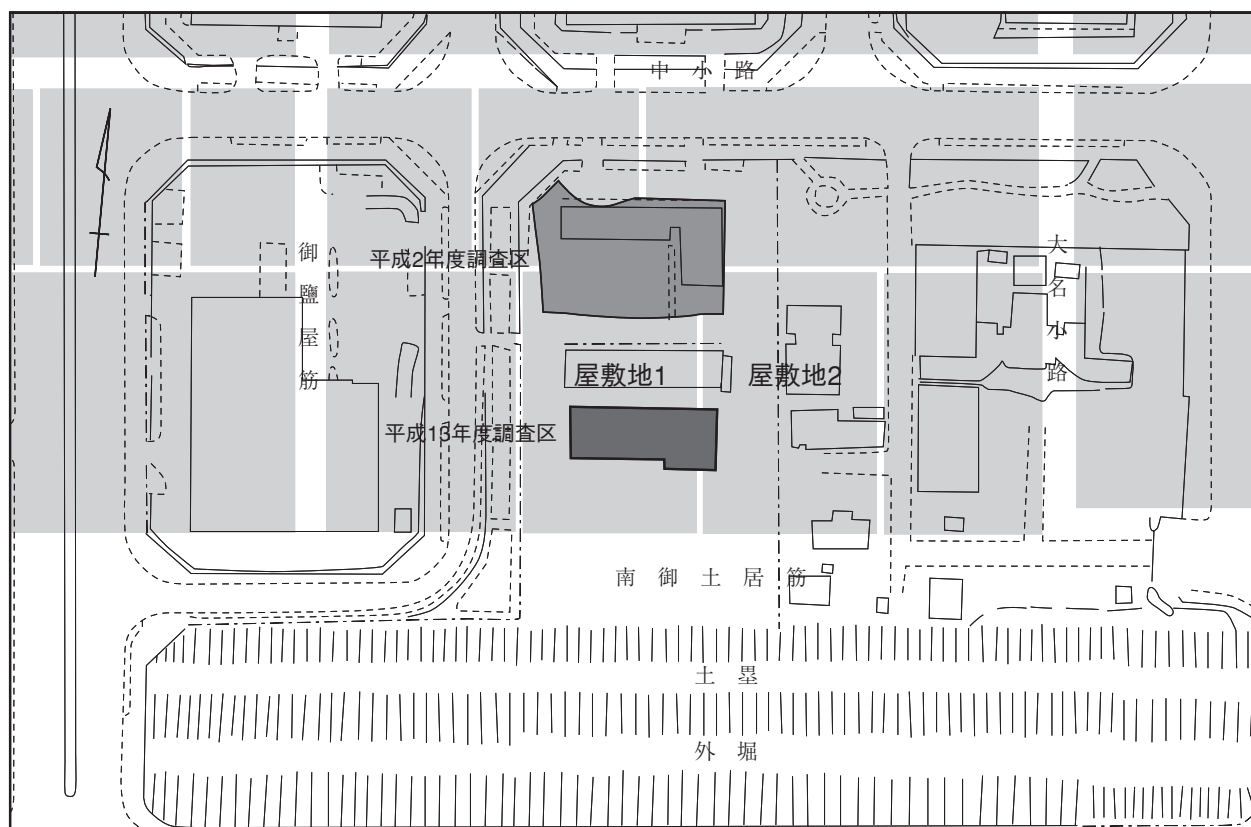
屋敷地1・2の伝邸関係は、第2表に示すように複数の居住者によって構成され、役宅的性格であったことを物語っている。屋敷地1・2は、東西に並立している（第5図）。名古屋市博物館の所蔵している『坪間路頭帖』では、宝暦3年（1753）における各屋敷の規模が記載されている。これによれば、屋敷地1は間口二十九間半×奥行四十三間半（1283坪）、屋敷地2は間口三十間四尺五寸×奥行四十五間三尺五寸（1402坪）である。各屋敷の明治維新直前における居住者は、屋敷地1＝成瀬吉太正平、屋敷地2＝滝川鍋松忠貫である。



第3図 周辺遺跡分布図（1/25,000）



第4図 名古屋城三の丸・屋敷配置図

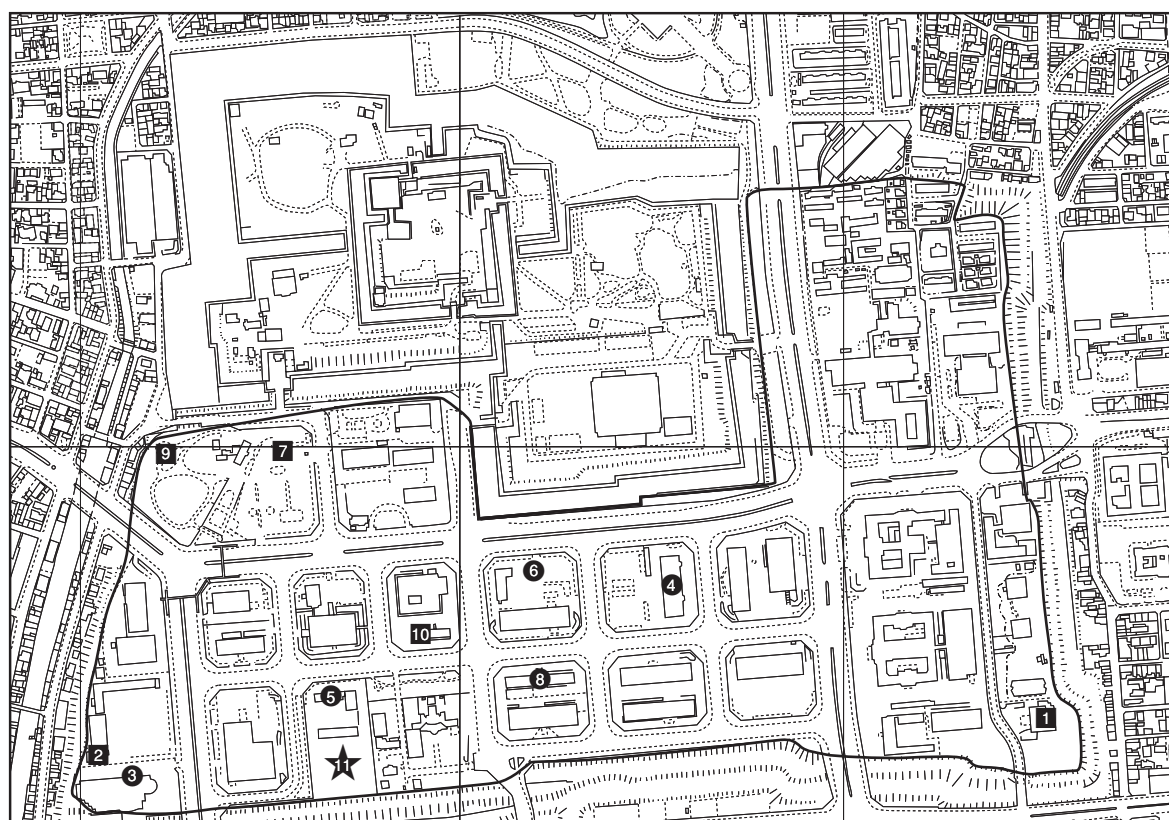


第5図 調査位置該当図

第2表 居住者の変遷

年 代	1 6 0 0	1 7 0 0	1 8 0 0	明治維新
屋敷地1	伊奈左門吉勝 伊奈左門吉次 伊奈源五右衛門定次	下条庄右衛門正春 下条新内孝正 成瀬竹之助正惟 成瀬大膳正苗 津田兵部寛当 津田幸次郎信周 津田幸次郎信郷 横井伊織時申 遠山彦左衛門景慶 成瀬吉左衛門正為	成瀬大内蔵喬長 成瀬吉左衛門喬治 成瀬吉五郎正敦 成瀬吉太正平	
屋敷地2	大道寺玄蕃直重 大道寺出雲直時 大道寺庄十郎直治	寺尾内匠就実 寺尾頼母好実 寺尾悦之助実延 山澄大膳英貞 生駒因幡致長 津田又六寛当 成瀬内膳正苗 津田幸次郎信周 津田悦三郎 津田幸次郎信郷	下条安吉正賀 下条庄右衛門正香 滝川彦次郎忠暁 滝川鍋松忠貴	

※『金城温古録』『士林浜河』『旧邸礎跡略』をもとに作成



●…愛知県埋蔵文化財センター調査 ■…名古屋市教育委員会調査

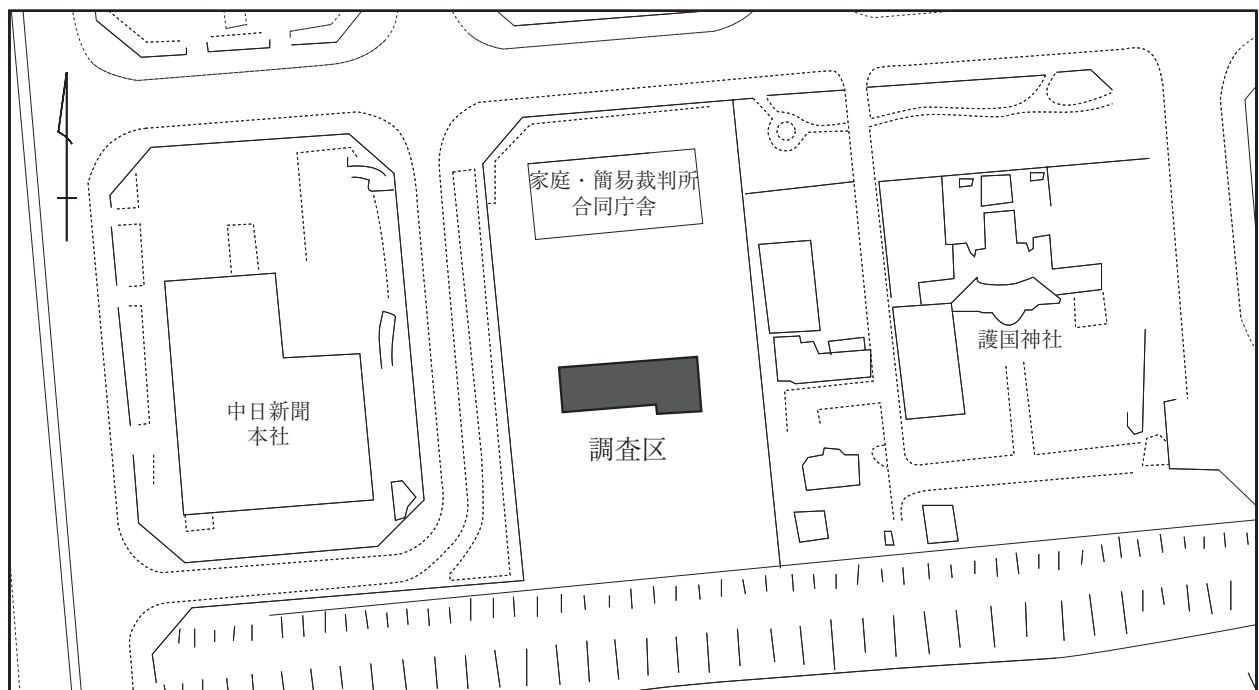
- | | | | |
|-------------------|-------------|----------------------|-----------------|
| 1.名古屋市公館地点 | 2.丸の内中学校地点 | 3.県図書館地点 | 4.名古屋第一地方合同庁舎地点 |
| 5.簡易・家庭裁判所地点(H.2) | 6.愛知県警察本部地点 | 7.中部電力地下変電所地点 | 8.県三の丸庁舎地点 |
| 9.名古屋市能楽堂地点 | 10.名城病院地点 | 11.地裁・簡裁合同庁舎地点(H.13) | |

第6図 調査地点位置図

第Ⅲ章 調査の概要

調査区は、地裁簡裁合同庁舎建設予定地に設定した。したがって調査区は、建設予定の庁舎形状に合わせ、南東部に張り出しをもった長方形となった。今回の調査地点は、北隣の平成2年度に発掘調査した家庭・簡易裁判所合同庁舎地点（以下、平成2年度調査地点と略す）をはじめ、数次にわたる近隣地点の調査結果から、近世以前の遺構・遺物が全面に残存していることが予想できた。

調査地点は洪積台地上に立地し、今回の地点だけでなく過去の調査事例においても、遺構検出面や深度のある遺構基底部からの湧水は認められなかった。したがって、調査地点の排水除去対象は雨水のみであり、2段階式の沈澱槽を設置して污水対策とした。調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、排土置き場として調査地点の南側に用地を確保し、一定量を超えた時点で域外に搬出処理した。遺構検出作業は、これに先立ち約50cm幅のトレンチを調査区壁面に沿って入れ、明治時代初頭の整地層を確認できたため、この層を取り払った面を第一次遺構検出面とした。さらに、壁面において戦国期から近世前期における面が部分的に認められたため、この部分を基準として第二次遺構検出面とした。第一・二次遺構検出面で、それぞれ写真測量を行い、最終的に基盤層の確認を行って調査を終了した。



第7図 調査区位置図

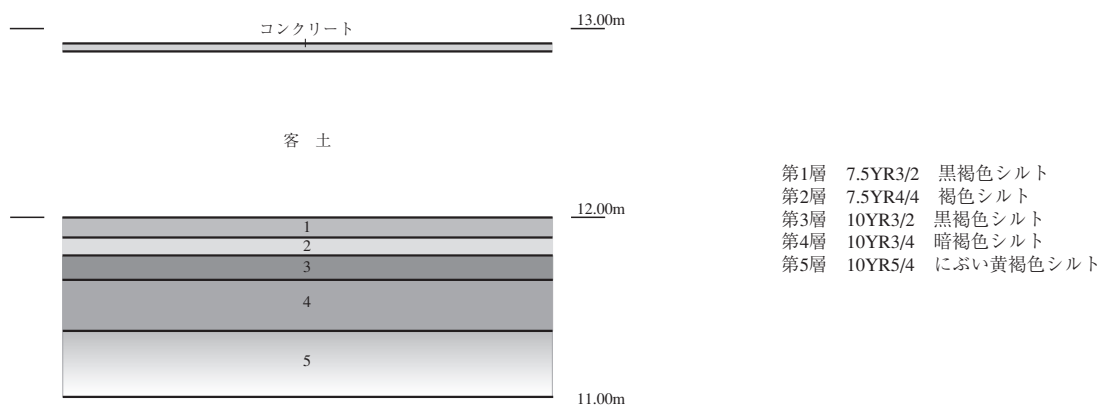
第Ⅳ章 遺 構

第 1 節 基本層序

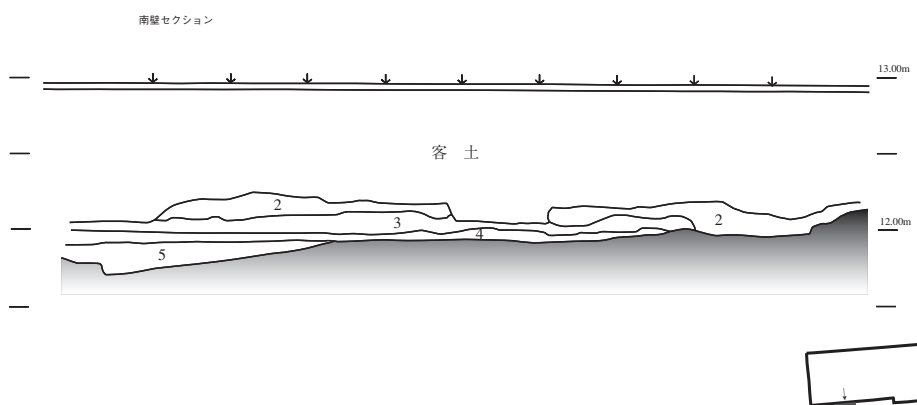
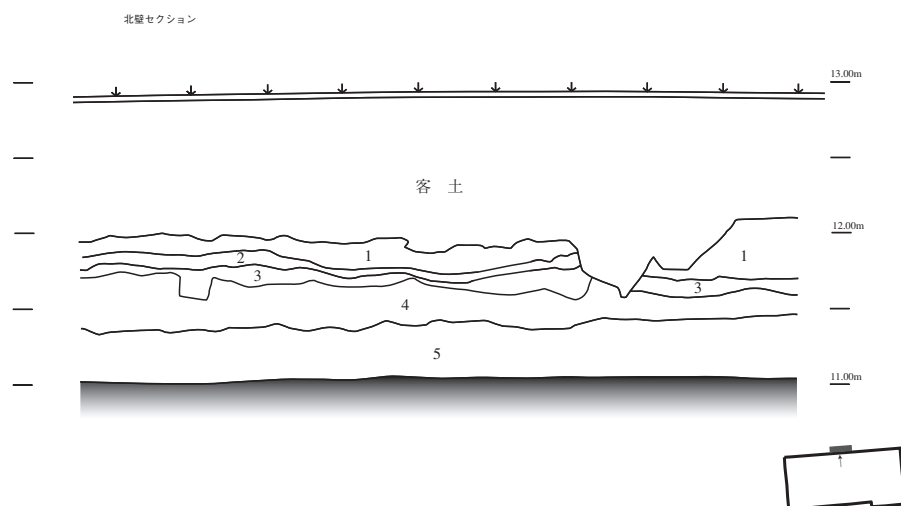
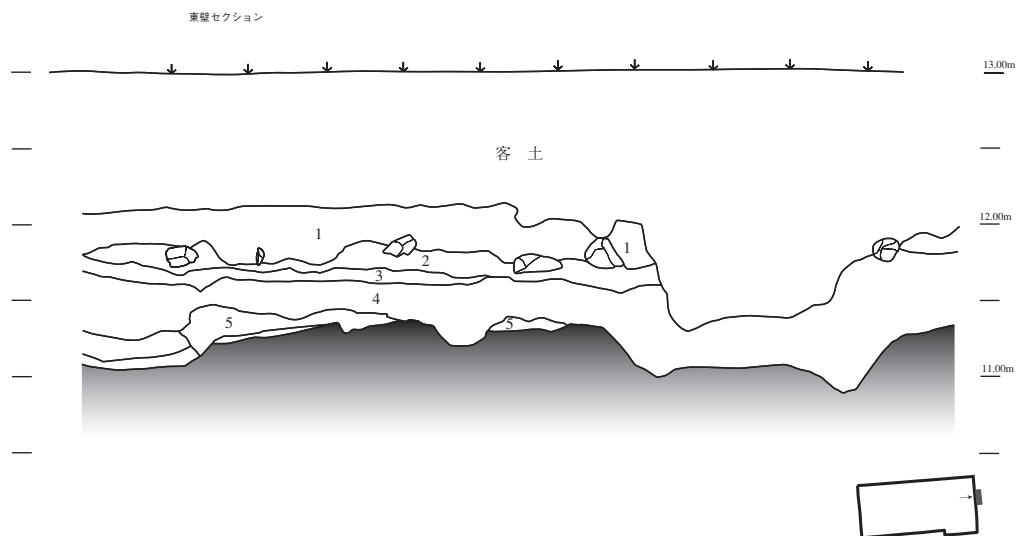
名古屋城三の丸遺跡における本調査地点の基本層序を概観すると、第 8 図のような状況がみてとれる。地表面は標高13m前後で、地表面はコンクリートまたは、碎石が敷かれた部分に覆われていた。この直下には客土が盛られていて、これを取り除いて出現した面には、幕末期の遺物がみられた。調査区全体を覆っていたのはこの客土のみで、出現した面は近世末期における生活面の可能性が考えられたため、表土除去作業はこの客土までとした。

調査区内では近代以降の攪乱が多く認められ、層序の旧態が判断できる部分が多くなかった。さらに基盤層に起伏があり、何回かの整地行為によって高まりは削平され、窪みは埋められたようであり、安定した面の広がりや土層によって判断しながら追いかけることが難しかった。

このなかで調査地点の平均的堆積状況を概観すると、客土の下に、まず黒褐色シルト層（1）が10cmほど堆積している部分が多くみられた。近世後期の掘り込みは、この層上位において確認できた。さらに、この下には褐色シルト層（2）が10cmほど堆積している場所が多く、この層中からは近世全般の遺物が確認できたが、人為的掘り込みが面として広がる様子はみられなかった。さらにその下には、黒褐色シルト層（3）が15cmほど堆積していた。この層の中からは、少ないながら戦国期、古代の遺物が確認でき、この層を取り払う段階で、戦国期の遺構も確認できた。さらに、基盤層の起伏を整地したことや深く掘削された攪乱に影響され、上位層では捉えきれなかった近世全般の遺構も、この時点で残穴が確認された。さらにこの下には、暗褐色シルト層（4）が25cmほど堆積しており、その下にはにぶい黄褐色シルト（5）が35cmほど堆積していた。しかし、この（4）層より下位は基本的に無遺物で、明確な人為的掘り込みも確認できなかったため、基盤層として扱った。



第 8 図 調査区基本層序概念図



第9図 調査区壁土層断面図 (1/50)

第2節 遺 構

第1項 概 要

今回の調査地点で検出した遺構は、主として円または方形土坑341基、不定形土坑47基、溝14条、井戸5基である。これらの遺構は、中世～戦国期、近世前・中期、近世末の3時期に大きく区分できる。遺構の時代別比較では、近世が圧倒的であり、戦国期は大型遺構が中心で数は少ない。こうした状況を北隣の平成2年度調査地点と比較すると、時代別比較では、近世が圧倒的に多いことに違いはないが、平成2年度調査地点には古代の遺構が確認されている点が異なる。

遺構の内容としては、平成2年度調査地点では、名古屋城三の丸遺跡の各調査地点と同様に、遺物が大量に出土した廃棄土坑と思われるものが一定量検出されている。しかし、本調査地点においては、こうした土坑がほとんど検出されていない。したがって遺物の出土量においても、他の調査地点に比べて相対的にかなり少なかった。

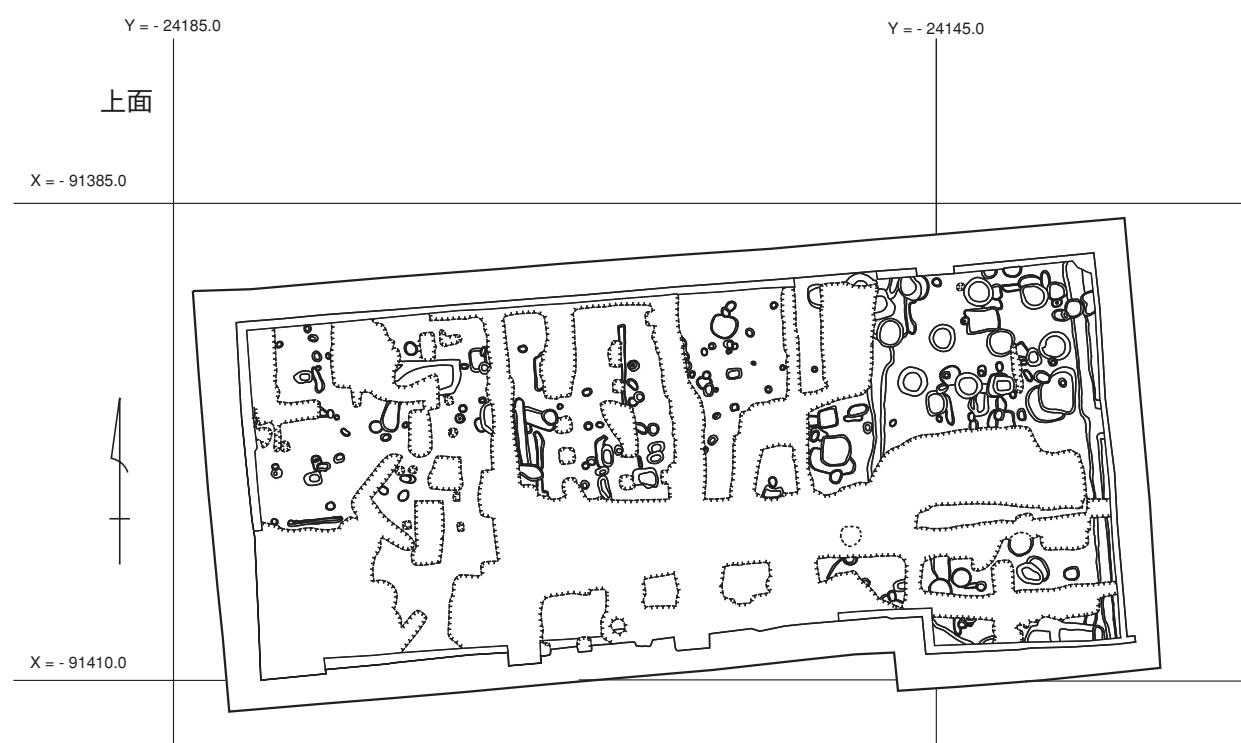
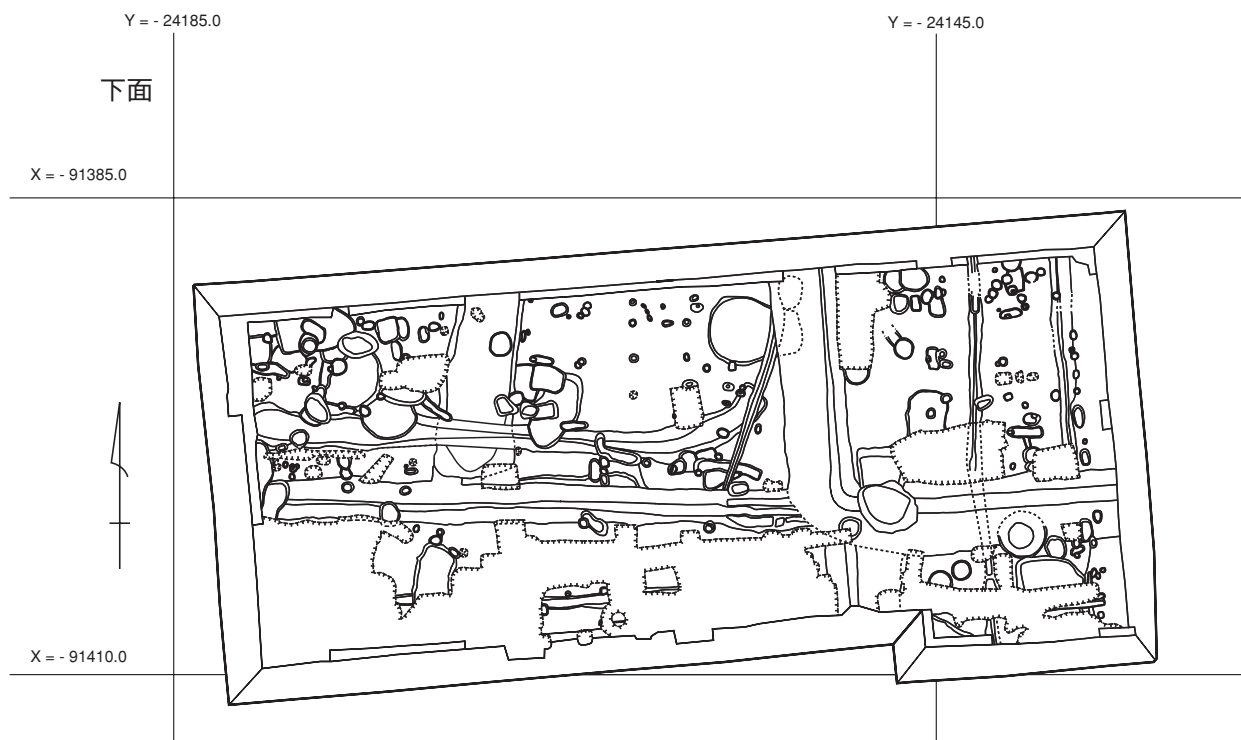
遺構検出面は、概ね11.0～12.2mである。この検出面は、基本層序の説明でも述べたが削平された部分がかなり含まれていた。調査は客土を取り除いた面での検出と、遺物包含層を掘り下げた面での検出を行い、上・下面として遺構検出を行ったが、上下それぞれの面が時期別生活面として捉えられなかった。

第2項 中世～戦国時代の遺構

今回の調査地点で戦国時代以前の遺物を伴う遺構は、土坑、溝、不定形な掘り込み等である。このうち掘削規模においては溝が大きく、その他の遺構ともども遺物の出土量は極端に少なかった。土色などの判断から、近世以前の遺構と思われる掘り込みにおいても、遺物が伴うものはほとんどみられなかった。この時期の堆積層は、基本層序の項で扱った第3層と考えられるが、調査地点内で残存する部分が限られており、この面からの明確な掘り込みと明言できるものが少ない。

・溝状遺構

- S D 501 調査区東端に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.5mを測り、断面形態は箱形を呈しており、幅0.6m、深さ0.6mを測る。主軸線の方法はN-4°-Wを示し、埋土は黒色シルトを基調とする。遺物は15世紀代の古瀬戸陶器片とともに、古代のものと思われる埴伝片（第22図）が出土している。
- S D 502 調査区中央の北側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.4mを測り、断面形態は船底形を呈しており、幅0.7m、深さ0.2mを測る。主軸線の方法はN-16°-Eを示し、埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は16世紀前半の天目茶碗片や土製鍋片が出土している。S D 502やS X 504を切っている。
- S D 503 調査区西の北側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.5mを測り、検出長は10.0mで、さらに調査区北側にのびる。断面形態は船底形を呈しており、幅4.0m、深さ0.5mを測る。主軸線の方法はN-8°-Eを示し、埋土は暗褐色シルトを基調とする。遺物は15世紀中頃と思われる陶器片が出土している。S D 504に切られている。
- S D 504 調査区中央の西側に位置し、東西方向にのびる。検出高は11.5mを測り、断面形態は箱形を呈しており、幅1.8m、深さ0.8mを測る。主軸線の方法はW-5°-Nを示すものが東



0 10m

第10図 遺構位置図 (1/400)

端でW-32° - Sと方向を変える。埋土は暗褐色シルトを基調とする。遺物は16世紀前半の天目茶碗片や土製鍋片が出土している。方向が違うそれぞれは、本来別の遺構であった可能性も考えられる。S D 503を切りS D 502に切られている。

S D 505 調査区中央の西側に位置し、東西方向にのびる。検出高は11.5mを測り、検出長は30.0mで、さらに調査区西側にのびる。断面形態はV字形を呈しており、幅2.0m、深さ1.0mを測る。主軸線の方向はW-1° - Nを示し、埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は15世紀中頃～17世紀初頭と思われる陶器片が出土している。S D 508に切られている。

S D 508 調査区中央のやや東側に位置し、南北方向～東西方向に90° 方向を変えてのびる。検出高は11.4mを測り、検出長は下端測定で南北12.0m、東西14.0mで、さらに調査区北・東側にのびる。断面形態はV字形を呈しており、東西・南北ともに幅3.5m、深さ1.6～1.9mを測る。南北方向では、西側の掘肩に幅1.1mの犬走り状平坦部が設けられている。主軸線の方向はN-4° - WからW-5° - Sを示し、埋土は黒褐色シルトを基調とする。遺物は15世紀中頃～17世紀初頭と思われる陶器片が出土している。S D 505・514を切っている。

S D 513 調査区西のやや南側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.8mを測り、検出長は2.5mで、さらに調査区南側にのびる。断面形態は船底形を呈しており、幅2.0m、深さ0.3mを測る。主軸線の方向はN-7° - Eを示し、埋土は暗褐色シルトを基調とする。遺物は16世紀前半と思われる陶器片が出土している。

S D 514 調査区中央の南側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.3mを測り、検出長は3.5mで、さらに調査区南側にのびる。断面形態はV字形を呈しており、幅3.9m、深さ2.7mを測る。主軸線の方向はN-3° - Wを示し、埋土は暗褐色シルトを基調とする。遺物は出土していない。S D 508に切られている。

・土 坑

S K 557 調査区中央の北西側に位置する。平面形態は不整円形を呈するものと思われ、検出高は11.5mを測り、残存径2.1m、深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、S K 558等周辺の遺構すべてに切られている。遺物は、15世紀中頃のものと思われる天目茶碗片が出土している。

S K 571 調査区中央に位置する。平面形態は不整方形を呈するものと思われ、検出高は11.5mを測り、長径1.1m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、S K 572を切っておりS K 570・S X 514に切られている。遺物は、16世紀中頃のものと思われる播鉢片が出土している。

・その他の遺構

S X 502 調査区中央の北側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈するものと思われ、検出高は11.4mを測り、推定長径5.0m、短径3.6m、深さ0.8mを測る。埋土は黒色シルトを基調とし、S D 502・508に切られている。遺物は、15世紀中頃のものと思われる陶器片がわずかに出土している。

- S X 508 調査区西の北側に位置する。平面形態は不整円形を呈するものと思われ、検出高は11.6mを測り、残存径3.1m、深さ0.85mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、S K 598等周辺の遺構すべてに切られている。遺物は、灰釉陶器、14世紀末から15世紀前半のものと思われる東濃型山茶碗片がわずかに出土している。
- S X 520 調査区西のやや北側に位置する。平面形態は不整円形を呈するものと思われ、検出高は11.6mを測り、残存径2.8m、深さ0.5mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、S X 508等周辺の遺構すべてに切られている。遺物は、灰釉陶器、15世紀中頃から16世紀初頭のものと思われる陶器片がわずかに出土している。
- S X 522 調査区中央のやや東側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は11.5mを測り、残存径2.6m、深さ0.6mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、S E 201、S D 508等に切られている。遺物は、灰釉陶器、16世紀中頃のものと思われる播鉢片がわずかに出土している。

第3項 近世の遺構

本調査地点の中で近世の遺物を伴う遺構は、土坑、溝、井戸、不定形な掘り込み等である。その数は、近世以前の遺構と比較して圧倒的な量である。これらの遺構は、尾張徳川家によって築かれた名古屋城三の丸内の武家屋敷に伴うものと推察できる。この時期の堆積層は、基本層序の項で扱った第1・2層と考えられるが、調査地点内で残存する部分が一定ではなく、この面からの明確な掘り込みと明言できるものが少ない。

この中で、近世の屋敷境溝と思われる遺構が検出されたことは、最大の成果であった。三の丸内の区画や屋敷境の推定は、絵図、文献資料などと遺構の照合で初めて可能となるが、調査事例の積み重ねにより、絵図に示された配置のミクロ的な位置確認が可能となっている。

・溝状遺構

- S D 001 調査区東端に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.7mを測り、検出長は20.0mで、さらに調査区南北方向にのびる。断面形態は船底形を呈しており、幅0.7m、深さ0.4mを測る。主軸線の方向はN-5°-Wを示し、埋土は暗褐色シルトを基調とする。遺物は19世紀中頃と思われる陶磁器片が出土している。第2章の歴史的環境の項で示した屋敷地1と2の境界を示す溝と思われる。

・土 坑

- S K 176 調査区東のやや南側に位置する。検出高は11.6mを測り、幅1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、S E 002に切られている。遺物は18世紀前半の陶器を主体とする。
- S K 204 調査区東のやや北側に位置する。平面形態は長方形を呈し、検出高は11.4mを測り、長径1.2m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、S K 205・279を切っている。遺物は18世紀末～19世紀初頭の陶器を主体とする。
- S K 228 調査区東のやや南側に位置する。検出高は11.5mを測り、残存径2.1m、深さ0.4mを測る。

埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は18世紀末～19世紀初頭の陶器を主体とする。

- S K 262** 調査区西の中央に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出高は11.6mを測り、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.5mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、S D 505を切っている。遺物は18世紀末～19世紀中頃の陶器を主体とする。

・土坑列群

S K 005・**006**・207・175及びS K 001・002・004・007及び**S K 003**・046

調査区東の北端に位置する。検出高は11.7mを測り、いずれの土坑も平面形態は円形を呈しており、東西方向に並列する。中心間の距離は、2.8～3.1mを測り、直径1.4～1.6m、深さ0.4～0.9mを測る。埋土はいずれも単層で、黒褐色シルトに黄褐色砂質土がブロック状に多く含まれ、一時で埋め戻した状況がうかがえる。それぞれの土坑の配置は、各東西列が南北方向では隣列に並ばず、その中間に掘削されている。各土坑は、出土遺物がわずかであるが、18世紀後半のものと思われる陶器がみられる。さらにS K 046から「泉湊伊織」銘の焼塩壺が出土しており、18世紀の後半に埋伏行為がなされたものと推察される。各土坑の配置や埋土の状況から建物に伴う遺構とは考えがたく、日照を意識した配置を一気に埋め戻した様子が推察されるため、植栽の抜根跡を可能性として指摘したい。

・井戸

- S E 003** 調査区東の南側に位置する。平面形態は円形を呈し、検出高は11.5mを測り、直径1.2mを測る。各井戸の深さは、最終的に0.4のバック・ホウにて深さの確認を行ったが、アームの届く範囲では確認できなかった。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は17世紀後半の陶器を主体とする。

- S E 201** 調査区東のやや南側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、検出高は11.4mを測り、長径3.3m、短径2.7mを測り、深さは未確認である。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は18世紀末～19世紀中頃の陶磁器を主体とする。

・その他の遺構

- S X 002** 調査区東端のやや北側に位置する。**平面形態は不整形で**、検出高は11.7mを測り、長径2.5m、短径1.9mを測り、深さは0.4mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は18世紀末～19世紀中頃の陶磁器を主体とする。

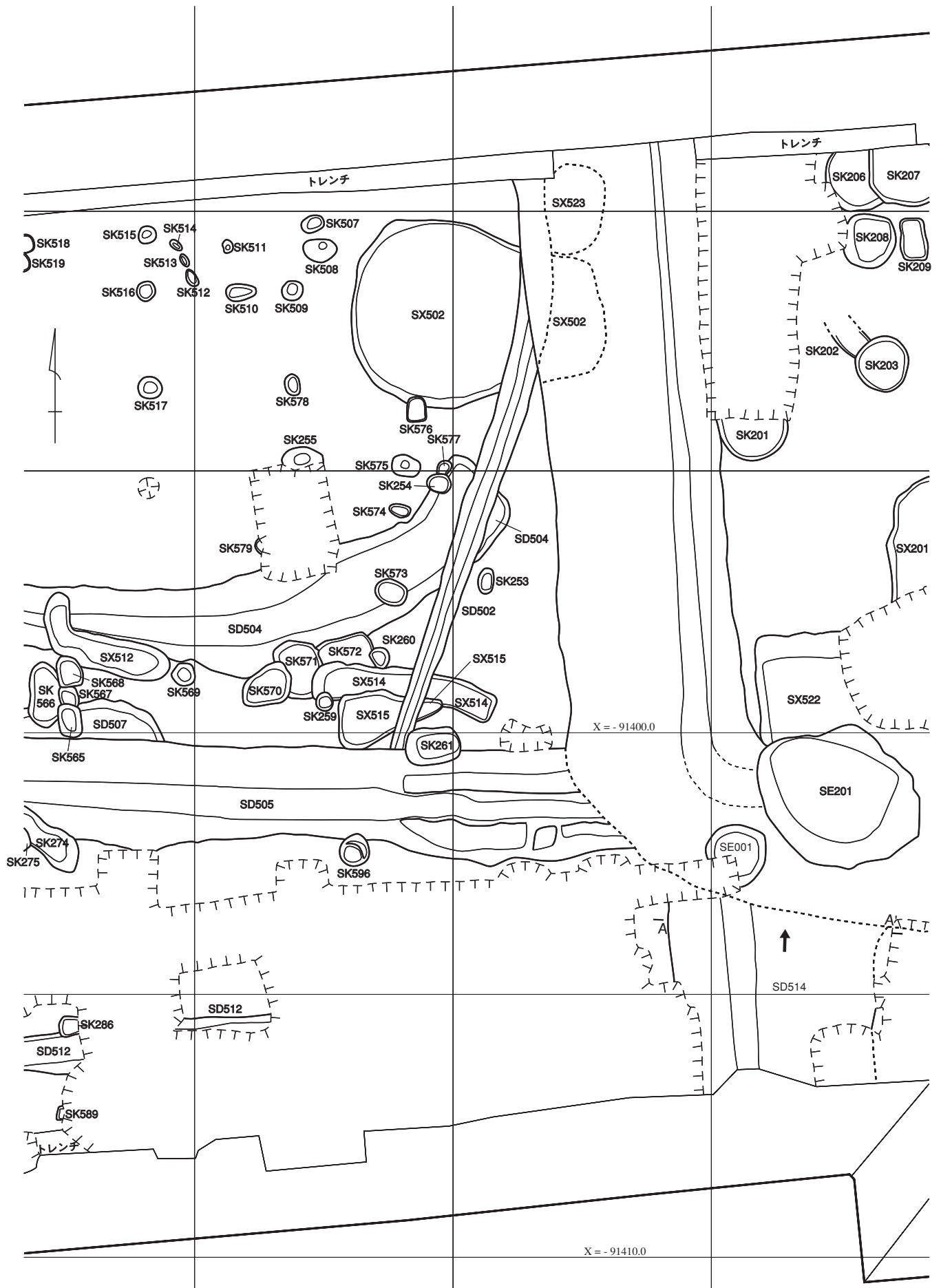
- S X 007** 調査区中央のやや東側に位置する。**平面形態は不整形で**、検出高は11.8mを測り、直径1.6m、深さは0.2mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とし、S X 008を切っている。遺物は18世紀以降と思われる土器皿のみ出土している。遺構内には、板状の石と瓦片が敷かれ、これらは被熱による変色が顕著であった。このため本遺構は、燃烧施設の基底部を耐火構造にするため、板状の石等を設置する目的で掘削されたことが考えられ、カマド等の上部構造が想定される。

- S X 011** 調査区東側の南端に位置する。検出高は11.7mを測り、残存径4.2m、深さは1.1mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物は18世紀前半～中頃の陶器を主体とする。S K 062

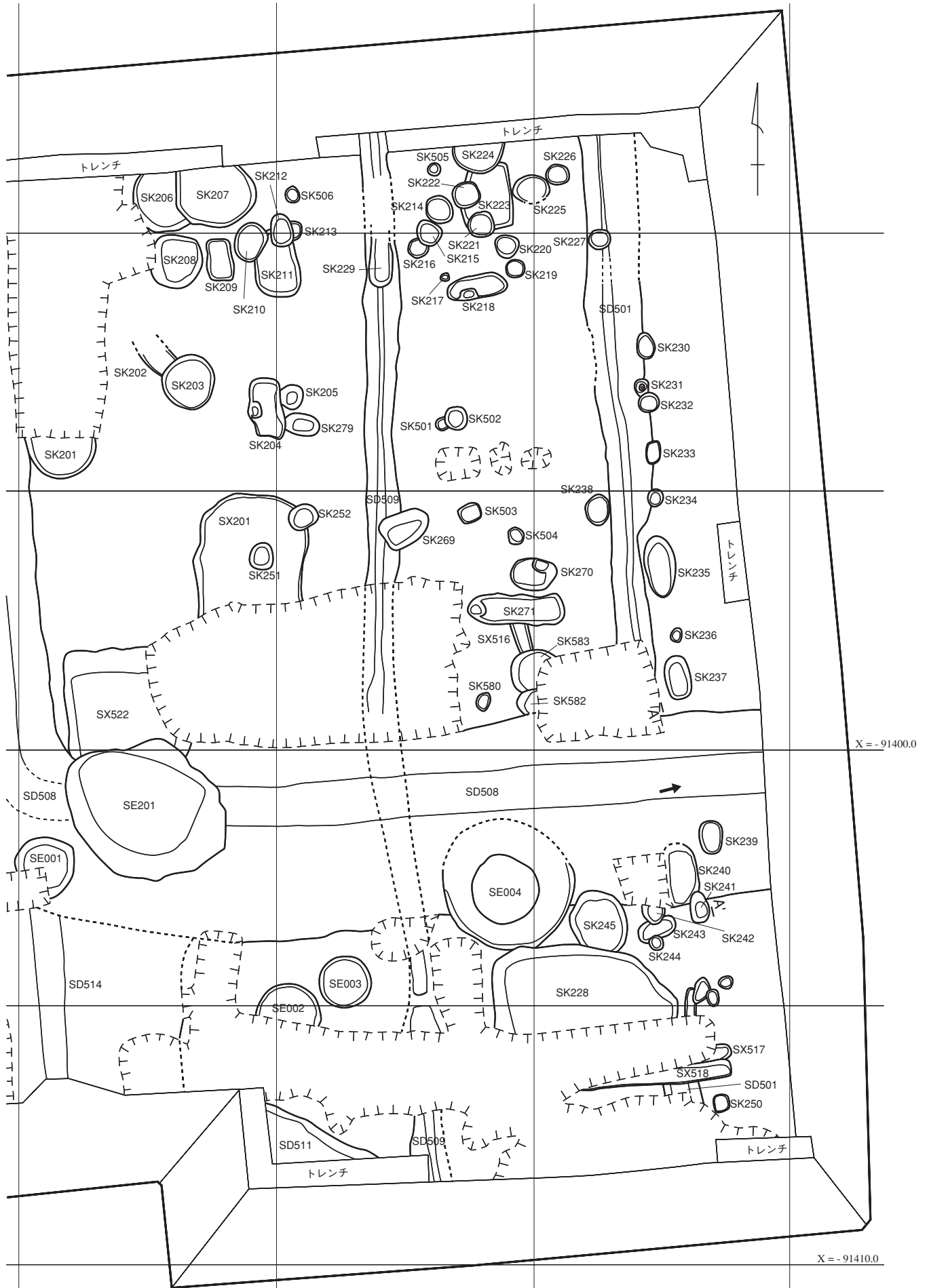


Y = - 24160.0

Y = - 24150.0



第12図 調査区中央部下面検出遺構図 (1/100)

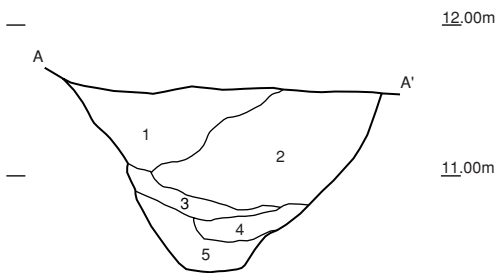


第13図 調査区東部下面検出遺構図 (1/100)

を切り、S K061に切られている。

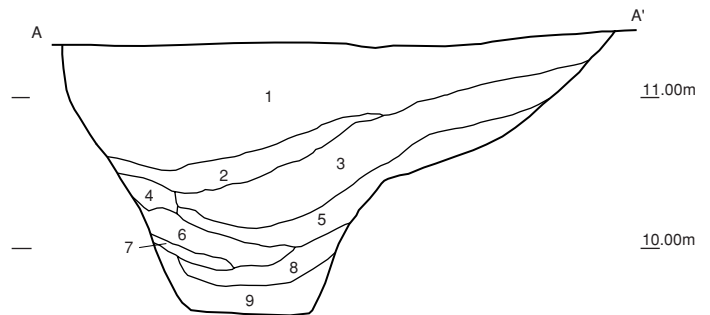
S X 020 調査区西のやや北側に位置する。検出高は11.7mを測り、残存長3.5m、深さは0.2mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とし、遺物18世紀末～19世紀中頃の陶磁器を主体とする。
S X019を切り、S K117に切られている。

SD505 セクション図（東より）



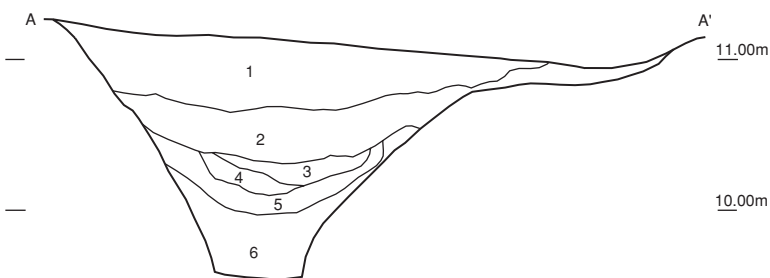
第1層 10YR5/6黄褐色シルト（ブロック状に堆積）
第2層 10YR3/2黒褐色シルト（黄褐色シルト含む）
第3層 10YR3/4暗褐色シルト（黄褐色シルト含む）
第4層 10YR5/6黄褐色シルト（ブロック状に堆積）
第5層 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（黄褐色シルト含む）

SD508 セクション図（西より）



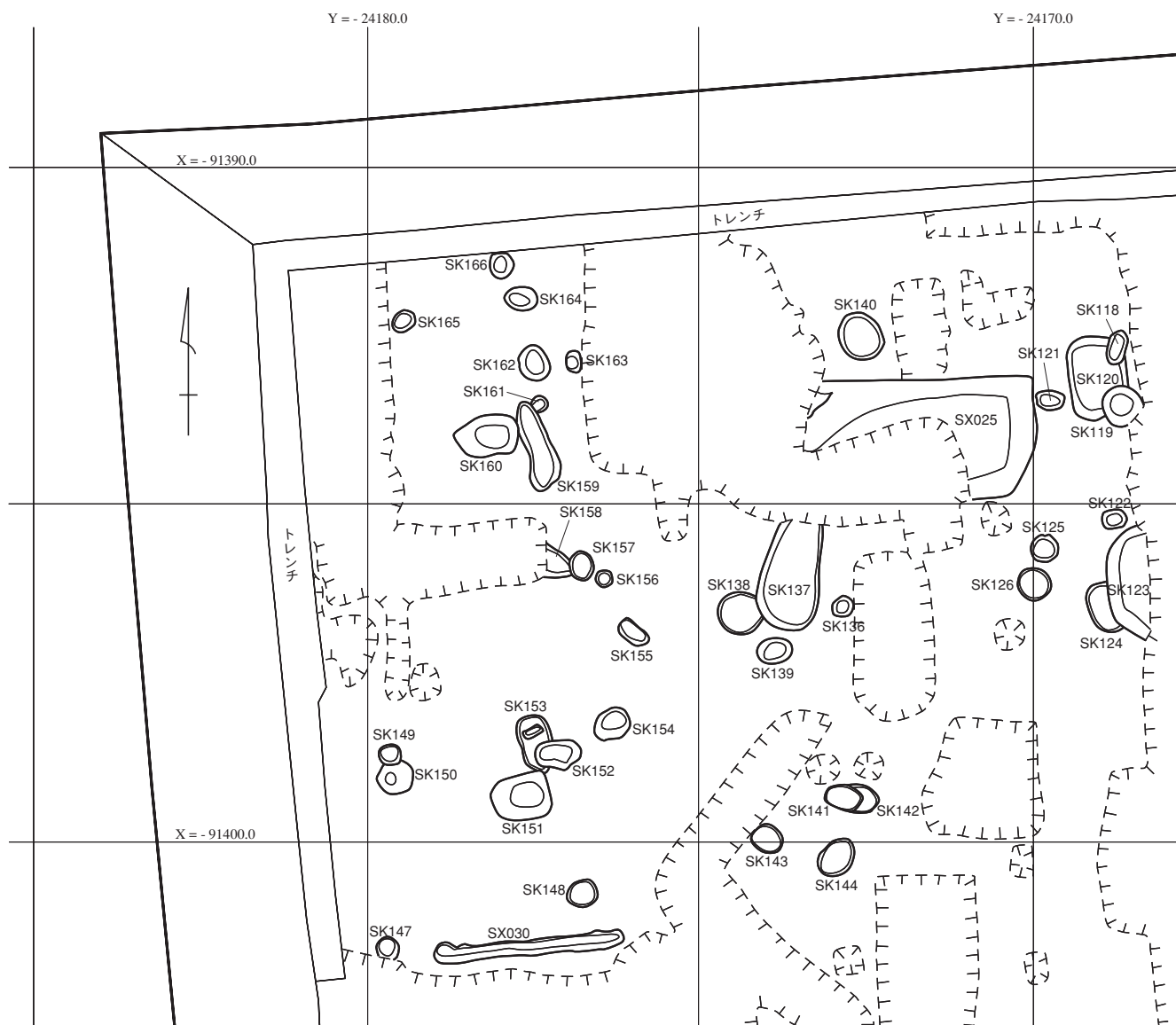
第1層 10YR1.7/1黒色シルト
第2層 10YR3/4暗褐色シルト
第3層 10YR5/6黄褐色シルト（暗褐色シルト含む）
第4層 10YR3/4暗褐色シルト（鉄分微量に含む）
第5層 10YR3/4暗褐色シルト
第6層 10YR3/2黒褐色シルト
第7層 10YR5/6黄褐色シルト（暗褐色シルト含む）
第8層 10YR3/4暗褐色シルト（黄褐色砂質土をわずかに含む）
第9層 10YR3/2黒褐色シルト

SD514 セクション図（南より）

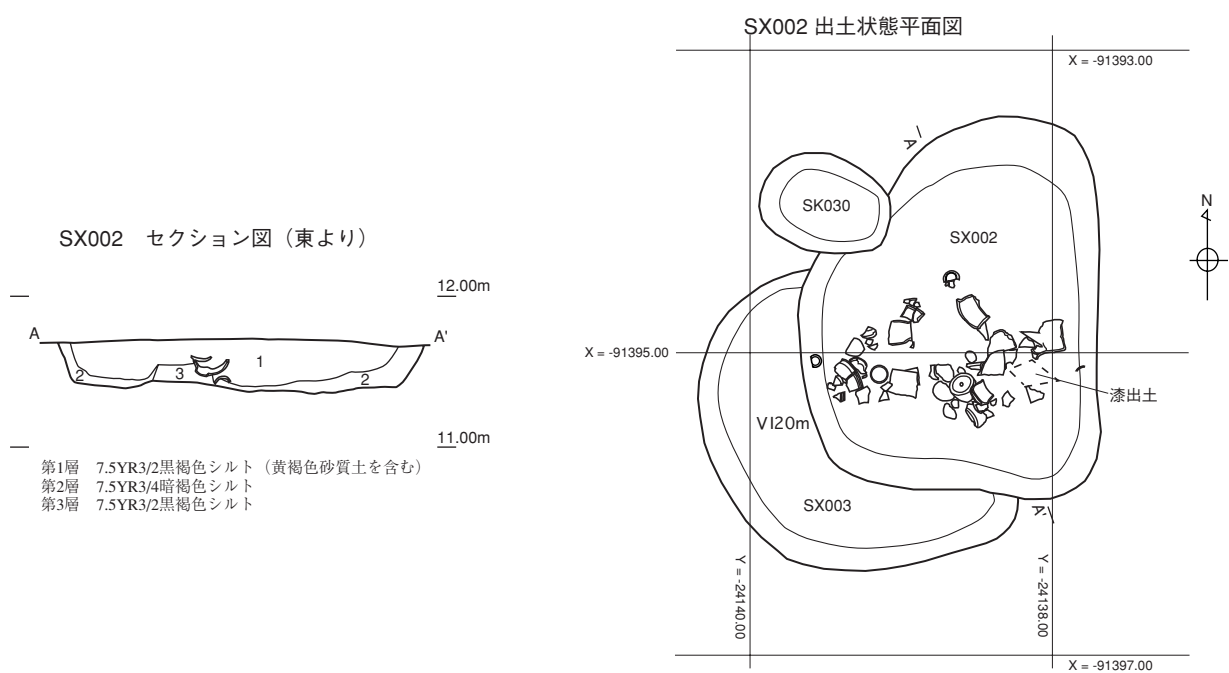


第1層 10YR3/4暗褐色シルト（ブロック状）
第2層 10YR3/4暗褐色シルト
第3層 10YR1.7/1黒色シルト
第4層 10YR3/4暗褐色シルト（黄褐色砂質土を含む）
第5層 10YR5/6黄褐色砂質土
第6層 10YR5/6黄褐色砂質土（ブロック状）

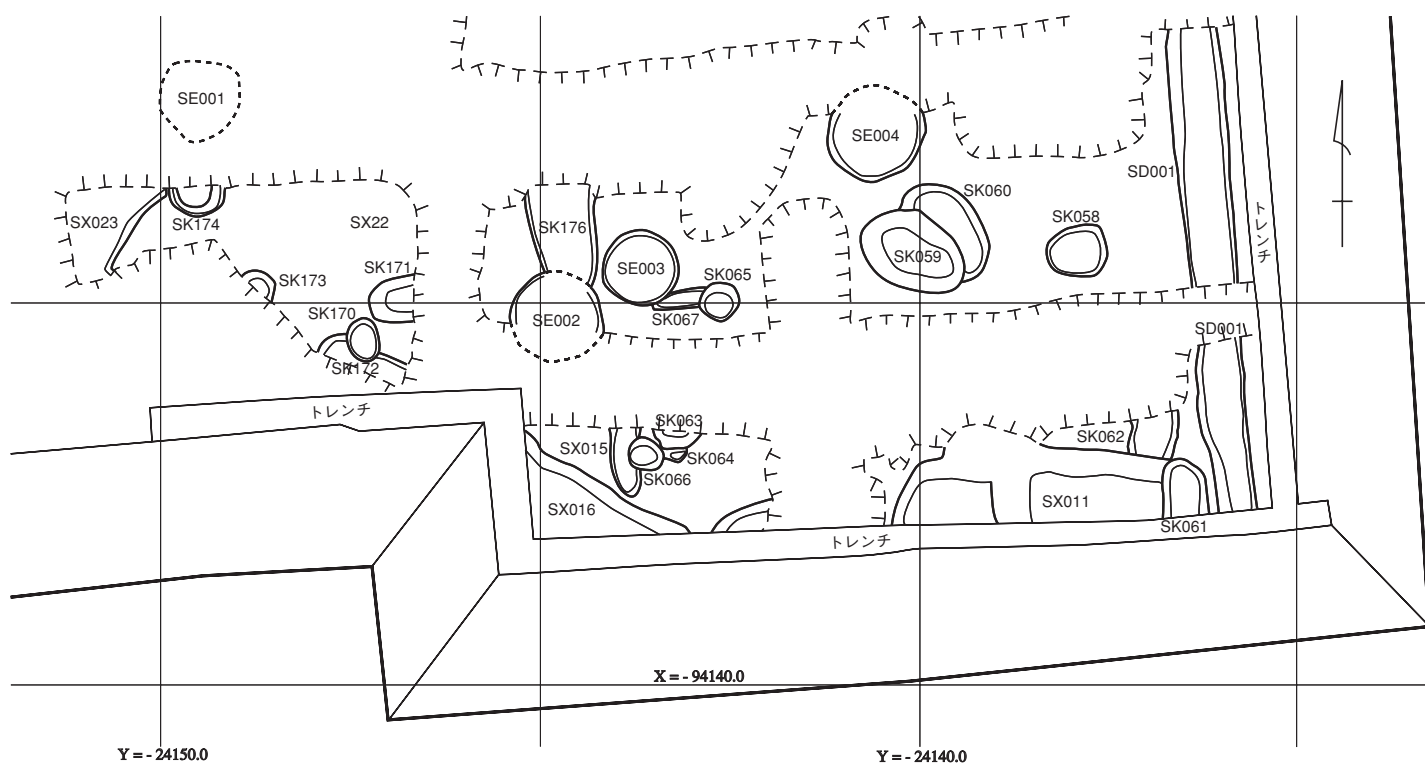
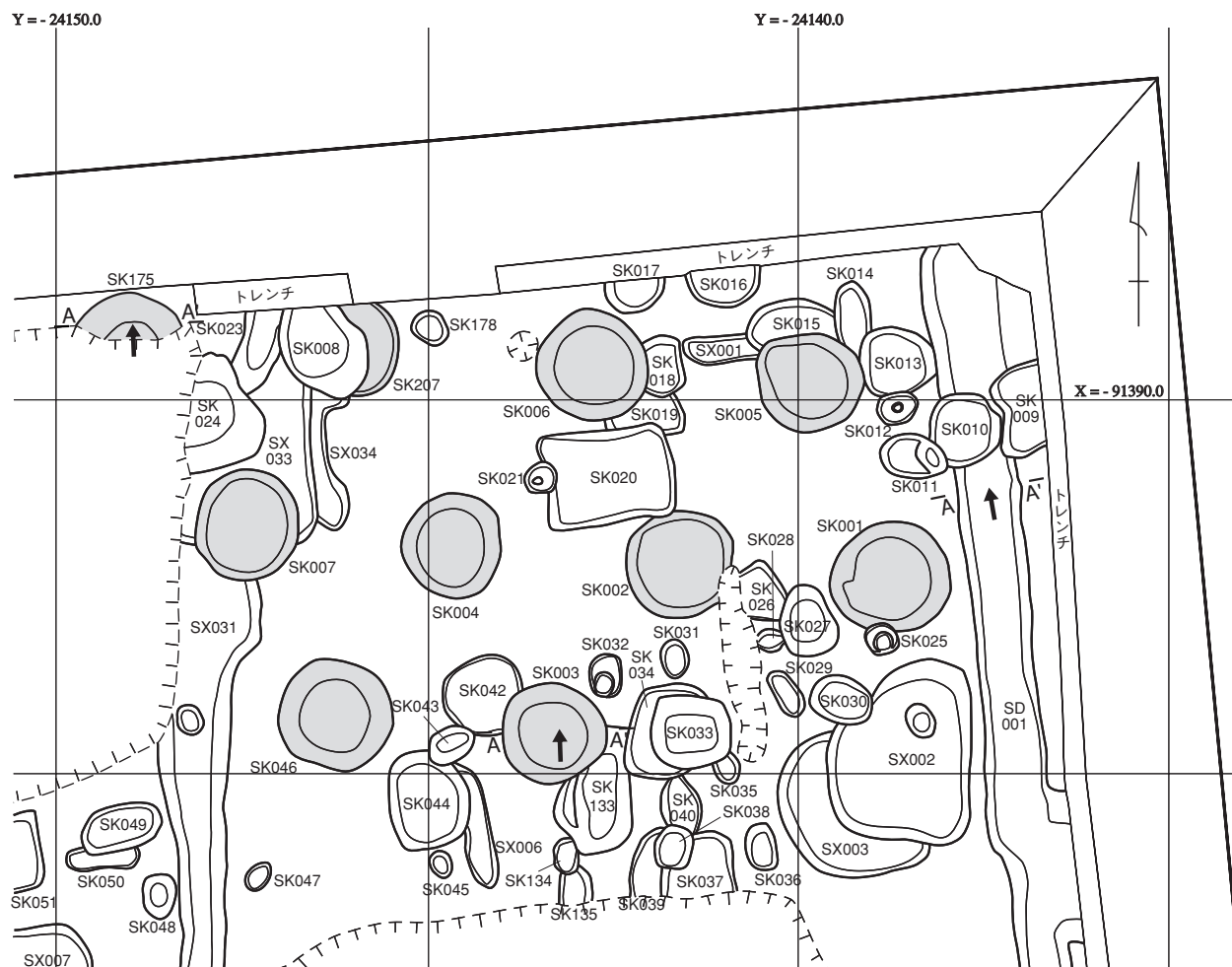
第14図 S D 505・508・514断面図（1/50）

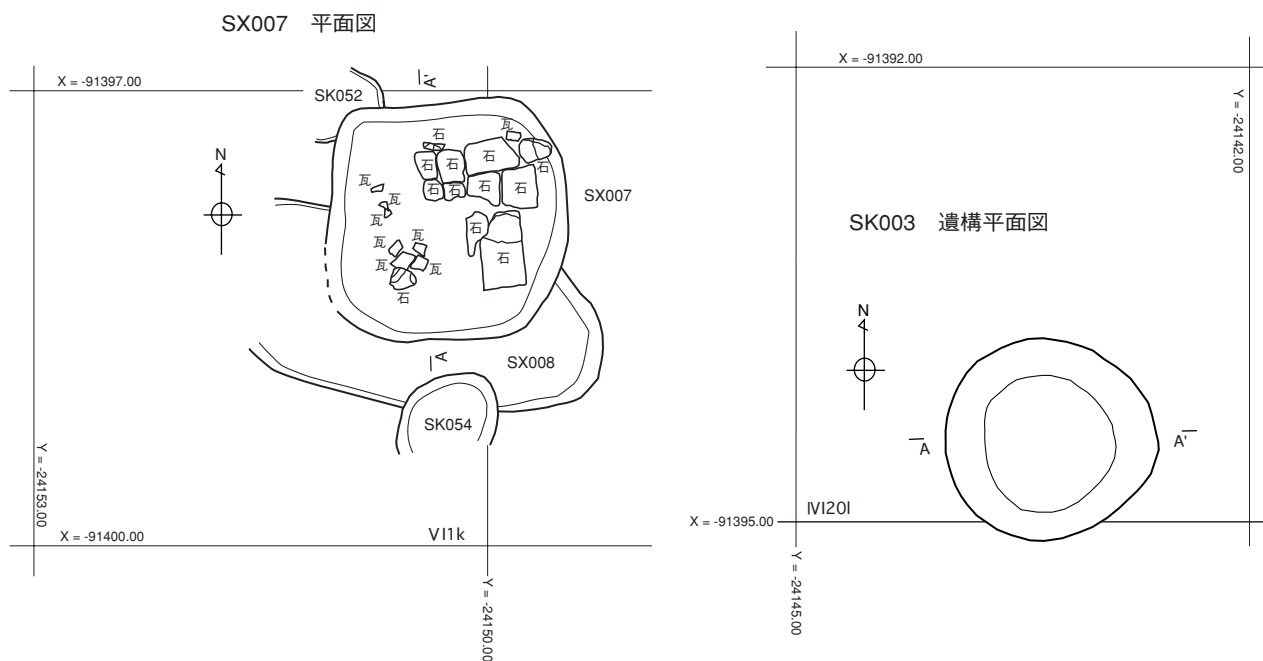


第15図 調査区北西部上面検出遺構図 (1/100)

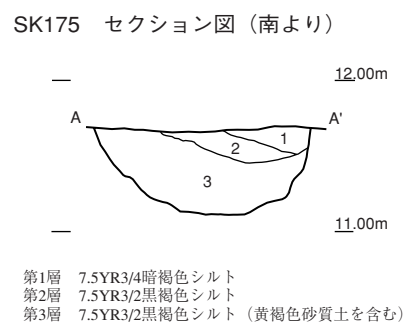
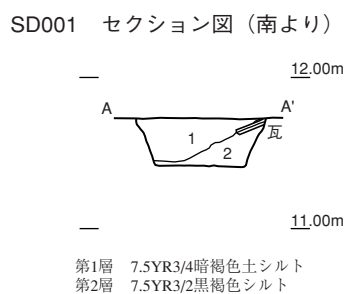
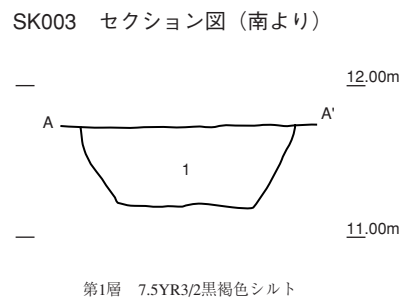
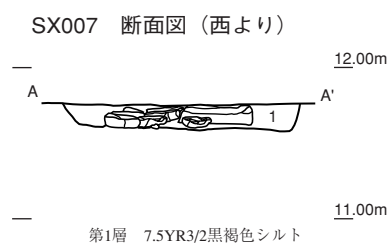


第16図 S X 002平・断面図 (1/50)





第20図 S X007・S K003平面図 (1/50)



第21図 S X007・S K003・S D001・S K175断面図 (1/50)

第Ⅴ章 遺 物

第1節 概 要

名古屋城三の丸遺跡における今回の調査地点で出土した遺物は、前述したように他地点と比較してかなり少ないものであった。遺物出土量において隣接する調査地点と単純比較すると、平成2年度調査地点では2800㎡でコンテナ550箱、今回の調査地点では1000㎡で80箱弱である。出土遺物の時期的な比率は近世のものが大半を占めており、古代・中世・戦国期の遺物量は比較できる比率にはなりえなかった。

本調査地点では、基盤層の起伏、数次にわたって行われた整地行為などにより、生活面としての安定した検出が難しかった。したがって、遺構の時期は層序的に判断が下しにくいものが多く、出土遺物による判断を優先した。ただしこの調査地点は、隣接地点と比較しても遺物の出土量がかなり少ない。その理由としては、廃棄土坑など遺物が大量にまとまって出土する遺構がほとんどみられないことが考えられる。このため、一括出土資料による細かい時期の把握は、限定された遺構のみで可能であった。

古代のものと思われる遺物は、埴仏片が溝跡から出土しているが、共伴遺物の状況から、溝の時期は後世のものと思われる。

中世の遺物は、陶器片が散逸的にわずかに出土しているが、特定の遺構で時期判断が可能なほどのまとまりはみられない。

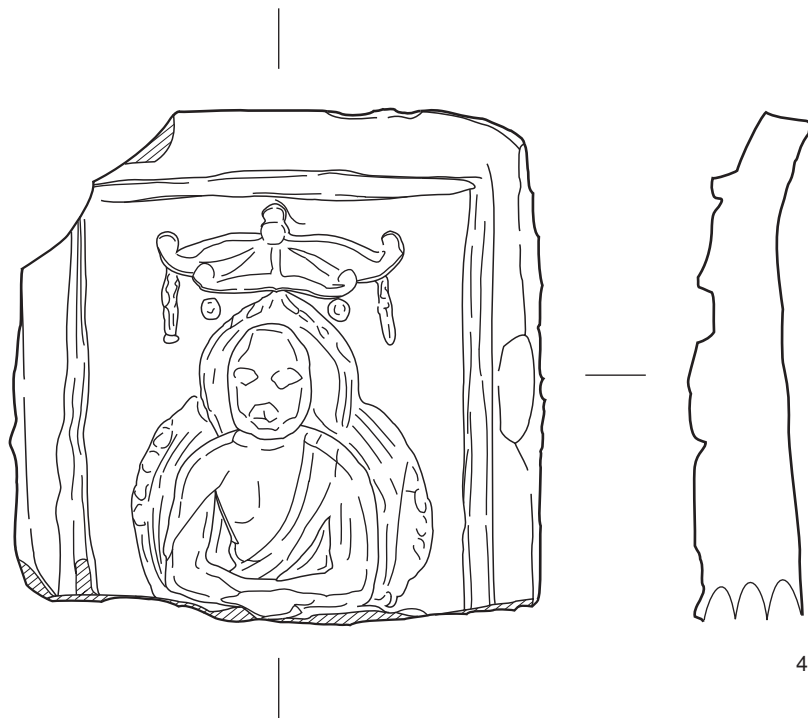
戦国期の遺物は、この時期以前の遺物と比べて量的には増加するものの、遺構の規模や存続時期などを考え合わせると少ないと思われる。溝を中心とした戦国期の遺構は、生活空間という概念では一括できない軍事的な特質もうかがえる。

近世の遺物は、全出土遺物の大半を占めるが、遺構に伴うものが少なかった。この中では少ないながらも、一時期に集中して廃品処理が行われたと思われる遺構もみられた。出土遺物は、名古屋城の所在地がこの時期における代表的な窯業生産地をひかえていたため、瀬戸・美濃産の陶器を中心とし、わずかながらも他地域の陶磁器が混じる組成を示した。遺構間の時期的な差については、取り上げられる一括資料が少なく、各遺構の切り合い関係による資料比較をほとんど成し得ないため、遺構の時期別に段階を設定することができなかった。

ここでは、時期の把握がある程度可能な代表的遺構出土遺物を説明し、さらに個別の器種等について、全体的に説明することとする。

第2節 主要遺構別出土遺物

S D 501 近世以前の遺構の中で、図化資料が複数あげられる数少ない遺構の一つである。1は仏供の底部片で、2はカマの体部片、3は折縁深皿の口縁部片である。これらの主要出土遺物は、14世紀末から15世紀中頃の瀬戸産陶器と思われる。4は埴仏の上部片である。胎土は灰白色で、焼成は硬質である。形状は長方形と思われ、埴面に一尊の仏像が陽出し、円光を背景にして両手を膝の上で組み、結跏趺坐を表したものであると思われる。遺構の主要出土遺物とは時期的に先行した、古代のものと思われる。



第22図 塙仏原寸実測図

- S D 505 戦国期の遺物が最もまとまって出土した遺構である。5は平椀で6～8は東濃型山茶碗の皿、9は端反皿、10は重圈皿、11は天目茶碗の底部片、12は土器皿である。13～15は播鉢片で、16は常滑の壺片、17は五輪塔片で空・風輪にあたるものと思われる。15世紀前半から16世紀後半までのものと思われ、瀬戸産の陶器が主体を成す。
- S E 003 近世の遺物がまとまって出土した遺構の中では、比較的古い様相を示したのが本遺構である。19は丸皿で見込み部に重ね焼き痕がみられ、20～22はいずれも播り目が少ない播鉢片、23はいわゆる「笠原鉢」である。17世紀後半から18世紀前半の陶器を主体とする。
- S K 176 24・25は美濃産の丸皿で、内側から外側体部まで灰釉がかけられ、25の見込み部には重ね焼き痕がみられる。27・29・32・33は播鉢の口縁部片で、27と33は口縁部が外側に段状に折り返されている。28は鉄絵鉢の底部片。30は茶入で、内外面に鉄釉が施されている。35～38は土器皿で、35以外は外側底部から体部及び見込み部に油煙によるススが付着しており、重ねて灯明皿として使用されたことがうかがえる。39・40は土製の鍋または焙烙である。本遺構出土遺物は、18世紀前半から中頃までの瀬戸産陶器が多くみられる。

- S X 011 41～47は陶器碗で、41・42・44は美濃産、43・45は瀬戸産である。41～44は腰部が丸みを持ち、41～43は灰釉が施され、44は錆釉の上から灰釉が流しかけされている。45・46は体部から口縁部にかけて直立し、腰部にはっきり稜線が入る。46は信楽産と思われ、外側に鉄絵が施されている。47は内側に斑状の刷毛目、外側には三島手状の花文が施されており、肥前産と思われる。48～53は陶器皿である。48はいわゆる「菊皿」で、内側から外側体部にかけて油煙によるススや焦げ付いた付着物が残存することから、灯明皿として転用されたものと思われる。49・51～53は摺絵皿で、49・52が瀬戸産、51・53が美濃産と思われる。54は陶器餌播鉢である。58は美濃産の陶器徳利で、底部を除く外側全体から内側体部にかけて、錆釉が施されている。59は猪口で外側に赤絵が施されている。60～62は磁器である。61は高台内に「大明成化年製」銘が呉須で記され、口錆が施されている。62は高台内に方重枠に渦福が記され、内外には唐草が染め付けられている。61・62は肥前産と思われる。63は陶器の盤である。64は陶器甕の底部片と思われるが、高台の内側には「大火入」と墨書されている。65・66は焼塩壺蓋、67は同身である。65の外側上面には「鷲坂」銘、67の外側には「泉湊伊織」銘と思われる刻印が押されている。68～72は、土器皿である。いずれもロクロ成形で、油煙によるススまたはタールが付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。73・74は焙烙、75・76は鍋、77は茶釜と思われ、いずれも素焼きで73・75は口縁部断面の形態がY字状を呈する。本遺構出土遺物は、全体的には18世紀前半から中頃までのものが主体を成すが、焼塩壺の刻印などにより、18世紀中頃から後半にかけての時期が推定される。
- S K 228 78は瀬戸産の陶器丸碗。79は京焼系陶器底部片で、高台内側には「清水」銘の刻印がみられる。80は瀬戸産の灯明受け皿である。81は美濃産のびん水入れで、外側に鉄絵が施されている。84・85はミニチュアの陶製品で、84は茶釜形羽釜、85は合子象ったものと思われる。86は花瓶で口縁部は開かず、外側上半部には鉄釉が施されている。87・88は魚象ったミニチュア製品で、土製の87は緻密な灰白色の胎土で、尾の基部裏側には一重枠内に「・光山」と記された刻印が認められる。88は陶製で灰釉が施されている。89は水盤で底部を除いて灰釉が全体にかけられている。91は陶器大皿または鉢の底部片で、内側には三島手状の施文がみられ、肥前産と思われる。92～94はいずれも瀬戸産の陶器甕で、93は焼成後に底部が穿孔されており、植木鉢として転用された可能性が見出せる。95は常滑産の真焼の甕、96は瀬戸産のこね鉢、97は風炉で底部には焼成後に2ヶ所小径の穿孔がなされている。98は常滑産の壺である。99～105は磁器で、100の小碗は見込み部に松竹梅繋ぎが呉須で描かれている。101・102は筒茶碗で、102には見込み部に五弁花が描かれている。103は寿字を外側に配した蓋、104は紅皿である。いずれも肥前産磁器と思われる。108～110は焼塩壺の身である。108・109には内側に粗い編目がみられ、板作り成形時の芯を覆ったものの痕跡と思われる。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀前半のものが主体を成す。
- S K 204 111～114は陶器碗である。111は瀬戸産のいわゆる「奈良茶碗」、112は美濃産のいわゆる「柳茶碗」、113は外側の下部に錆釉をかけた腰錆の碗である。115は灯明皿、116は型作り成形の皿、117は美濃産の鉢である。122は瀬戸産の灰落としと思われ、外側高台脇から

内側口縁部脇まで灰釉がかけられており、口縁残存部は全面が細かく施釉が欠けており、煙管等の敲打による欠損と考えられる。123は染付の磁器碗で、断面形態がやや厚手で腰部が丸みを帯びており、外側には草花文が施され、高台内には「大明年製」銘を崩したものが記されており、肥前産と思われる。124は染付の小瓶で、外側には笹文・梅文が描かれている。125～131は素焼き製品である。126は土鈴片である。127・128は焼塩壺蓋、129は同身で、蓋には側面に凹線状の沈帯がみられ、木型の年輪による可能性がうかがえる。蓋・身ともに無印と思われる。130・131はミニチュア土製品で、いずれも鶏を象ったものと思われる。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀前半のものが主体を成す。

S X 020 132～134は陶器碗である。132は京都産のいわゆる「黒楽」で無印と思われ、筒形の体部下方は極端に器壁が薄く鉄釉が全面にかけられている。133はいわゆる「小杉茶碗」で、体部が口縁部にかけて直線的で、信楽産と思われる。134は瀬戸産の天目茶碗片である。135はひょうそくで、芯立て部分が欠損している。136・137はミニチュア陶製品で、136は茶入れのように内側から外側体部下半まで鉄釉がかけられている。137は土瓶を象ったものと思われ、灰褐色の緻密な胎土に緑釉がかけられている。いずれも胎土の特徴などから、産地は当地域以外と思われる。138・139は陶器皿片で、138は美濃産の摺絵皿である。139は内側に鉄絵・呉須絵が描かれ、高台内に「清・」銘の刻印が押されていて、信楽産の可能性が考えられる。140は瀬戸産の小型播鉢である。144は磁器染付の瓶片で、肥前産と思われる。145は土器皿で、底部中央が焼成後に1ヶ所穿孔されている。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀前半のものが主体を成すが、他の遺構と比較して、当地域以外の生産品（132・133・136・137・139・143・144）と思われるものの比率が高い。

S K 262 146～148は陶器碗である。いずれも丸腰で、146は外側体部下方から高台内にかけて錆釉がかけられた「腰錆湯呑」である。147は外側高台脇から内側全体にかけて、灰釉がかけられている。148は内外面に鉄絵で賽の目文が描かれ、内外の口縁部脇には呉須による帯が描かれている。焼成後に見込み側から1ヶ所底部穿孔されており、植木鉢として転用された可能性もうかがえる。149は小型の陶器片口碗で、外側高台脇から内側全体にかけて、錆釉がかけられている。碗、片口ともに瀬戸産と思われる。151は陶器鍋、153は半胴甕である。156はミニチュア土製品で、灯籠の基部を象ったものと思われる。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀中頃のものが主体を成す。

S D 001 157は陶器碗で、瀬戸産のいわゆる「箱形湯呑」である。159～162は陶器灯明具で、159は瀬戸産の灯明皿、160は美濃産の灯明受け皿、161は信楽産の灯明受け皿、162は瀬戸産の壁掛け用灯明具である。164は土瓶を象ったミニチュア陶製品で、体部外側の上半には透明釉に緑釉が散らしてかけられている。165は瀬戸産の陶器火鉢で、内側口縁部脇から外側下半まで鉄釉がかけられ、残存口縁部は施釉部がすべて敲打による細かい剥離によって欠損している。166～170は陶器蓋である。171～173は素焼き製品で、171は菅原道真を象ったと思われるミニチュア土製品、172は焼塩壺身片、173は緻密な胎土の筒形土器片で、外側には金・朱色の絵付けで花文と思われる文様が描かれている。174～176は磁器で、174の染付碗は、外側に古木梅と思われる絵付けが施されている。175は口縁部俯瞰が八角形を呈する染付鉢で、外側には唐草文が、内側には窓絵が施され、ガラス継ぎが成さ

れている。176の碗には、外側に菊と蝶が描かれている。177・178は軒棧瓦である。いずれも左巻き三つ巴で12の珠文ともにシャープである。178の中心飾りには三葉に7個の珠文が入る。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀中頃のもものが主体を成す。

S E 201 179・180は陶器碗である。179は美濃産のいわゆる「柳茶碗」、180は瀬戸産のいわゆる「広東碗」である。183・184は播鉢で、183には播り目の上部に「丸に大」の刻印が認められる。188は陶器のいわゆる「行燈皿」で、上面には鉄絵が描かれており、全体的に油煙によるススが付着している。189は磁器碗で、見込み部には寿字文、外側には連子格子に車・蝶文が描かれている。190は石製の挽臼、191は石製の硯である。192～195は瓦類で192は丸瓦、193・194は軒棧瓦である。193は中心飾りに三葉に7個の珠文が入り、「丸に一」の刻印が認められる。194は左巻き三つ巴で12の珠文が巡る。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀中頃のもものが主体を成す。

S X 002 196は瀬戸産の陶器碗、197は錆釉がかけられた美濃産の灯明皿、198は口縁部が波状を呈する「ひだ皿」である。199は美濃産の陶器鍋で、把手には安定のためか片側に1孔、反対側に3孔の吊り手用と思われる穴が空けられている。201は美濃産の水注で、外面には花文の摺絵が施されている。202・203は瀬戸産の合子蓋と身で、いずれも灰釉がかけられている。208～211は瀬戸産のひょうそくである。213～215は瀬戸産の半胴甕である。216・217は瀬戸産の植木鉢である。218は肥前産の磁器猪口で、見込み部に寿字文、外側には算木文が描かれている。219は色絵の磁器向付である。221は輪違い瓦と思われる。本遺構出土遺物は、18世紀後半から19世紀中頃のもものが主体を成す。

第3節 器種別出土遺物

224～252・254～258は陶器碗である。224の東濃型山茶碗のような中世遺物から249のような幕末の広東碗まで様々な時期、器形が認められる。器形の上では225のように直線的に開く平碗、227～233のいわゆる「天目茶碗」、234～243のように腰部が丸みをもつ丸碗系各種、245～247のように高い高台の脇から直線的に広がる広東碗などが主体となる。瀬戸産の製品が多い中で、254～258のような信楽産と思われる碗も認められる。

259～288・291～301は陶器皿である。260～263の東濃型山茶碗類の皿といった中世遺物から近世後期の製品まで様々な時期、器形が認められる。皿については用途によって規格や器形が多様である。264～271は長石釉がかけられた志野皿で、272～278の灯明皿も含めて腰部が丸みをもつものが多い。298・299は無高台の底部が広い「行燈皿」で、300は内側に渦文を繋いだ「馬の目皿」、301は「石皿」である。瀬戸産の製品が主体を成す。

302～335は陶器鉢である。302～305は15世紀代のもと思われる播鉢で、いずれも小片であり、307は同時期のもと思われる折縁深皿である。308～327は織豊期～近世の播鉢で、いずれも瀬戸産である。328・330は鉄絵が描かれたもの、329は鉄釉・長石釉のかけ分けられた浅鉢である。

336～363は用途に見合った器形を有する陶器である。344・345は瀬戸産の土瓶、346は同油注ぎ、347は柄杓、354～358は餌入れ、361は唾壺、363はびん水入れである。

364～388・391～395は陶器蓋である。セットで出土することがほとんどないため、セット関係が確実

視できるもの以外は一器種としてまとめて掲載した。365～368・370・380・382のような落とし蓋と369・372～379・381・384のように高台状の掛け部をもつもの、364・371のように掛け部が一体となったものがみられる。瀬戸産が大半を占める。

398～403はひょうそくで、398～400のような台付きのものと、401～403のような無台のものがみられる。重ねて使わずに単品で使用できるため、その簡便さが近世後期に広く普及することとなった。

404はミニチュア陶製品で、灰釉がかけられており鶏を象ったものかと思われる。405は竜頭を象った陶製品で、頸部裏側には焼成前に1ヶ所穿孔されており、筒状の頸部に芯となる棒を挿して穿孔部から留め具を打って使用したことがうかがえる。

420～427は陶鍾である。いずれも筒状の体部中ほどがやや肥大する断面形状を呈し、「×」印がつけられたものもみられる。

428・429は磁器の碗である。いずれも広東碗で、見込み部には五弁花を模したと思われる文様が、外側には花文等が呉須で描かれている。

431～443は磁器碗である。432～437・442のような腰部が丸みを帯びたものが多く、434・436・437・440のように器壁が厚みをもつ、いわゆる「くらわんか」茶碗である。439のような高台、441のような口縁部が端反りを呈するもの、438・443のように筒形・箱形と呼称される、垂直に立ち上がる断面形態を呈するものもみられる。434～440は肥前産と思われる。

444～449は磁器染付皿である。444は内面にやや崩れた窓絵が描かれている。445・446は波状口縁の皿で、445には牡丹唐草文、446には山水一屋図が描かれている。448には見込み部に印判手の五弁花が描かれている。449には見込み部に梅繫ぎ文、その周囲に牡丹唐草文、高台内には渦福が描かれている。

457～471は土器皿である。457のみ手づくね成形の製品で、その他はロクロ成形である。口縁部にススが付着しているものが多く、灯明皿として使われたことがうかがえる。464の外側底部には墨書で「東」と記されている。

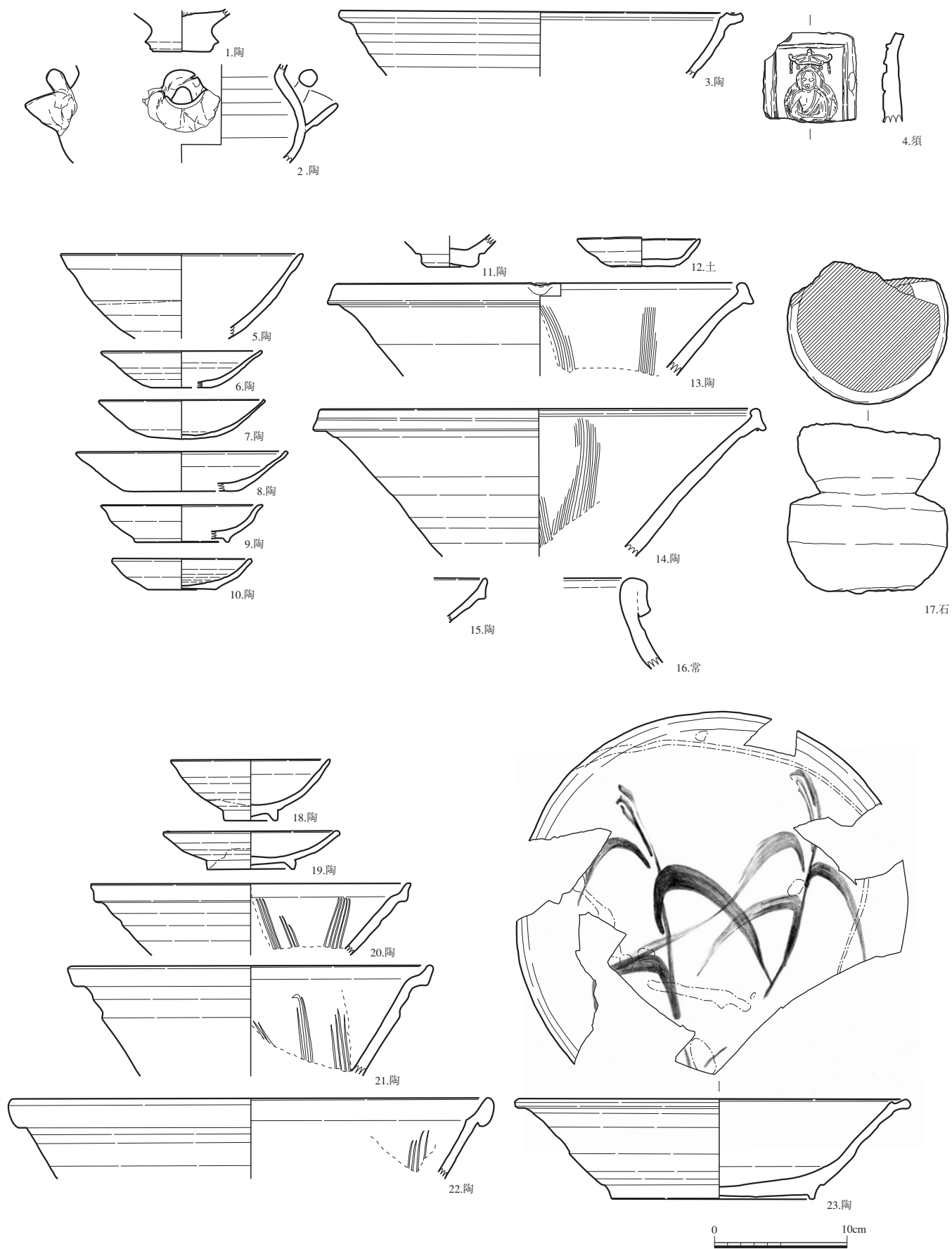
472～476は土器の鍋・焙烙・羽釜で、いずれも器壁が薄い。472・473・475の口縁部断面は、Y字状を呈し、いずれも指頭圧痕による整形が顕著である。

479～481はミニチュア土製品及び土製玩具である。479は片口のミニチュア、481は台座付きの狐を象ったものと思われる。480は土製の独楽で、心棒を差し込むための孔が設けられている。

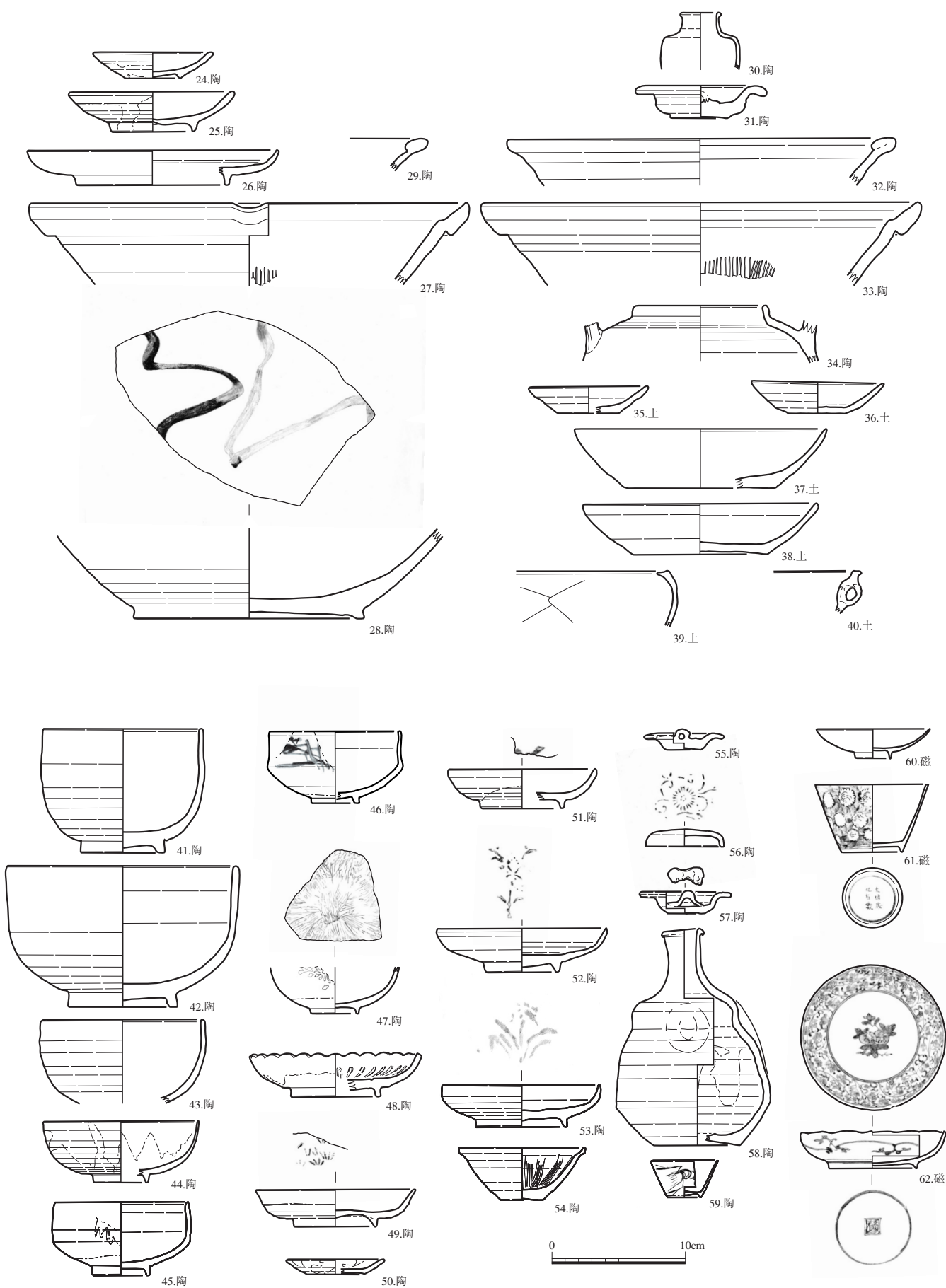
484～488は焼塩壺身、489は同蓋である。484・487は器形に比して器壁が極端に厚く、容量は少ない。485は板作り成形で、外側体部には、一重枠に「泉湊伊織」銘の刻印が押されている。486・488は輪積み成形で、486は無印であることが確認できる。

490～492は瓦類で、490・492は軒丸瓦、491は軒棧瓦である。490は左巻き三つ巴で12の珠文が巡るものと思われる。491は中心飾りには三葉に7個の珠文が入るものと思われ、左巻き三つ巴で15の珠文が巡る。

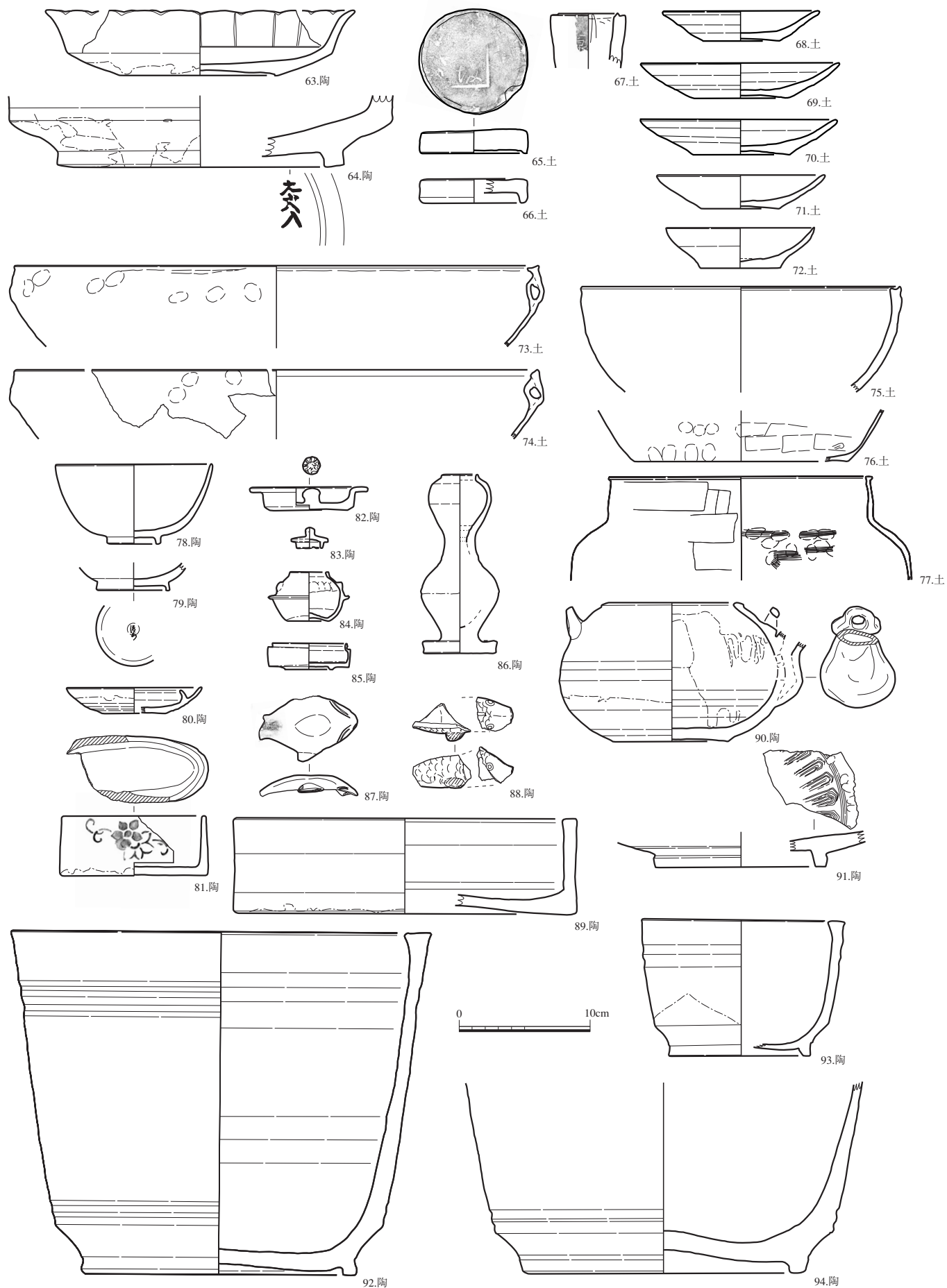
498～503は銭貨で、いずれも銅貨で、498以外は「寛永通寶」である。498は「大観通寶」で、北宋銭またはその模鑄銭である。500・502が古寛永、499・501・503が新寛永と思われる。



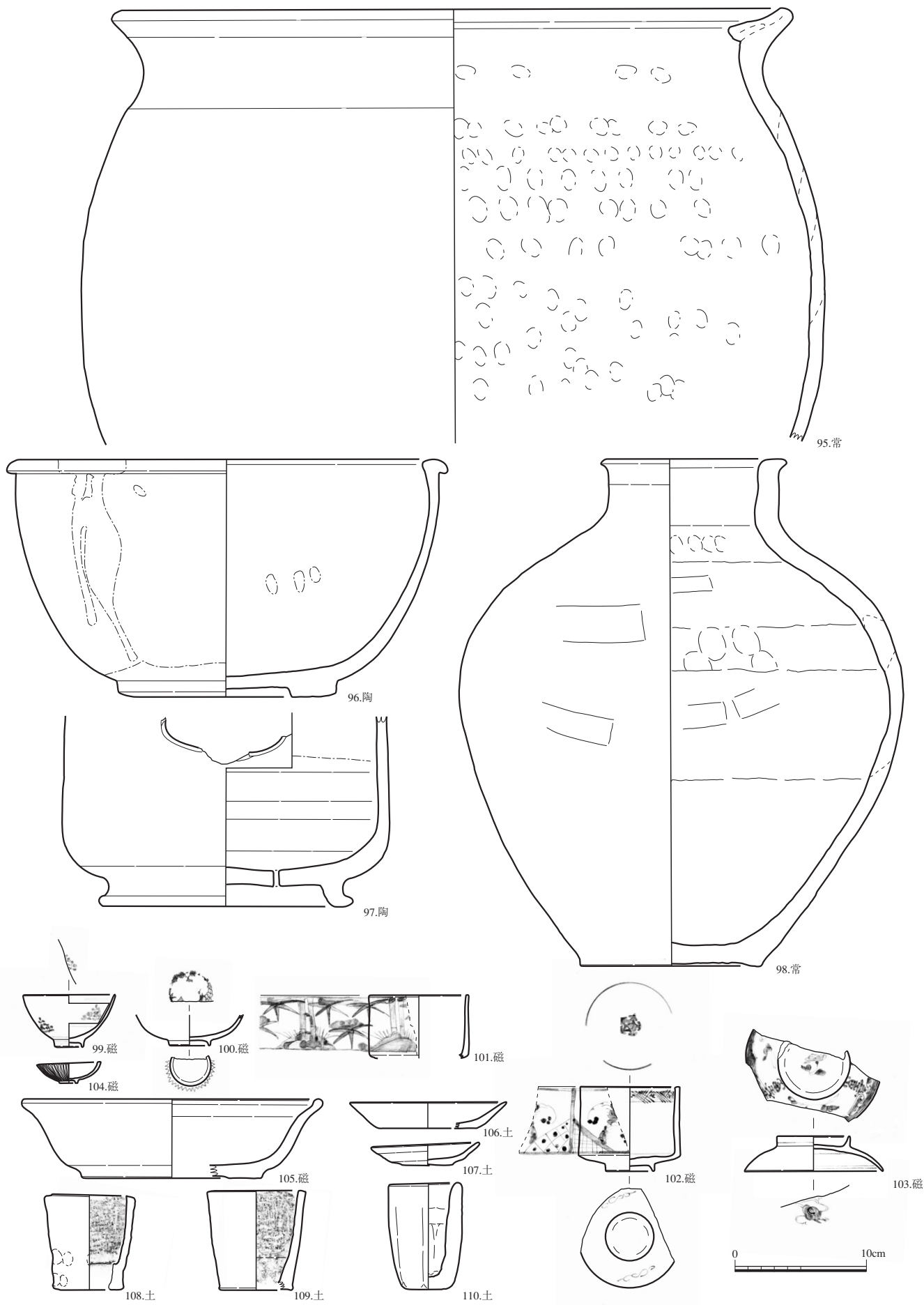
第23図 出土遺物実測図1 (S D501・S D505・S E003)



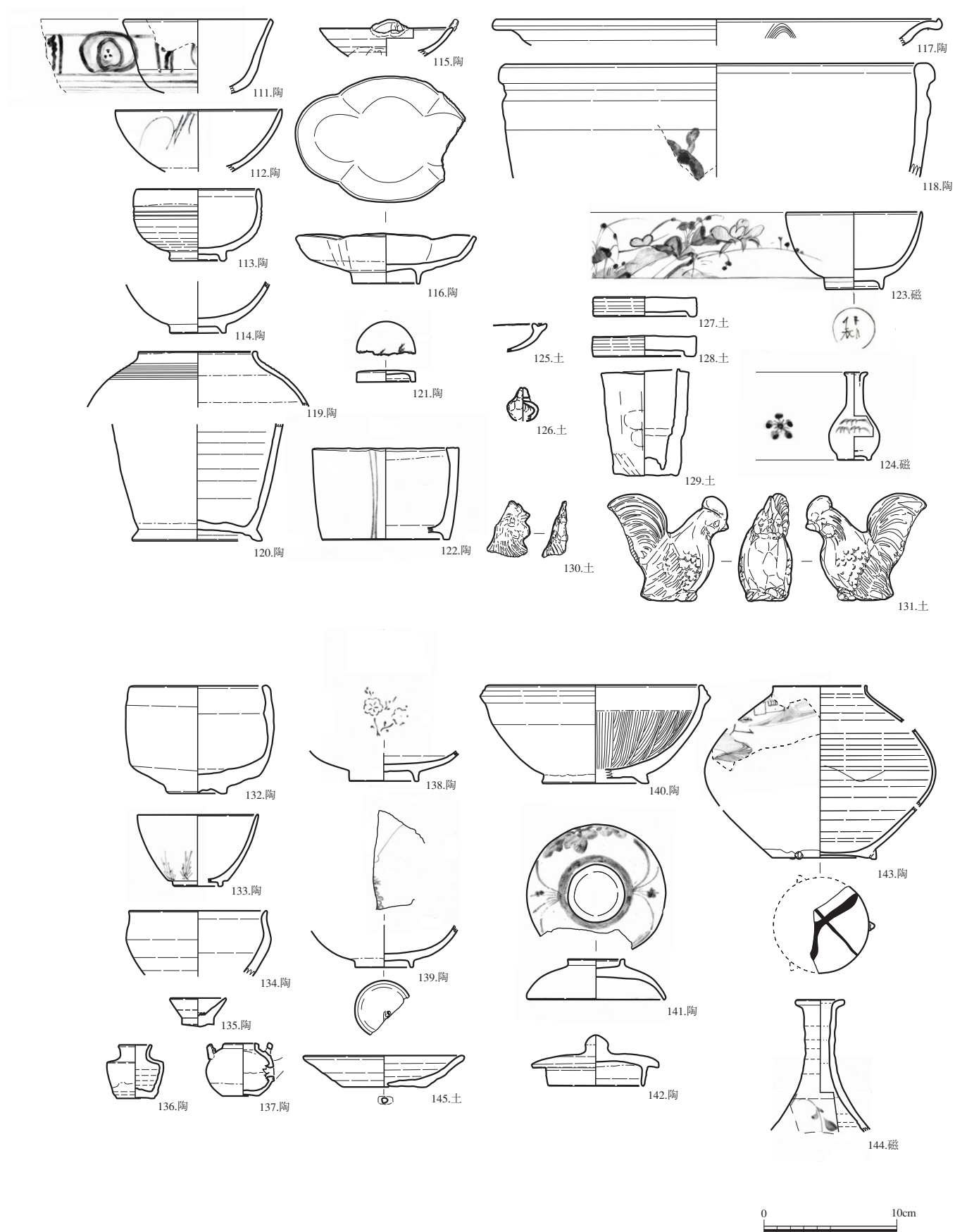
第24图 出土遗物实测图2 (S K176 · S X011)



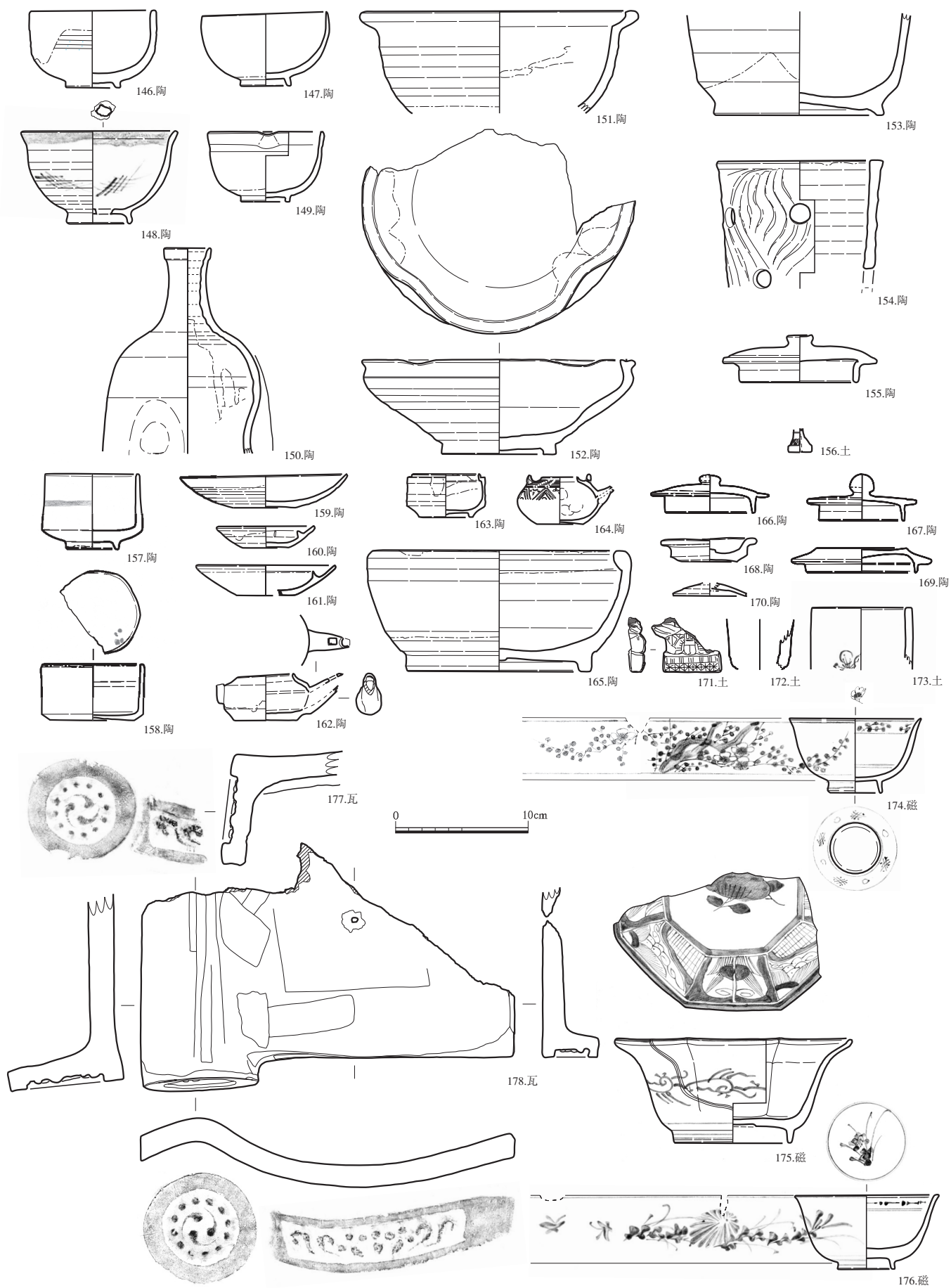
第25図 出土遺物実測図3 (S X011・S K228)



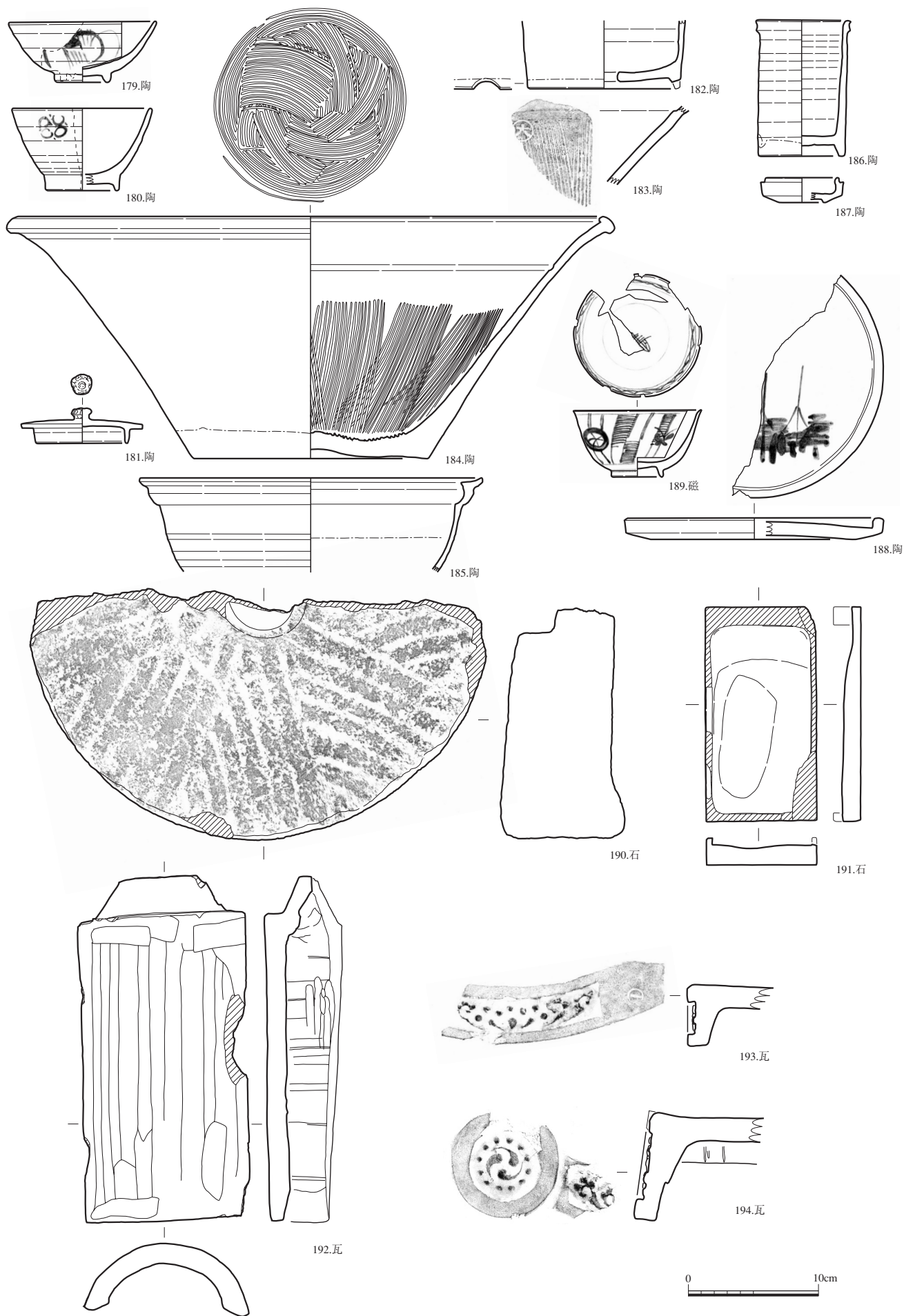
第26図 出土遺物実測図4 (S K228)



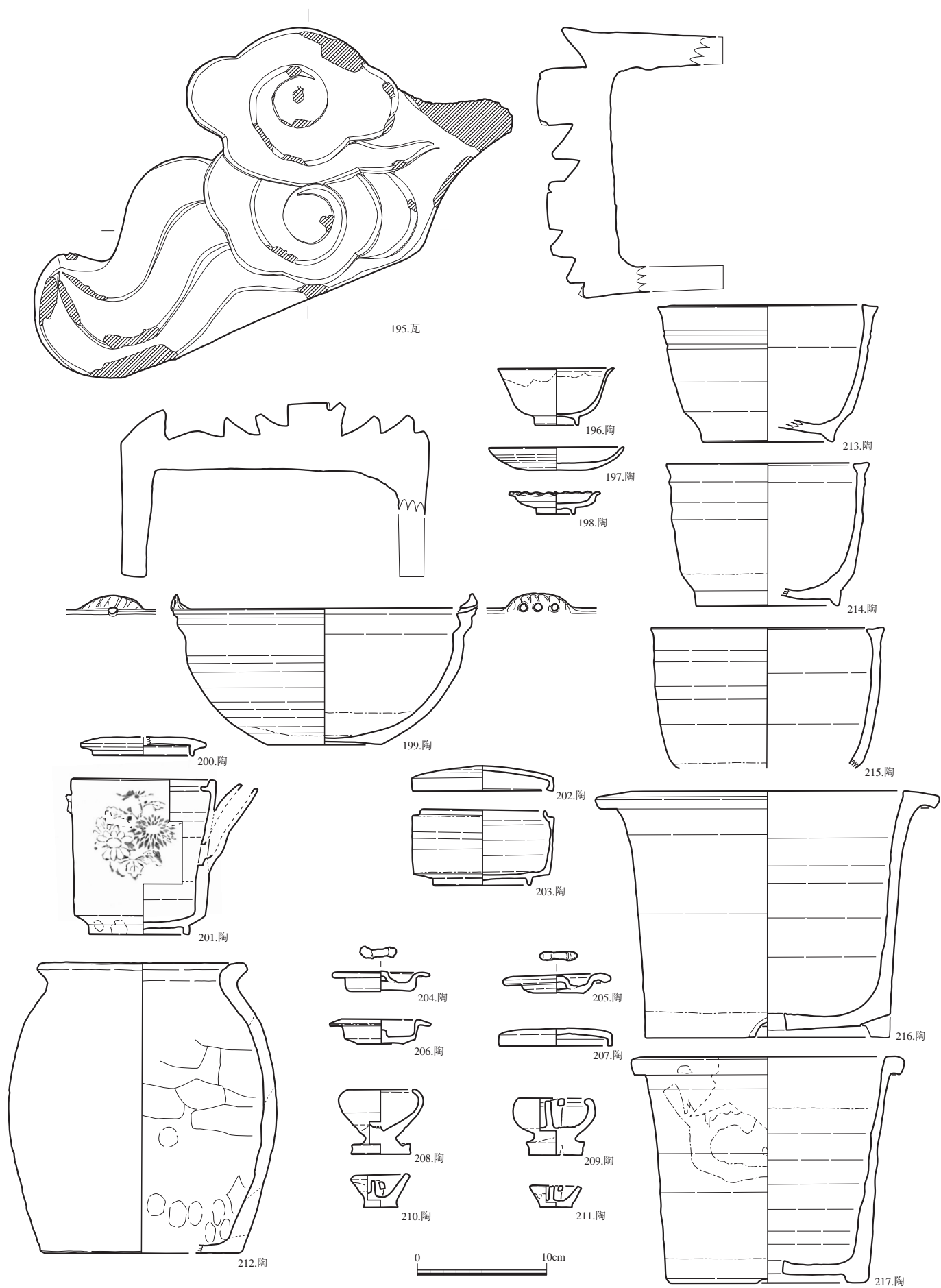
第27図 出土遺物実測図5 (S K204・S X020)



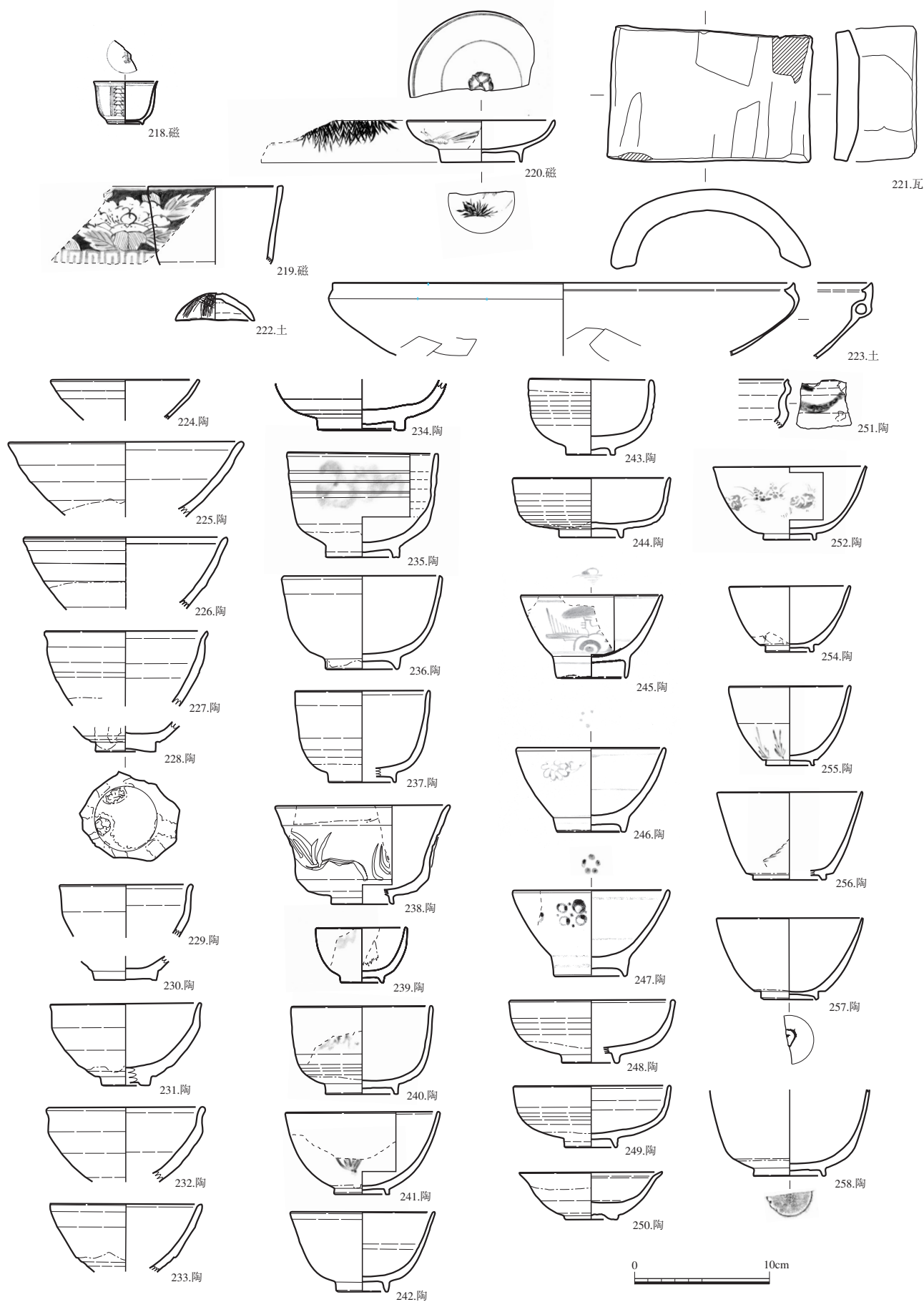
第28図 出土遺物実測図6 (S K262 · S D001)



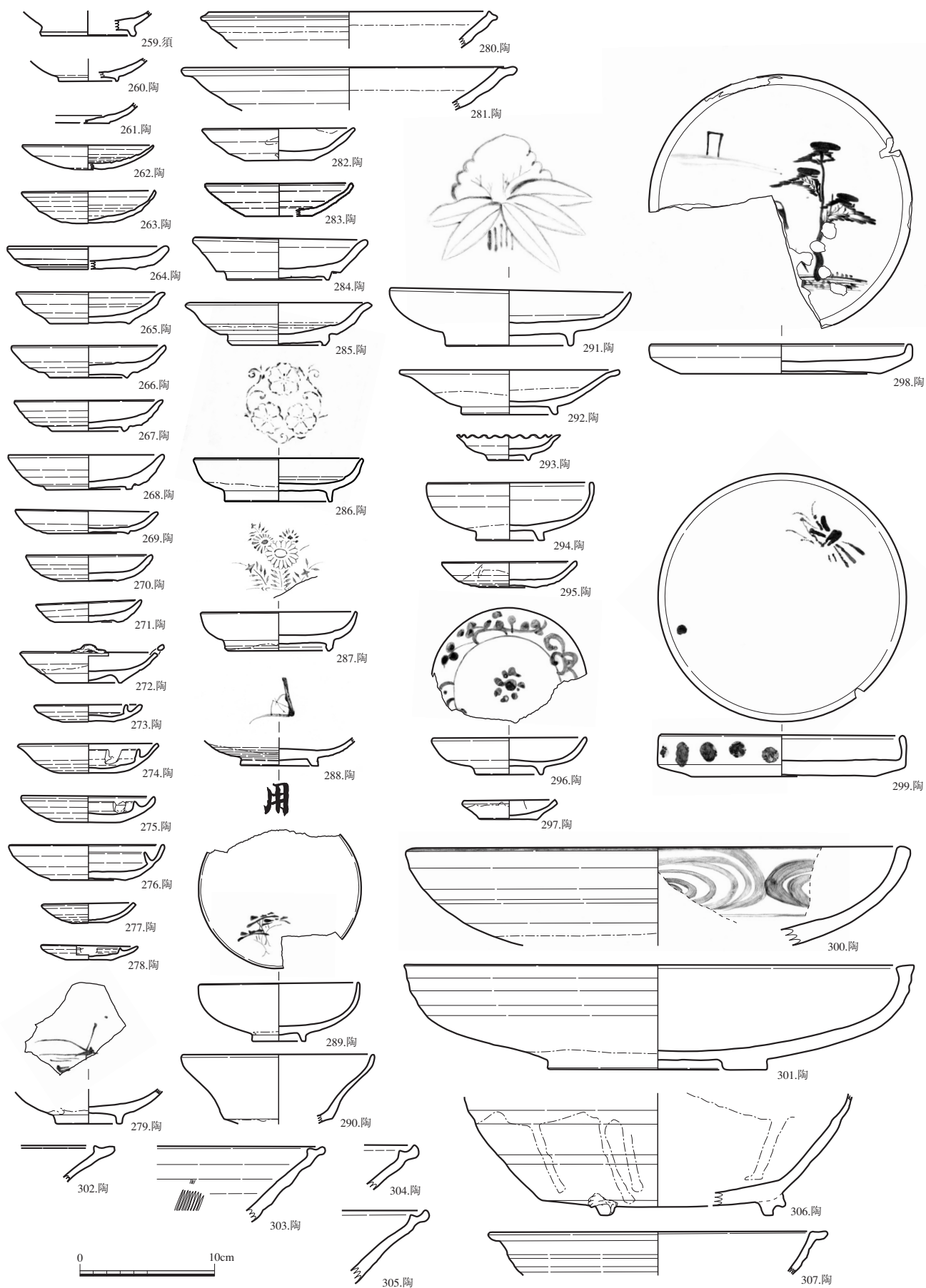
第29図 出土遺物実測図7 (S E 201)



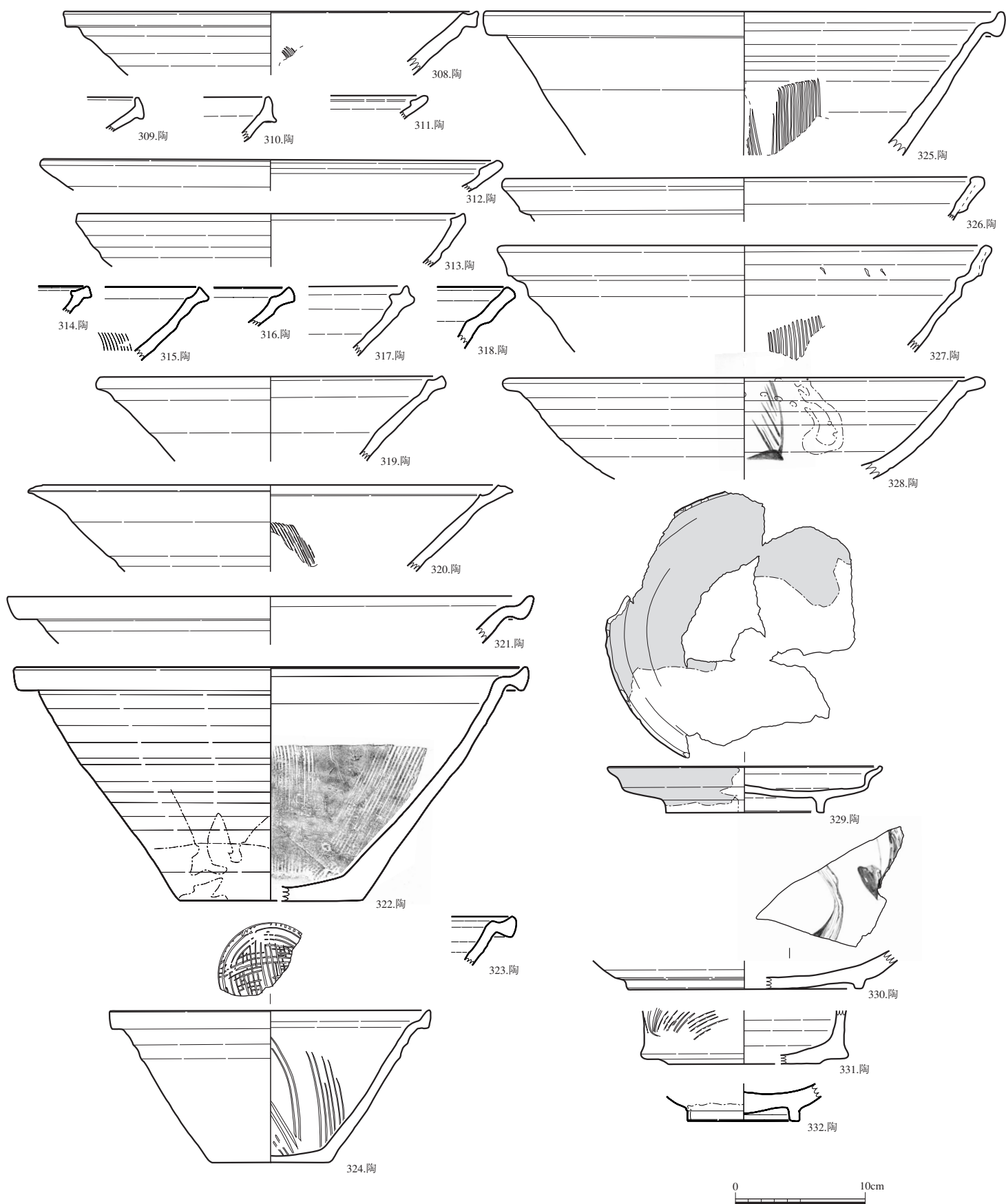
第30图 出土遗物实测图8 (S E201 · S X002)



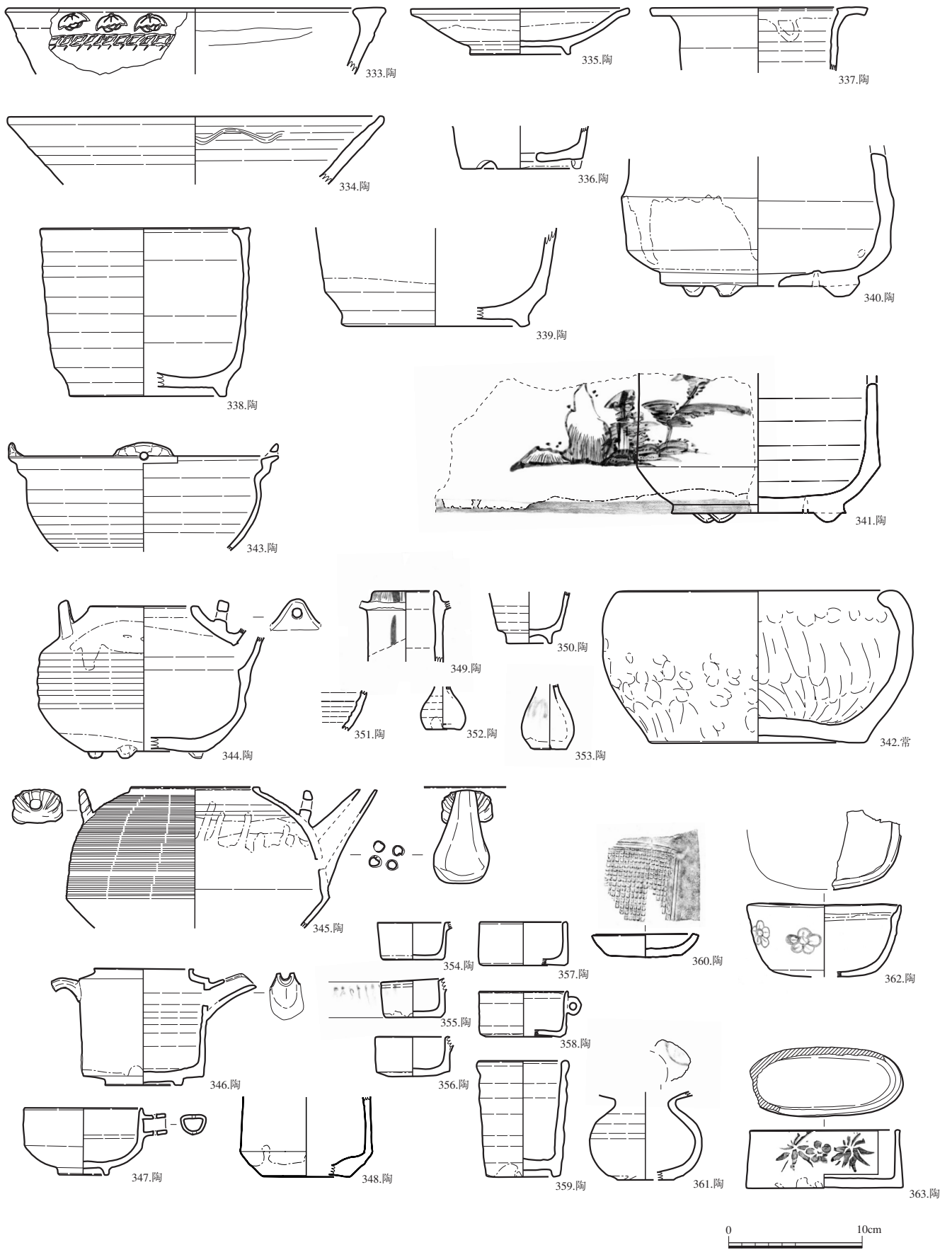
第31図 出土遺物実測図9 (S X002・他)



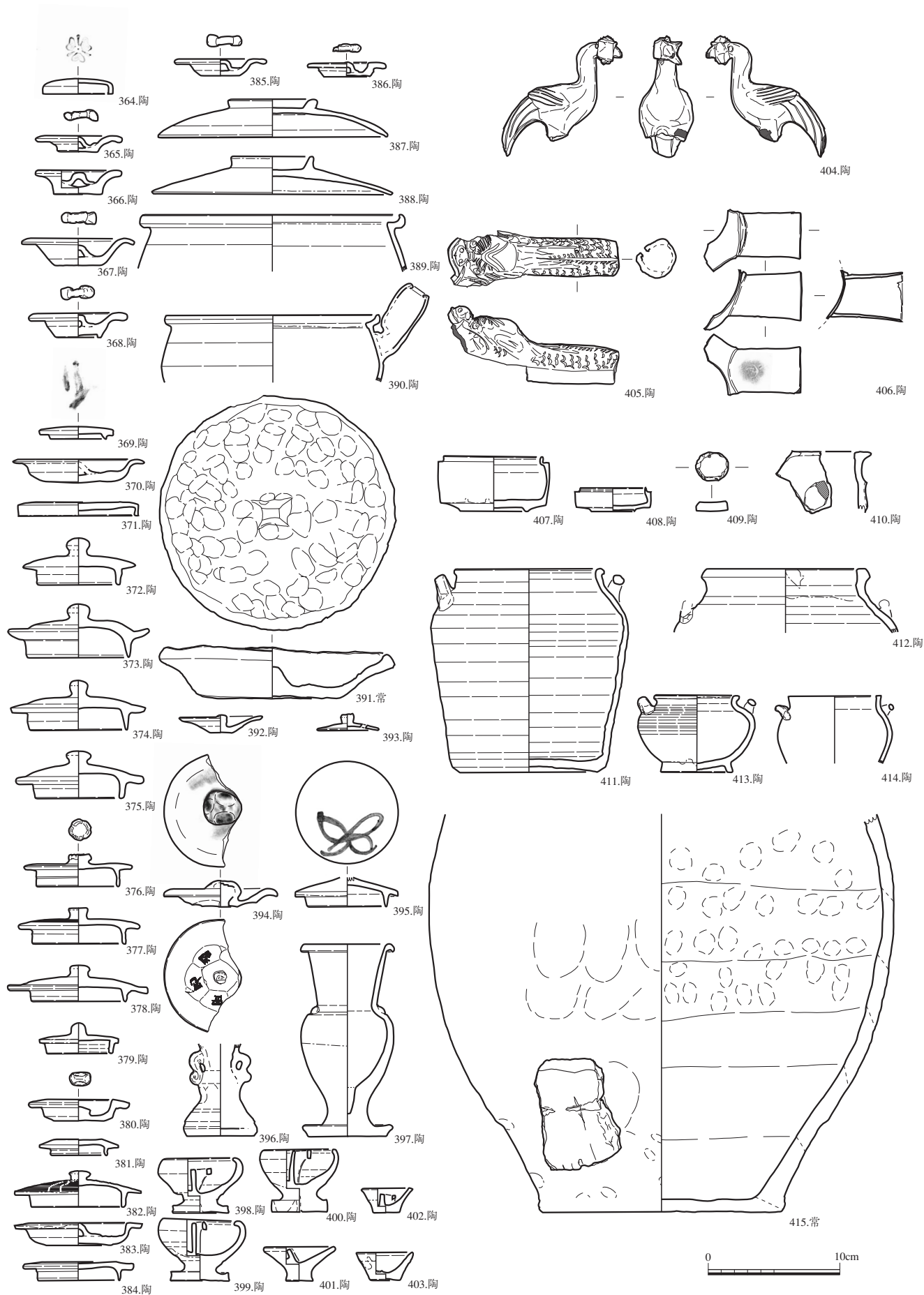
第32図 出土遺物実測図10



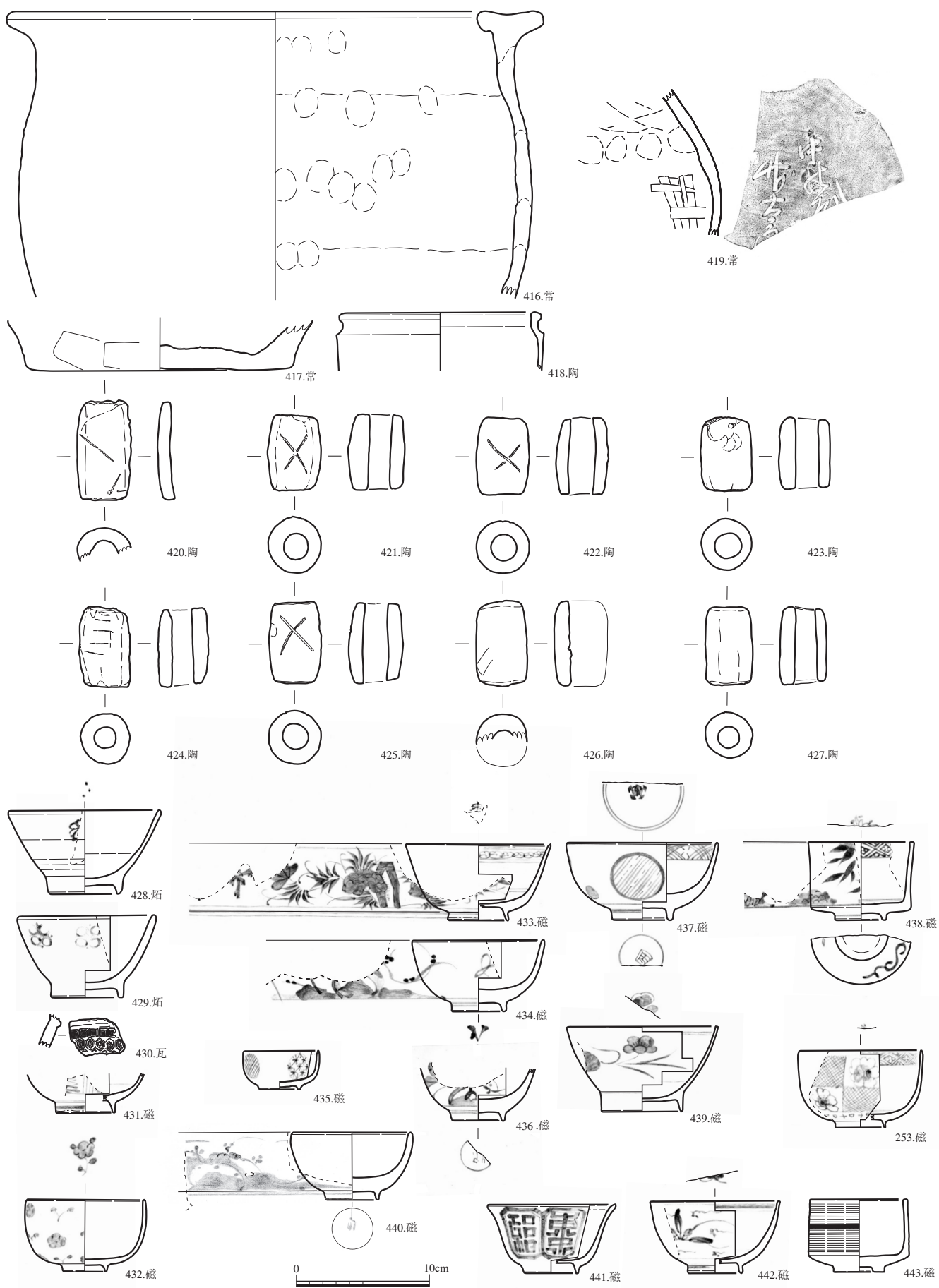
第33图 出土遺物実測図11



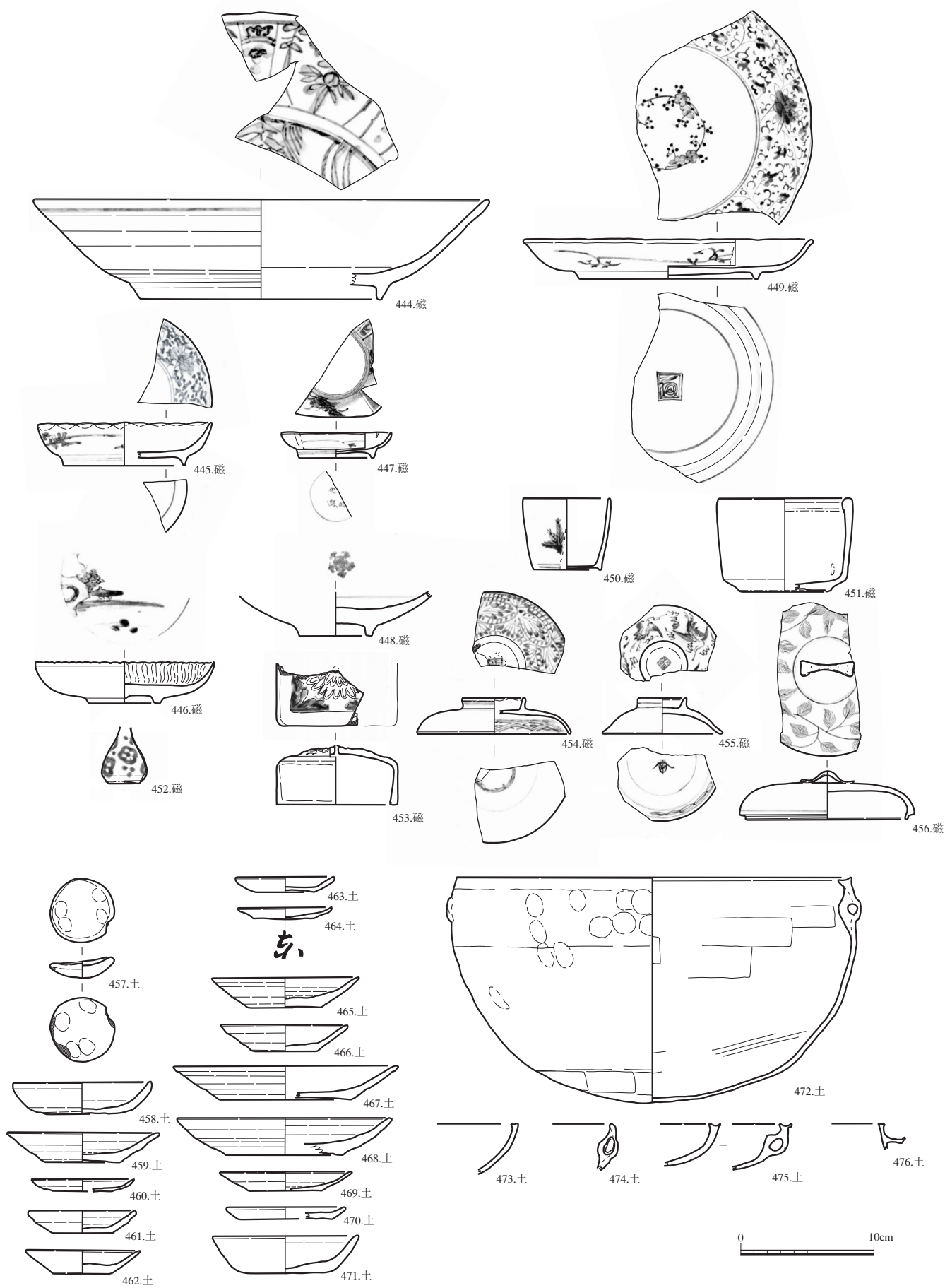
第34图 出土遺物実測図12



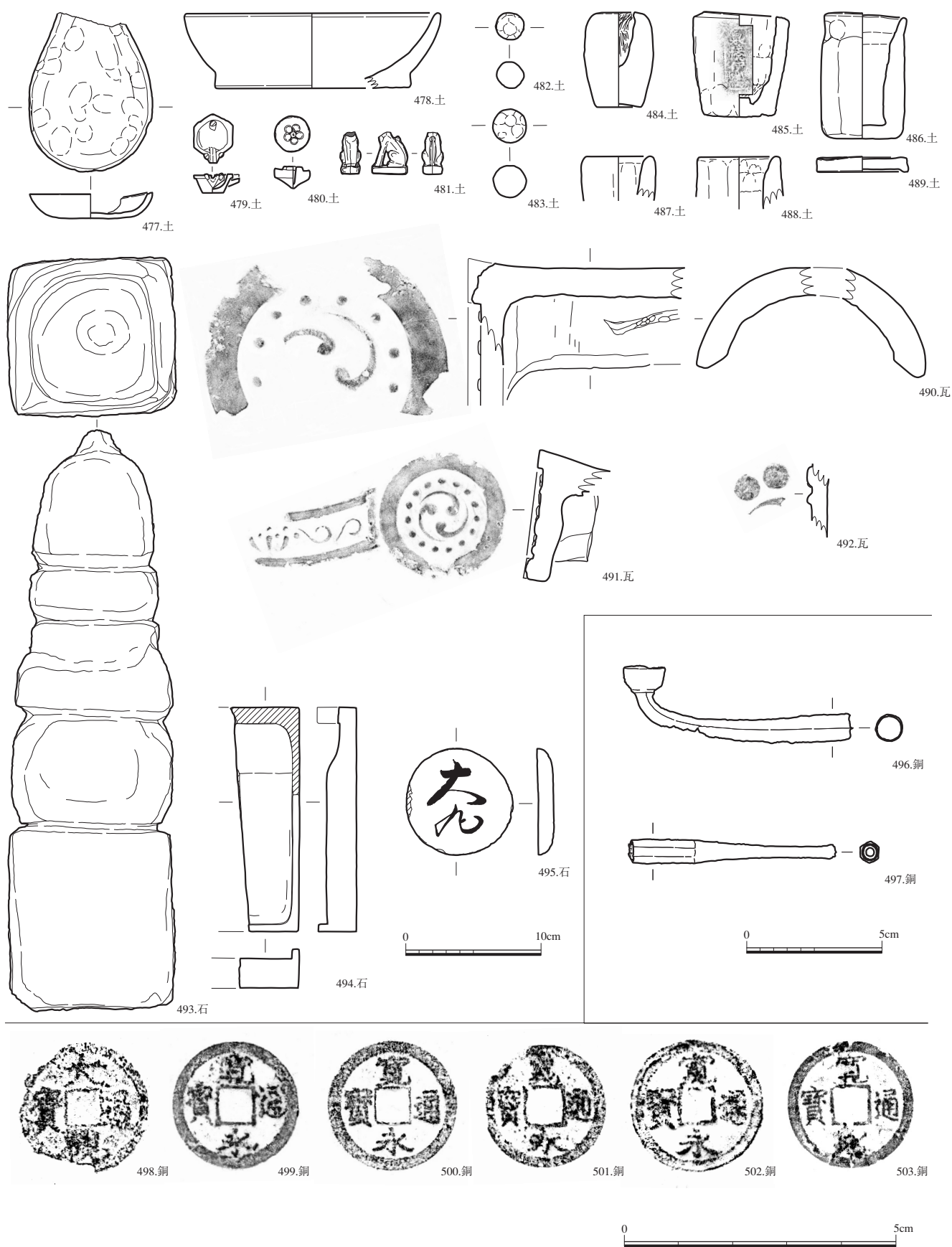
第35图 出土遺物実測図13



第36图 出土文物实测图14



第37図 出土遺物実測図15



第38図 出土遺物実測図16

第Ⅵ章 自然科学分析

名古屋城三の丸遺跡地下で確認された熱田層最上部層の層序と古環境

はじめに

名古屋市の大部分は更新統からなる台地上にあり、台地は熱田台地あるいは名古屋台地とも呼ばれる。名古屋城三の丸遺跡もこの台地の上に立地し、調査地点の地下は中部更新統の熱田層からなる。これまでに行なわれた名古屋城三の丸遺跡の調査では多くの考古学的成果が得られている（愛知県埋蔵文化財センター, 1990a, 1990b, 1992, 1993, 1995）。一方、地質学的調査は堀木・服部（1995）が行なった戦国期の堀を埋積する堆積物の花粉・珪藻分析があるのみで、遺跡の基盤層である熱田層に関する調査は行なわれてこなかった。今回、トレンチ掘削および深掘を行ない考古遺跡の基盤層下の層序を観察する機会を得た。地下層序のテフラ分析により堆積年代、堆積相解析から古環境情報を得たので報告する。

第1節 地質概要

名古屋市および周辺地域の地下地質は全体として砂礫・泥互層からなり、下位より第三紀の東海層群、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層下部（上部更新統）、熱田層上部（上部更新統）、第一礫層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）など第四紀の累層から構成される。それらの自然地理学的分布は、丘陵～高位段丘が中部更新統、中・低位段丘は上部更新統、沖積低地は上部更新統最上部～完新統より構成される。上部更新統の熱田層および周辺地域の地形・地質に関しては、松沢・嘉藤（1954）による詳しい記載以来、多くの研究・報告が行なわれてきた（総理府資源調査会, 1956; 桑原, 1968, 1975; 名古屋地盤調査研究会, 1969; 濃尾平野第四系研究グループ, 1977; 桑原ほか, 1982; 坂本ほか, 1984）。桑原（1975）は熱田層を最下部層・下部層・上部層に区分した。熱田層最下部層は濃尾平野中央部の地下にのみ見られる砂層である。下部層は濃尾平野の地下全域に分布し、地表では熱田台地にのみ露出する海成粘土層である。熱田海進（濃尾平野地下第四系研究グループ, 1977）と呼ばれる最終間氷期の海進堆積物と考えられる。本層上限面の深度は濃尾平野西縁部では-140mに及ぶが、熱田台地では10m以下である。上部層も濃尾平野の地下全域に分布する。地表では熱田台地と守山台地に露出する。主に砂層からなり、シルト・粘土層やレンズ状の礫層も挟まれる。層厚は濃尾平野西縁部で60m以上、熱田台地で30～40mである。

熱田層で確認される広域テフラについて、熱田層下部の海成粘土層最上部からは阿蘇-3 テフラ (Aso-3) が検出されている (宮川・吉川, 1996)。熱田層上部は鬼界-葛原テフラ (K-Tz) が挟まれており (諏訪ほか, 1995)、木曽川御岳起源のOn-Pm1 (Pm-I)、On-Tt (Pm-III) などを含む (小林ほか, 1967; 水野, 1996)。

第2節 試料および分析方法

第1項 層序解析

層序解析にあたって調査区東側において、南北方向に約5m、遺構検出面からの深さ2mのトレンチ

を掘削し（第39図）、層序断面図を作成した。また、南北トレンチの南端において深掘を行ない、遺構検出面から深さ約3 mまで掘削し（第40図）、層序断面図を作成した。層相の解析にあたり粒土、色調、堆積構造、化石の有無、火山灰等の特徴を詳細に記載した。堆積相の記載はMiall（1978）の河川コードを用いた。

層序断面では各層準ごとに分析用試料を採取した（第41図）。なお、層序断面にて採取した試料は採取日を基に、南北トレンチ断面の試料を010828（010828-1～9）、深掘層序断面の試料を010904（010904-1～14）とした。

第2項 花粉分析

花粉分析について、試料約10gを水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜円：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物の除去、アセトリシス（無水酢酸：濃硫酸＝9:1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行ない、花粉を濃集した。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行なった。同定はパリオ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

第3項 珪藻分析

乾燥重量1 gの試料をトールビーカーに取り、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行なった。岩片除去の後、水洗を4～5回繰り返しながら同時に比重選別を行なった。分離した試料を希釈し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。油浸600～1000倍の光学顕微鏡下で同定・計数を行なった。分析は鬼頭・上田が行なった。

第4項 テフラ分析

分析方法は基本的に古澤・梅田（2000）の手法を用いた。試料を洗浄・篩別し、極細粒砂サイズ（1/8～1/16）に粒度調整し、この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した。粒子組成の把握には通常の200粒子の観察とともに、微量含まれる特徴的なテフラ起源鉱物を識別するため、2000粒子中のテフラ起源鉱物含有量も把握した。屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置MAIOT（古澤, 1995）を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 、斜方輝石および角閃石で ± 0.0002 程度である。分析は古澤地質調査事務所に依頼した。

第5項 ^{14}C 年代

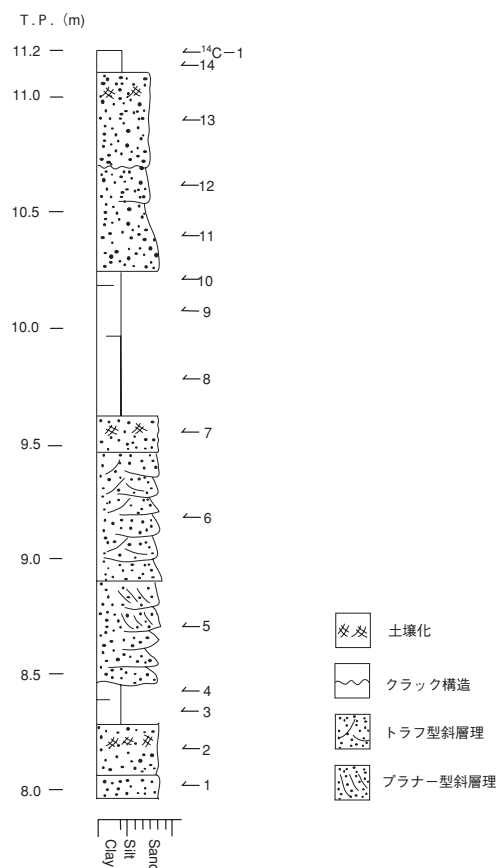
試料は $125\mu\text{m}$ の篩を用いて湿式篩別を行ない、篩を通過したものだけを用いた。試料は酸処理を施して不純物を除去し、グラファイトに調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。暦年較正值の算出にはCALIB 4.3（Stuiver and Reimer, 1993 ; Stuiver et al., 1998）を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボに依頼した。



第39図 名古屋城三の丸遺跡 南北トレンチ断面
(010829) の層序断面写真
(西側より撮影)



第40図 名古屋城三の丸遺跡 深掘層序断面
(010904) の層序断面写真
(南側より撮影)
層序断面図は第3図参照



第41図 名古屋城三の丸遺跡 深掘層序断面
(010904) の層序断面図と試料採取層準
数字は微化石分析試料, ^{14}C -1は放射性炭
素年代測定試料の採取層準を示す

第3節 分析結果

第1項 層序および堆積相解析結果

南北トレンチ断面（010828）の層序断面（第39図）は下位より、標高9.60～10.40mは塊状・均質な灰黄色を呈する粘土層からなり、堆積相Fcfに区分される。本層の上部（標高10.20～10.40m）は明褐色を呈する。標高10.40～10.80mは淘汰良好な粗粒～中粒砂層である。全体に黄褐色を呈し、明瞭な堆積構造は見られない。粒度のもつ特徴から堆積相Shに区分される。標高10.60～10.80mではオープンクラック状の凹凸が見られる。標高10.80～11.50mは粘土層からなり、下部（標高10.80～11.00m）は黄褐色を呈する塊状・均質な粘土層、上部（標高11.00～11.50m）は黒褐色を呈するシルト質粘土層からなる。本層全体はクロボク土様を呈し、遺物包含層である。塊状でシルト質粘土からなる特徴から堆積相Fcfに区分される。

深掘（010904）の層序断面（第40図）は下位より、標高7.97～8.30mまでは淘汰良好な粗粒砂層からなる。本砂層の上部（標高8.30m付近）には土壌化した部分がみられる。粒度から堆積相Shに、上部の土壌化した部分は堆積相Pに分けられる。標高8.30～8.47mは塊状・均質な粘土層からなる。本層の上部は赤色を呈する。塊状を呈する粘土からなる堆積相Fcfに分けられる。本層と本層を覆う砂層との境界で計測した走向・傾斜はN70° W10° Sであった。標高8.47～9.63mは淘汰良好な粗粒砂層からなる。本層下部（標高8.47～8.90m）にはプラナー型斜層理がみられ、斜層理のフォーセット面の走向・傾斜はE-W30° N（N=10）であった。古流向は南から北方向を示す。粗粒砂からなりプラナー型斜層理が見られるため堆積相Spに分けられる。中部（標高8.90～9.47m）ではトラフ型斜層理がみられ、肉眼ではパミス状を呈する白色鉱物が確認される。明瞭なトラフ型斜層理が見られるため堆積相Stに区分される。上部（標高9.47～9.63m）には土壌化（堆積相P）がみられる。標高9.63～10.24mは塊状・均質な粘土層である。下部および中部（標高9.63～10.17m）では白色、上部（標高10.17～10.24m）では赤色を呈する。塊状な粘土からなるため堆積相Fcfに分けられる。標高10.24～11.11mは粗粒～中粒砂層である。下部（標高10.24～10.54m）は中粒砂と粗粒砂とが混じるが、中部から上部（標高10.54～11.11m）では淘汰良好な中粒砂層のみからなる。明瞭な堆積構造は確認できない。粒度のもつ特徴から堆積相Shに分けられる。標高10.70mではオープンクラック状の凹凸がみられる。下部から中部は固結度が高く、上部では土壌化（堆積相P）が著しい。標高11.11～11.20mは黒褐色を呈するシルト質粘土層からなり、クロボク土様を呈する。塊状でシルト質粘土からなる特徴から堆積相Fcfに区分される。本層の表層部が名古屋城三の丸遺跡の遺構検出面である。

第2項 花粉分析結果

深掘層序断面（010904）にて下位層から上位層の各層準で14試料（第41図）を得た。全ての試料で花粉化石の保存状態は極めて悪く、試料5においてシダ類孢子が1個体検出されたのみである。

第3項 珪藻分析結果

深掘層序断面（010904）にて下位層から上位層の各層準で14試料（第41図）を得た。全ての試料で珪藻化石の保存状態は極めて悪く、珪藻殻は全く検鏡されなかった。

第4項 テフラ分析

極細粒砂サイズの粒子組成を第3表・第4表に、また、これと火山ガラス、斜方輝石および角閃石の屈折率をまとめて第42図・第43図に示す。より深い層序断面の得られた深掘層序断面（010904）の分析結果を基に、南北トレンチ断面（010828）の結果とを対比させて下位層準より述べる。

010904-1には光沢を帯びた緑褐色普通角閃石が微量含まれる。この角閃石の屈折率は1.684-1.691である。010904-2には（100）面の発達した斜方輝石および自形で新鮮な緑色普通角閃石が多く含まれる。斜方輝石は約2%、角閃石が約3%である。（100）面の発達した斜方輝石の屈折率は1.698-1.705、緑色普通角閃石の屈折率は1.674-1.688で1.681-1.687にモードがみられる。010904-3では無色発泡ガラスが若干見られるものの、ほとんどは石英・長石である。010904-4にはテフラ起源鉱物は確認されない。010904-5および6は構成粒子のほとんどがテフラ起源鉱物である。様々な形態の火山ガラス、斜方輝石、単斜輝石および角閃石で特徴づけられる。火山ガラスの屈折率は1.500-1.510とブロードで明瞭なモードはみられない。斜方輝石の屈折率も1.701-1.721とブロードで明瞭なモードが識別できない。010904-7～9にはテフラ起源鉱物は確認されない。010904-11および12は粒子構成、ガラス、斜方輝石の屈折率が010904-5と6に類似するが、屈折率1.495-1.500で微小斑晶を多く含む無発泡火山ガラスが多く含まれる点で異なる。また、南北トレンチの同層準である010828-3・4・5は粒子組成、火山ガラスの形態・屈折率および斜方輝石の屈折率がほぼ一致する。010904-13の構成粒子のほとんどは岩片や風化粒で、単斜輝石を含む。010904-14にはバブルウォールタイプの火山ガラスが1%程度含まれる。このガラスの屈折率は1.495-1.500である。本層は南北トレンチの010828-1試料と同層準である。010828-1にはバブルウォールタイプの火山ガラスが3%程度含まれる。このガラスの屈折率は1.496-1.500である。

第5項 ¹⁴C年代測定

深掘層序断面（010904）の最上位層である黒褐色を呈するシルト質粘土層から土壌試料（標高11.19m）を採取した。試料は同位体分別効果補正および暦年較正を行なった。10,890-10,755 cal yrs BPの¹⁴C年代暦年較正值が得られた（第5表）。

第4節 考察

第1項 広域テフラとの対比

テフラ分析の結果を基に広域テフラとの対比を試みる。

010904-1の角閃石の屈折率（1.684-1.691）がもつ特徴は、阿蘇4テフラ（Aso-4：以下、Aso-4）の角閃石のそれと一致する。後述するが、本層準の直上には大山生竹テフラ（DNP：以下、DNP）に識別できるテフラが挟まれていることから、これらの角閃石はAso-4起源である可能性が指摘できる。Aso-4は九州の阿蘇カルデラから噴出した巨大火砕流堆積物と降下火山灰であり（町田ほか, 1985）、その年代は大場（1991）により86～90ka（kaは103年前を表わす地質年代単位）が得られている。従って、本層準は8.6万～9.0万年前以降に堆積したものである。

010904-2の斜方輝石の屈折率（1.698-1.705）および角閃石の屈折率（1.674-1.688）は古澤・梅田（2002）に記載されているようにDNPのそれと一致する。結晶の晶癖は大山倉吉（DKP）と類似するが、DKPとは屈折率で明瞭に識別できる。010904-2の層準ではDNPの降灰が指摘できる。これは直下の

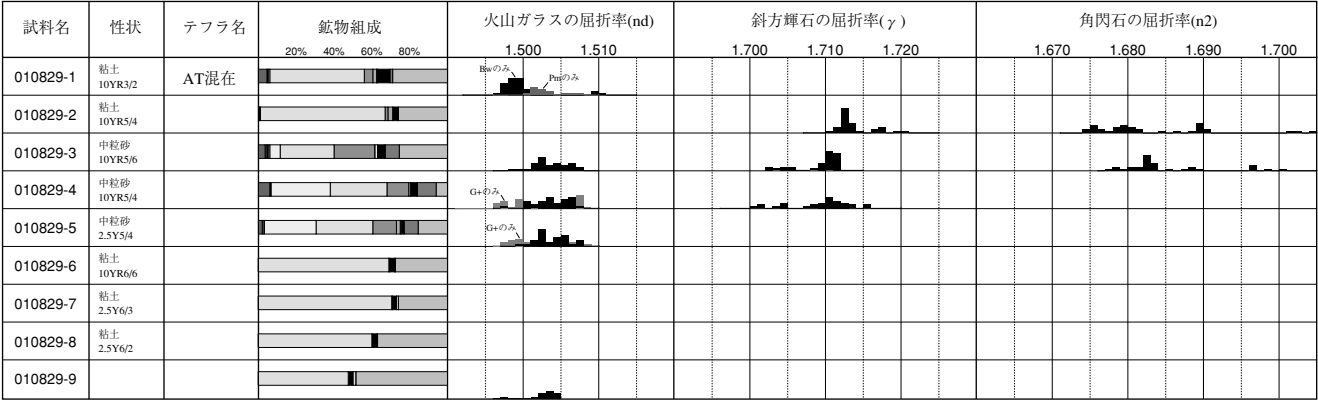
第3表 名古屋城三の丸遺跡 南北トレンチ断面（010829）のテフラ鉱物組成

010829

No.	火 山 灰								重 鉱 物								生物遺跡								合 計														
	P	BI	TI	Bm	Tm	Bs	Ts	O	P	BI	TI	Bm	Tm	Bs	Ts	O	Opq付着	Cpx付着	Ho付着	Fl付着	鉱物付着	鉱物付着	石英・ 長石	Opq		Cpx	GHo	BHo	Cum	BI	Opq	OTH	火山 岩片	炭化粒	珪藻	有孔虫	ウニ	その他	
010829-1	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	100	9	0	3	1	0	1	13	0	3	58	0	0	0	0	200
010829-2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	132	3	0	3	2	0	0	6	0	0	52	0	0	0	0	200	
010829-3	0	0	0	6	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	10	1	57	33	10	0	0	0	3	8	0	15	51	0	0	0	0	200
010829-4	0	0	0	6	2	0	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	59	4	60	19	4	0	2	0	7	0	20	12	0	0	0	0	200	
010829-5	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	51	4	60	18	7	1	3	0	1	3	0	15	31	0	0	0	0	200
010829-6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138	0	0	0	0	0	1	5	1	0	55	0	0	0	0	200	
010829-7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	141	0	0	1	0	0	0	4	2	0	52	0	0	0	0	200	
010829-8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	120	0	0	1	0	0	0	4	1	0	74	0	0	0	0	200	
010829-9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	95	0	0	0	0	0	0	5	3	0	97	0	0	0	0	200	

P：おそらく大きな曲率のため泡の接合部がみられず、平板ないしはゆるく湾曲した扁平型
BI：大型バルーン型、TI：大型チューブ型、Bm：中型バルーン型、Tm：中径チューブ型、Bs：小型バルーン型、Ts：小型チューブ型、O：気泡跡のみでないその他の型
Opq：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、GHo：緑色普通角閃石、BHo：褐色普通角閃石、Bi：黒雲母、Opq：不透明鉱物、OTH：その他の角閃石の色調はボライザーとC軸とが平行になる位置での色調を示す。

010829 (名古屋城三の丸 II NS01)



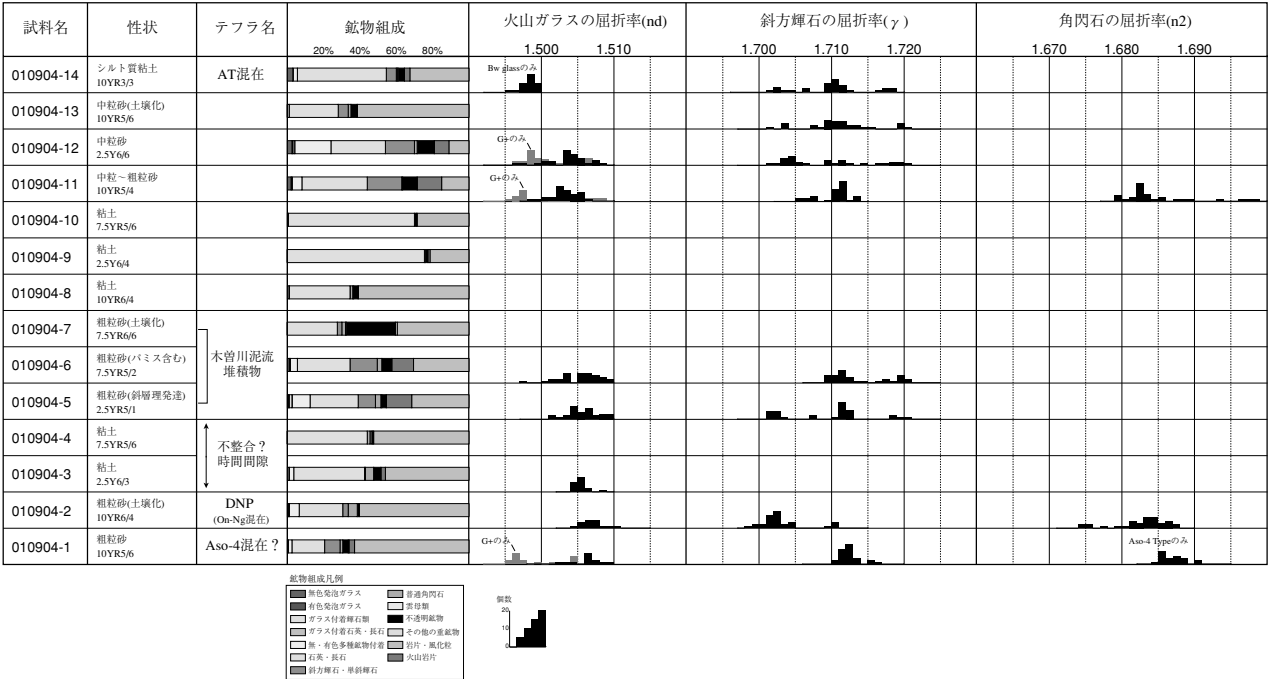
第42図 名古屋城三の丸遺跡 南北トレンチ断面（010829）の鉱物組成と屈折率ヒストグラム

第4表 名古屋城三の丸遺跡 深掘層序断面（010904）のテフラ鉱物組成
凡例は第1表を参照

010904

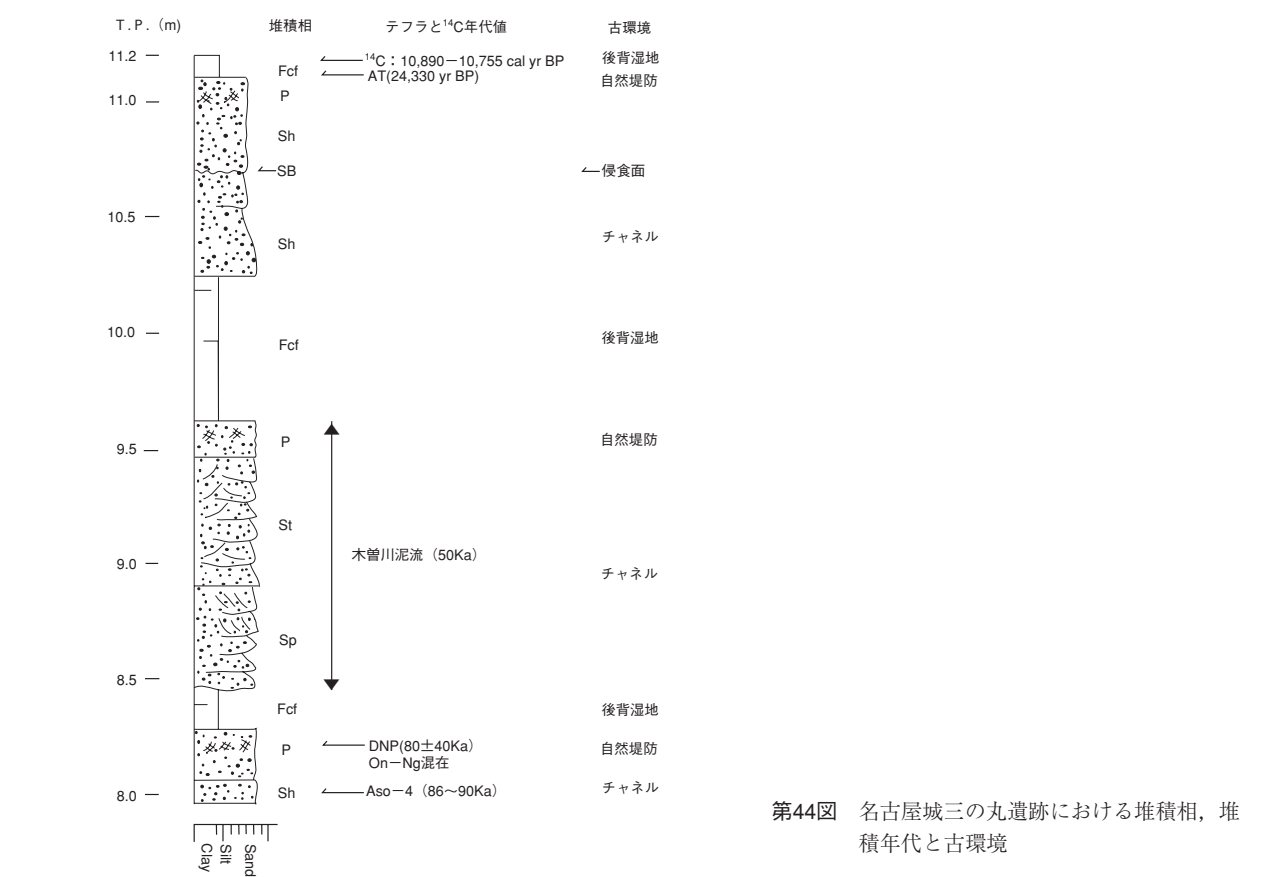
No.	火 山 灰								重 鉱 物								生物遺跡								合 計												
	P	BI	TI	Bm	Tm	Bs	Ts	O	P	BI	TI	Bm	Tm	Bs	Ts	O	Opq付着	Cpx付着	Ho付着	Fl付着	鉱物付着	鉱物付着	石英・ 長石	Opq		Cpx	GHo	BHo	Cum	BI	Opq	OTH	火山 岩片	植物・ 炭化粒	珪藻	有孔虫	ウニ
010904-14	0	5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	98	10	1	0	1	0	1	7	0	6	65	0	0	0	0	200
010904-13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	54	11	0	2	1	0	0	7	0	0	123	0	0	0	0	200
010904-12	0	0	0	3	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	33	7	60	26	6	1	2	0	0	19	0	16	22	0	0	0	0	200
010904-11	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10	1	72	30	8	0	1	0	0	16	0	27	30	0	0	0	0	200
010904-10	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	139	0	0	0	0	0	0	2	1	0	57	0	0	0	0	200
010904-9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	151	0	0	1	0	0	0	3	2	0	43	0	0	0	0	200
010904-8	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	67	0	0	2	1	0	1	5	0	0	122	0	0	0	0	200
010904-7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55	5	0	3	1	0	1	54	2	0	79	0	0	0	0	200
010904-6	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	5	56	23	7	2	3	0	0	11	0	24	61	0	0	0	0	200
010904-5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	18	2	53	15	4	4	2	0	1	5	0	28	63	0	0	0	0	200
010904-4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	88	0	0	3	0	0	2	1	1	0	105	0	0	0	0	200
010904-3	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	78	1	0	8	1	0	0	8	0	5	92	0	0	0	0	200
010904-2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	11	0	48	6	0	8	2	0	0	2	0	0	121	0	0	0	0	200
010904-1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	36	16	1	2	1	0	0	6	1	6	128	0	0	0	0	200

010904 (名古屋城三の丸 II NS01)



第5表 名古屋城三の丸遺跡における¹⁴C年代測定結果

試料No.	採取標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yr BP)	$\delta^{13}\text{CPDB}$ (0/00)	暦年代 (1 σ , cal yr BP)	コードNo.
¹⁴ C-1	11.19	黒褐色 シルト質粘土層	土壌	9580±40	-22.2	11090—11055 (12.8%) 10965—10935 (12.1%) 10890—10755 (58.8%)	PLD-1594



層準にAso-4起源と目される角閃石が産出することと調和している。DNPは大山火山から噴出した降下軽石層を主体とする(町田・新井, 1992)。大山起源には大山倉吉テフラ(DKP)とその下位の大山関金(DSP)や大山生竹(DNP)がある。これらのうち、DNPの年代は木村ほか(1999)により 80 ± 40 kaが報告されており、本層準はそれ以降に堆積したと考えられる。

010904-5と6は構成粒子からテフラであると考えられる。しかし、その岩石記載的特徴には均質性がみられない。鉱物組成は斜方輝石および単斜輝石を主体とし角閃石を含むなど御岳火山起源のテフラ(御岳-奈川(On-Ng)、御岳辰野(On-Tt)、御岳三岳(On-Mt)など)の岩石記載(町田・新井, 1992)と類似する。これらのテフラの火山ガラスの屈折率は1.540-1.507であり(木村ほか, 1991)、斜方輝石の屈折率は1.703-1.718である。一方、本層準に含まれる火山ガラスの屈折率は1.500-1.510とブロードで、斜方輝石の屈折率も1.701-1.721である。これらの値は上記の御岳起源のテフラのものと類似する。以上から、本層準は御岳起源の5万年前以降のテフラを混在して濃尾平野にまで運ばれた木曽川泥流堆積層準と考えられる。

010904-14のバブルウォールタイプの火山ガラスは、屈折率および層序(木曽川泥流層準よりも上位)から始良Tnテフラ(AT:以下、AT)起源と考えられる。ATは南九州始良カルデラを噴出源とする巨大火砕流堆積物とその降下火山灰である(町田・新井, 1992)。その年代は村山ほか(1993)により24,330 yrs BPとされる。よって、本層準の堆積は約2万4千年前以降である。

このほか、010904-11と12には構成粒子、ガラス、斜方輝石の屈折率が木曽川泥流に対比できる層準(010904-5、6)と類似した中粒砂層が挟まれる。010904-5・6との差は屈折率1.495-1.500で微小斑晶を多く含む無発泡火山ガラスが多く含まれる点にある。両層準間には土壌化層準が挟まれることから、この中粒砂層は1.495-1.500で微小斑晶を多く含む無発泡火山ガラスが木曽川へと流下したイベント時の木曽川泥流二次堆積物とも考えられる。なお、南北トレンチ断面試料の層序と構成鉱物粒子の特徴から010828-3~5は010904-11・12とほぼ一致し、010828-1は010904-14と一致することから、前者は木曽川泥流堆積物に、後者はAT起源と考えられる。

第2項 熱田層最上部の堆積環境

今回、標高7.97~11.20mまでの14層準で花粉・珪藻微化石分析を行なった。しかし、保存状態は極めて悪く、全く検出することができなかった。ところで、熱田層において微化石分析を行なった例として、森(1980)やMori(1986)の珪藻分析に基づいた堆積環境の報告がある。それによると、熱田層の最下部砂泥互層は泥炭湿地の発達した河川下流域での堆積が考えられ、海進の証拠は得られていない。下部層では、その下部で海成種が急激に増加し、下部から中部にピークがあり、上部へ漸減していて、盆地の縁辺部よりの甚目寺・稲沢では上部層準で小海退・小海進がみられた。上部層では淡水性群集がみられ、泥炭湿地の発達した河川下流域での堆積環境が推定された。また、砂礫層の発達が少なく、縁辺部に限られることから、このときの海水準低下はそれほど大きくなかったと推定した。さらに名古屋地盤調査研究会(1969)は、熱田層下部の第5、第4粘土層には貝化石が含まれるものの、第4粘土層の中・北部の地域では海成層の証拠に乏しいこと、熱田層上部では砂層と泥層が交互に堆積しており、海水準の変化が反映していると考えられること、また、最上部の砂層は浅海~海浜または三角州ないし河床性の砂層であると考えられることを述べている。

一方、今回の地下層序の堆積相解析では堆積相St・Sp・Sh・Fcf・Pの5つの堆積相に区分できた(第

44図)。これらの堆積相は、砂層からなる堆積相St・Sp・Shと砂層上部に堆積相Pが見られ、その直上に粘土層からなる堆積相Fcfに至る組み合わせが認められる。堆積相St・Sp・Shからはチャンネル（河道）内、堆積相Fcfからは後背湿地における堆積が推定できる。また、テフラ分析から木曽川泥流堆積物と確認された標高8.47～9.63mの砂層では明瞭なプラナー型やトラフ型斜層理が見られ、堆積相StやSpに区分できた。これらの堆積相から網状河川が推定でき、木曽川泥流の堆積時（5万年前以降）に調査地点では網状河川であったことがわかる。また、標高7.97～11.20mまでの層序断面で堆積相Sh・Sp・Stから堆積相Fcfに至る組み合わせが3回確認できる。このことから、本地域では少なくとも3回の河川の河道変遷（アバルジョン）が生じたことがわかる。総理府資源調査会（1961）は熱田層北部では堆積物中の軽石が大きく円磨され、海浜のものよりは角張っていること、さらにわずかではあるがやや泥炭質の部分もみられることなどから、それが河成堆積物であることを指摘した。また、桑原（1985）は熱田層上部が砂ばかりでなくシルトもしくは粘土を挟んでいることを述べ、上部層の中には少なくとも3層準の粘土層の堆積層準がみられることを指摘するとともに、森（1980）の成果に基づいて、熱田層の上部は少なくとも3回以上の海水準変動を含んでおり、小海退期には浅い削り込みを作りながら砂や礫が堆積し、小海進期には小凹地を中心に沼沢地が広がり、一部にはそこに海が入り込んで内湾環境が作られたと考えられることを述べた。しかし、今回の地下層序断面において海水準変動に起因すると考えられる侵食面は、標高10.70mに見られるオープン・クラック状の凹凸のみである。桑原（1985）は熱田層上部の砂や礫の堆積を小海退による粗粒堆積物の埋積としたが、河川の河道変遷（アバルジョン）で説明できる。以上のことから、調査地点では標高7.97～11.20mの間に約9万年～約2万4千年前までのチャンネル（河道跡）から後背湿地の古環境が推定できる（第44図）。

なお、今回の地下層序最上部層（標高11.19m）で得られた10,890-10,755 cal yr BPの¹⁴C年代値は、ATを含んだ標高11.11～11.20mにみられるシルト質粘土層の堆積後、粘土粒子に吸着された腐植の年代値であり、熱田層最上部層の堆積年代を示すものではない。

第3項 始良Tnテフラ（AT）の検出結果と遺跡との関係

名古屋三の丸遺跡の地下層序について、標高11.11～11.20mの黒褐色シルト質粘土層の標高11.15mから始良Tnテフラ（AT）が検出された。堆積相解析の結果から本層準はチャンネル（河道）内の堆積であるため、確認されたATは調査地に降下・堆積したいわゆる純層とは考えられず、後背地に降灰したものが二次的に運び込まれたものである。一方、ATの検出された層準よりも上位にあたる標高11.19mのシルト質粘土層の¹⁴C年代値が10,890-10,755 cal yr BPを示すことから、AT降灰時の約2万2千年前以降に堆積し、約1万1千年前以降には離水していたことがわかる。

ところで、ATは日本全国の旧石器遺跡の鍵層として重要であり、関東地方では旧石器の対比に役立ってきた（小林ほか, 1971; 町田ほか, 1971）。中部地方では長野県野尻湖底での発掘調査において、ATよりも下位層準から骨製品、礫器、牙器が発掘されており、ATより上位層準からは福井県西下向遺跡で国府型ナイフ形石器類似例（三国町教育委員会, 1983）が、富山県白岩薮の上遺跡では局部磨製石斧とナイフ形石器（富山県埋蔵文化財センター, 1982）が出土している。

熱田台地上では、名古屋城三の丸遺跡より南側へ約1.8kmの名古屋市中区に位置する竪三蔵通遺跡から旧石器時代の遺物の出土が報告されている（伊藤・服部編, 1989; 川井, 1997; 岩野・齋藤, 2002）。標高4.0m付近の黒色土とその下位の灰色砂質土の堆積状況が記載されており、灰色砂質土の下部（記載

では深い部分)からナイフ形石器が出土している。豎三蔵通遺跡の報告ではテフラ分析は行なわれておらず、堆積構造・砂粒子の粒度などの情報もわからないが、恐らく黒色土が本論の地下層序の標高11.11～11.20mに見られる黒褐色シルト質粘土層に、灰色砂質土が標高10.24～11.11mで見られる粗粒～中粒砂層に相当するものと思われる。豎三蔵通遺跡周辺においてもATの検出が期待でき、詳細な層序解析を行えば古環境を推定できる可能性がある。また、名古屋城三の丸遺跡より北東へ約25kmの瀬戸市上品野の上品野遺跡では、台形様石器、ナイフ形石器、石刃などの後期旧石器時代の遺物が出土している(北村ほか, 1998; 小澤, 1999)。石器包含層の上位層からATが、下位層からはDNPが検出されている。今回の名古屋城三の丸遺跡の地下層序からは旧石器時代の遺物は出土していないものの、下位層からAso-4が、上位層からはATが確認された。Aso-4から約9万年前以降、ATから約2万5千年前以降を示し、東アジアの地層や旧石器文化研究の時代指標層として極めて重要な年代値を得ることができた。また、堆積相解析からはチャネル(河道内)から後背湿地の古環境が推定され、かつ3回の繰り返しが確認された。近年、下山(2001)は北部九州、筑紫野市の二日市低地帯にて層序・テフラ分析により古環境解析を行なった。そこでは純層のAT火山灰の降灰後、11,000年前以降の地層から旧石器が、9,800年前以降の地層から縄文時代早期の土器が出土しており、14,000年前以降の離水した台地が急速に乾いて安定し、11,000年前以降に人類の活動の場になったことを報告している。名古屋城三の丸遺跡で今回行なったような地下層序の解析は、ほとんどわかっていない愛知県内および中部地方の旧石器文化とその古環境情報の蓄積のために重要である。

(鬼頭 剛・森 勇一・上田恭子)

謝 辞

本論を作成するにあたり、古澤地質調査事務所の古澤 明博士には広域テフラについてご教示いただいた。名古屋市見晴台考古資料館の伊藤正人氏には豎三蔵通遺跡について、愛知県埋蔵文化財センターの都築暢也氏・武部真木氏には名古屋市内および瀬戸市の旧石器遺跡についてご教示いただいた。名古屋大学大学院生の小野映介氏、株式会社パレオ・ラボの藤根 久氏・小村美代子氏には現地での討論と試料採取をお手伝いいただいた。金沢学院大学学生の石田 伸氏、天理大学学生の服部博樹氏には現地にて南北トレンチ断面図の作成をお手伝いいただいた。珪藻プレパラートの作成では愛知県埋蔵文化財センター整理補助員の宇佐美美幸氏・服部久美子氏・村上志穂子氏にお世話になった。以上の方々に記して厚くお礼申し上げます。

文 献

- 愛知県埋蔵文化財センター, 1990a, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第15集「名古屋城三の丸遺跡(Ⅰ)」, 259p.
愛知県埋蔵文化財センター, 1990b, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第16集「名古屋城三の丸遺跡(Ⅱ)」, 221p.
愛知県埋蔵文化財センター, 1992, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集「名古屋城三の丸遺跡(Ⅲ)」, 202p.
愛知県埋蔵文化財センター, 1993, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第44集「名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)-愛知県警察本部地点の調査-」, 288p.
愛知県埋蔵文化財センター, 1995, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第60集「名古屋城三の丸遺跡(Ⅴ)-旧名古屋営林支局地点の調査-」, 185p.
古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
古澤 明・梅田浩司, 2000, 別府湾コアにおける最近7000年間の火山灰層序-ピストンコア中の火山灰と阿蘇, 九重

- 火山のテフラとの対比, 地質学雑誌, 106, 31-50.
- 古澤 明・梅田浩司, 2002, 新期大山テフラ DNP, DSP, DKPの岩石記載の特徴の再検討, 第四紀研究, 41, 123-129.
- 堀本真美子・服部俊之, 1995, 第IV章 自然科学的分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第60集「名古屋城三の丸遺跡(V)-旧名古屋営林支局地点の調査-」, 愛知県埋蔵文化財センター, 124-125.
- 伊藤正人・服部哲也編, 1989, 竪三蔵通遺跡, 名古屋市教育委員会, 11p.
- 岩野見司・齋藤基生, 2002, 竪三蔵通遺跡, 愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文, 愛知県, 136-137.
- 川井 剛, 1997, 第一章 旧石器時代, 新修 名古屋市史 第一巻, 名古屋市, 3-44.
- 木村純一・竹村健一・松本盆地研木曽谷グループ, 1991, 木曽御岳火山周辺の後期更新世の降下火砕堆積物層序と岩石記載-, 地球科学, 45, 415-434.
- 木村純一・岡田昭明・中山勝博・梅田浩司・草野高志・麻原慶憲・館野満美子・檀原 徹, 1999, 大山および三瓶火山起源テフラのフィッシュトラック年代とその火山活動史における意義, 第四紀研究, 38, 145-155.
- 北村和宏・小澤一弘・後藤英史, 1998, 上品野遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成9年度, 愛知県埋蔵文化財センター, 12-17.
- 小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦, 1967, 御岳火山第一浮石層-御岳火山第一浮石層の研究その1-, 地質雑, 73, 291-308.
- 小林国夫・小林武彦・清水英樹, 1971, 御岳火山噴出物によるTephrochronology, 中部地方の鮮新統および最新統, 竹原平一教授記念論文集, 191-218.
- 桑原 徹, 1968, 濃尾盆地と傾動地塊運動, 第四紀研究, 7, 235-247.
- 桑原 徹, 1975, 濃尾傾動盆地の発生と地下の第四系, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 109-182.
- 桑原 徹・松井和夫・吉野道彦・牧野内 猛, 1982, 熱田層の層序と海水準変動. 第四紀, 第四紀総研連絡紙, 22, 111-124.
- 町田 洋・鈴木正男, 1971, 火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年- フィッシュン・トラック法による試み-, 科学, 41, 263-270.
- 町田 洋・新井房夫・百瀬 貢, 1985, 阿蘇4火山灰-分布の広域性と後期更新世指標層としての意義-, 火山, 30, 49-70.
- 町田 洋・新井房夫, 1992, 火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東大出版会, 276p.
- 松沢勲・嘉藤良次郎, 1954, 名古屋及び付近の地質. 同地質図, 愛知県建築部.
- Miall, A. D., 1978, Fluvial Sedimentology, Canadian Soc. Pet. Geol. Memoir 5, 859p.
- 三国町教育委員会, 1983, 西下向遺跡-第1次・第2次発掘調査概報, 24p.
- 宮川ちひろ・吉川周作, 1996, 濃尾平野の中〜後期更新世地下火山灰層序, 日本第四紀学会演旨集, no.26, 76-77.
- 水野清秀, 1996, 6 TB-1コア中の火山灰・軽石分析, 名古屋港西地区ボーリングコア分析調査報告, 名古屋市総務局, 35-37.
- 森 忍, 1980, 濃尾平野下の熱田層のケイソウ群集, 瑞浪市化石博物館研究報告, 7, 73-83.
- Mori, S., 1986, Diatom Assemblages and Late Quaternary Environmental Changes in the Nobi Plain, Central Japan, The Journal of Earth Sciences, 34, 109-138.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦, 1993, 四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討-タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代-, 地質雑, 99, 787-798.
- 名古屋地盤調査研究会, 1969, 「名古屋地盤図」, コロナ社, 東京, 279p.
- 濃尾平野第四系研究グループ, 1977, 濃尾平野第四系の層序と微化石分析, 地質学論集, 14, 161-183.
- 大場忠道, 1991, 酸素同位体比層序から見た阿蘇4テフラおよび阿多テフラ, 月刊地球, 13, 224-227.
- 小澤一弘, 1999, 上品野遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター年報 平成10年度, 愛知県埋蔵文化財センター, 32-36.
- 坂本 享・桑原 徹・糸魚川淳二・高田康秀・脇田浩二・尾上 享, 1984, 名古屋北部地域の地質, 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 64p.
- 下山正一, 2001, 第5節 二日市低地帯の形成と古環境の変遷, 太宰府市史 環境資料編, 太宰府市, 96-104.
- 総理府資源調査会事務局, 1956, 水害地域に関する調査研究 第1部, 資源調査会資料, 46, 97p.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J., 1993, Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, 215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCorman, F. G., v. d. Plicht J., and Spurk, M., 1998, INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, 1041-1083.
- 諏訪 斉・森 忍・中村俊夫・木曽谷第四紀研究会, 1995, 名古屋市瑞穂区新瑞橋地下鉄工事現場の熱田層, 名大加速器質量分析計業績報告, 7, 196-200.
- 富山県埋蔵文化財センター, 1982, 白岩薮ノ上遺跡調査概要 (2), 立山町教育委員会, 28p.

第Ⅶ章 まとめ

今回の調査では、遺構の時期とは異なるものの古代の遺物が認められ、中世・戦国期・近世の遺構、遺物が検出できた。この中で中世については、情報量が少ないため、遺構の性格、空間的な特質について言及できるレベルではなかった。戦国期・近世については、これまでの調査成果などと照合することである程度の推測が可能であった。

ここでは、戦国期・近世の検出遺構の中で主要なものを選定し、当該期にどのような目的をもってつくられたのかを考え、出土遺物からはどのような状況が推察できるかについて記してみたい。

戦国時代の遺構は、第Ⅳ章において記載したように溝が中心である。これらの溝は、切り合い関係及び、出土遺物などから時期別に比較してみると、方位、規模等に変化がみられる。16世紀前半代までの遺物を含むS D504、S D502では、溝の主軸が東西、南北軸からかなり偏るが、17世紀初頭まで開削していたと思われるS D505・514やS D508では主軸が正方位から大きく偏らない状況が確認できた。

名古屋城三の丸遺跡における戦国期の溝は、過去の調査事例においても古い時期に主軸の偏りが認められ、新しくなって正方位に近づく状況が確認できる。今回の調査地点北隣における平成2年度調査地点や、300mほど西に位置する愛知県図書館地点、300mほど東に位置する愛知県三の丸庁舎地点では、16世紀の中葉以降に戦国期溝の方位が正方位に近い主軸へと変化することが確認されている。本調査地点は、これら3地点と空間的に同様のエリアに属するものと思われ、過去の調査事例から推測できる空間の変化と、今回の調査によって解明できた変化が図らずも一致したことになる。

過去の調査事例も含めたこれらの戦国期溝は、那古野城関連の遺構と思われる。これらの溝方位が時間の経過に伴って変化する現象は、那古野城域の拡張に伴うものと思われる。というのは、那古野城主要部推定地点に近い当該期溝ほど、古い時期から正方位に近い主軸を示すことが確認されているため、正方位を意識して築かれた那古野城が城域を拡大していくのに伴い、地形や旧道の方位に合わせられた溝の方位が、那古野城主要部の方位に取り込まれてゆくと考えられるからである。したがって本調査地点は、16世紀中葉以降那古野城と方位を合わせるエリアに取り込まれ、この改変期に掘削された溝は、17世紀初頭の名古屋城築城期あたりまで開削していたことが、遺構および遺物の上から推定される。

近世の名古屋城三の丸における本地点は、調査区の東端において石組みを伴う溝が確認され、絵図・史料などから想定された屋敷割りとの位置関係も合致するため、このS D001が屋敷境の溝であったことが推定できた。過去の調査事例においても、絵図・史料から想定できる屋敷割りと、調査によって確認できた屋敷割りは概ね一致している。したがって、名古屋城関係で残っている絵図・史料の正確さが、発掘調査によって証明されたことになる。

調査区北東端で確認できた土坑列群は、屋敷内の空間的な特質を推定できる資料となろう。先にも述べたように、残された絵図・資料は正確な位置関係で記述されており、それによれば本調査地点は第5図で図示した屋敷地1の中に大半が含まれる。屋敷地内での調査地点の位置は、南北に長い屋敷地の南側にあたり、この外側は南御土居筋に面している。屋敷地の東西と北側は、他の屋敷と隣接して囲まれているため、屋敷地1の出入り口にあたる門は南側にのみ設置が可能である。したがって、調査地点は屋敷地1の「屋敷表」にあたる。このことは、土坑列群が庭木程度の樹木の移設跡と考えることに、位

置的な矛盾をもたらさず、廃棄土坑と思われる遺構が極端に少なかった調査結果にも、屋敷地1内での空間的特質が影響していると考えられるからである。

隣接する平成2年度調査地点は、第5図に示したように合計4屋敷地の「屋敷裏」にあたる。この地点での遺物は、廃棄土坑と思われる遺構から膨大な量が出土している。しかし近接する本調査地点では、出土量が少なく、「屋敷表」・「屋敷裏」といった違いによって空間的特質が大きく変わることが想定できる。「屋敷表」にあたる地点では、役宅の配置転換に伴う移動において、廃棄土坑が掘削される確率が少ないことが推察された。

出土遺物の傾向としては、まとまった遺物の出土が少ない中で、ある程度統計処理が可能な遺構を選定し、カウント作業を行った。S D001・S K228・S X011において、産地別及び器種別の組成を中心に、口縁部残存率を基準にしてカウント作業を行い、その同定を試みた。分析資料の時期としては、S D001が19世紀中頃、S K228が19世紀前半、S X011が18世紀後半の廃棄行為と思われる。

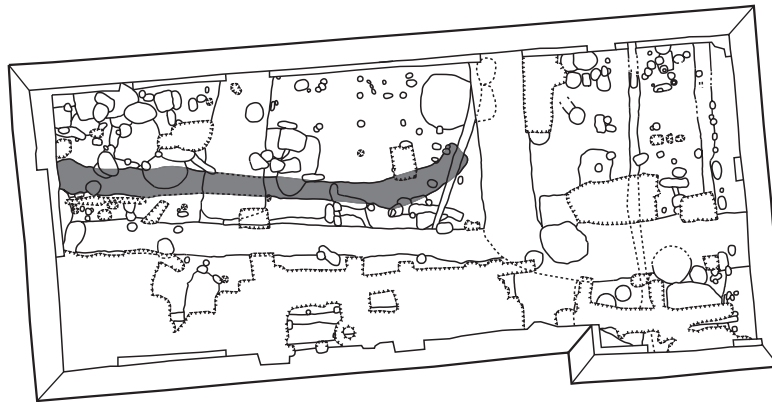
産地・材質別にみると、全体的には瀬戸・美濃産の陶器が圧倒的に多く、地場産業の影響が顕著に現れているものといえる。この比率は3遺構に共通しており、近世後期の様相として捉えられそうである。3遺構は時期的に差が少ないため、近世の古い時期と比較した結果が得られず、あくまでも後期的様相にとどまるが、瀬戸・美濃地区の安定した生産体制から、近世全体の様相と思われる。遺構間の比較で変化が認められたのは、幕末の段階では土器が極端に減少し、肥前磁器がやや減少、瀬戸・美濃産磁器が一定の割合を占めるようになったことである。

器種の組成では、碗と皿を合わせると、S X011では全体の半分以上を占めるが、S K228・S D001では半分に満たない。碗と皿の比率は、近世後期の段階では、代表的な器種以外の品目（その他）が用途に応じて多数出現するため、近世を通じて比較すれば新しくなるほど減少傾向にあるものと思われる。

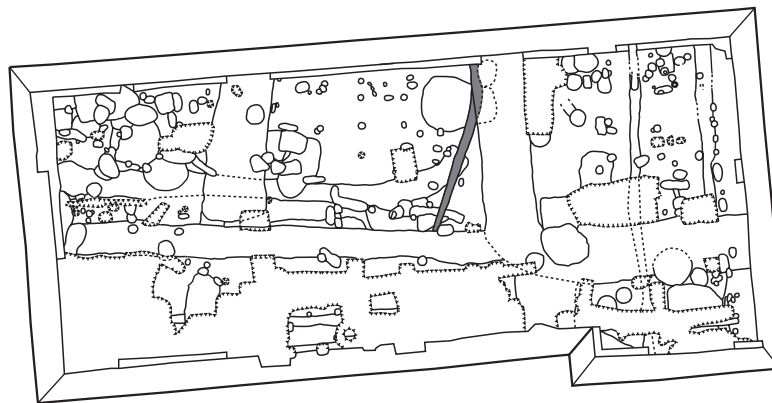
名古屋城三の丸遺跡の調査事例は、地点として10例を超えてはいるものの、遺跡全体像はいまだに解明にはほど遠い観がある。特に戦国期に展開していたと思われる那古野城関連の遺構は、周縁に展開していたと思われる溝・堀といった遺構に、現段階では手がかりを求めるのみである。中心施設推定地点は、面的な調査の機会をいまだに得ていない。遺跡全容の把握に向けて、調査事例の積み重ねとともに、多様な視点から分析を試みる必要があろう。

参考文献

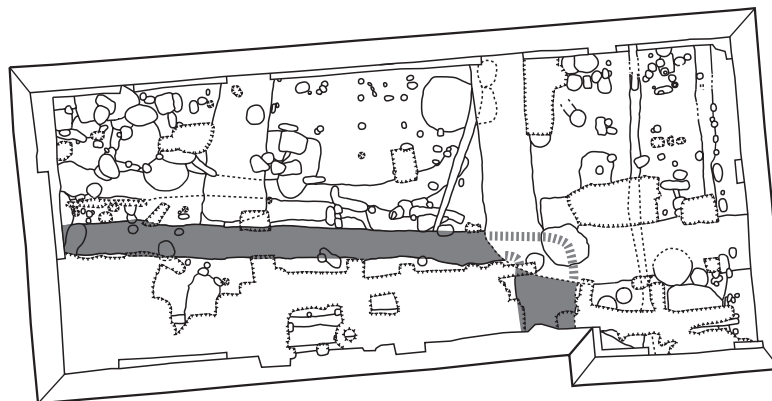
『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ～Ⅴ』（財）愛知県埋蔵文化財センター



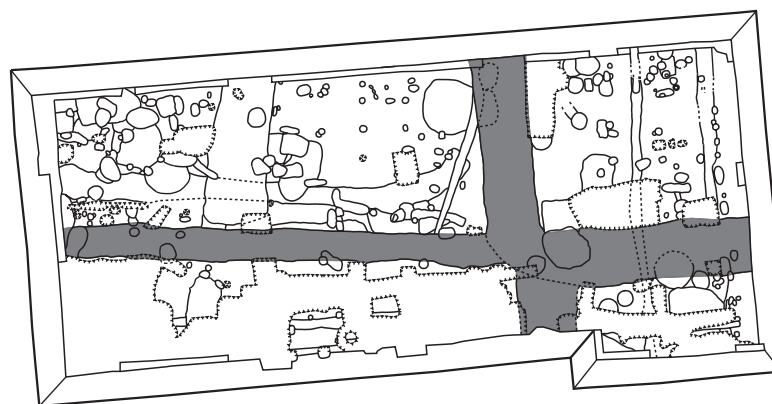
16c.前



16c.前



~17c.初



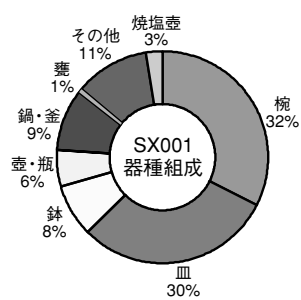
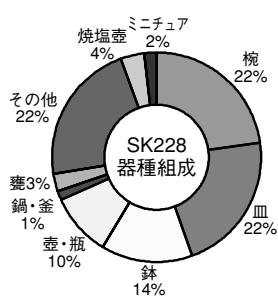
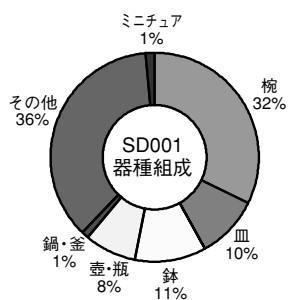
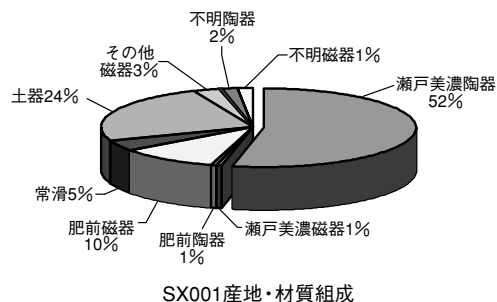
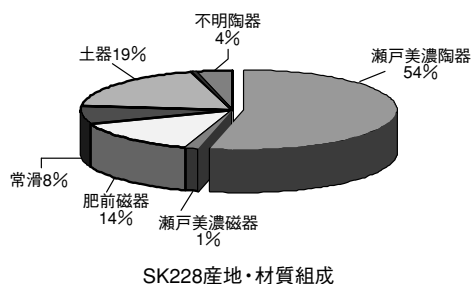
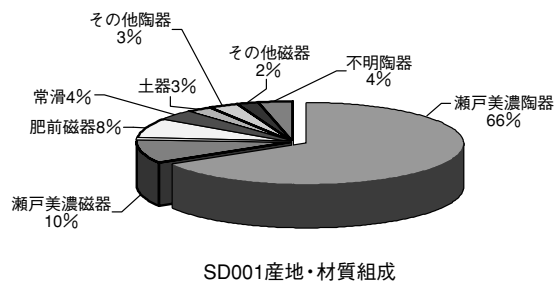
17c.初

第45図 戦国期遺構変遷図 (1/500)

第6表 遺構別遺物カウント表

(単位：口縁残存率～/12)

部門別		遺構別統計数値					
		SD001:構成比		SK228:構成比		SX011:構成比	
産地・材質	瀬戸美濃陶器	356	66%	260	54%	293	53%
	瀬戸美濃磁器	52	10%	7	1%	4	1%
	肥前陶器	2	0%	0	0%	3	1%
	肥前磁器	44	8%	68	14%	57	10%
	常滑	20	4%	37	8%	25	5%
	土器	14	3%	91	19%	133	24%
	瓦器	0	0%	0	0%	0	0%
	その他陶器	16	3%	2	0%	15	3%
	その他磁器	13	2%	1	0%	2	0%
	不明陶器	19	4%	19	4%	9	2%
	不明磁器	0	0%	0	0%	9	2%
計		536	100%	485	100%	550	100%
器種	椀	172	32%	111	23%	178	32%
	皿	53	10%	105	22%	166	30%
	鉢	59	11%	68	14%	44	8%
	壺・瓶	44	8%	48	10%	31	6%
	鍋・釜	5	1%	6	1%	51	9%
	甕	0	0%	13	3%	4	1%
	その他	195	36%	107	22%	62	11%
	焼塩壺	0	0%	18	4%	14	3%
	ミニチュア	8	1%	9	2%	0	0%
	計	536	100%	485	100%	550	100%



第46図 遺構別遺物組成図

図

版

図版目次

図版 1

- (1) 調査区遠景 (南より)
- (2) 調査前風景
- (3) 表土剥ぎ
- (4) S K003断面 (南より)
- (5) S K003 (南西より)

図版 2

- (6) S K007断面 (南より)
- (7) S K006断面 (南より)
- (8) S X007 (北より)
- (9) S K024断面 (西より)
- (10) S K204遺物出土状況 (南より)
- (11) S K262遺物出土状況 (南西より)
- (12) S D001石組み (東より)
- (13) S D001遺物出土状況 (南より)

図版 3

- (14) S D001断面 (南より)
- (15) S D001 (北より)
- (16) S E001断面 (南西より)
- (17) S E201遺物出土状況 (南西より)
- (18) S X002遺物出土状況 (南より)
- (19) S X007断面 (西より)
- (20) 調査区上面全景 (北より)

図版 4

- (21) 調査区上面全景 (南西より)
- (22) 調査区北東角 (北より)
- (23) 調査区東側部分 (南より)
- (24) 調査区西側部分 (南より)
- (25) 調査区中央部分 (南より)
- (26) 調査区南東角 (南より)
- (27) S X007周辺 (南より)

図版 5

- (28) S K532断面 (南東より)
- (29) S D505断面 (東より)
- (30) S D508断面 (西より)
- (31) S D508断面 (南より)
- (32) 調査区下面全景 (南西より)
- (33) 調査区下面全景 (北東より)

図版 6

- (34) 調査区下面東側部分 (北より)
- (35) 調査区下面西側部分 (南より)
- (36) 調査区下面中央部分 (南より)
- (37) 調査区下面北東部分 (南より)
- (38) S D505 (西より)
- (39) 土層サンプリング風景
- (40) 写真測量風景
- (41) 作業風景

図版 7

遺物写真 (1)

図版 8

遺物写真 (2)

図版 9

遺物写真 (3)

図版10

遺物写真 (4)



(1) 調査区遠景（南より）



(2) 調査前風景



(3) 表土剥ぎ



(4) S K 003断面（南より）



(5) S K 003（南西より）



(6) S K 007断面 (南より)



(7) S K 006断面 (南より)



(8) S X 007 (北より)



(9) S K 024断面 (西より)



(10) S K 204遺物出土状況 (南より)



(11) S K 262遺物出土状況 (南西より)



(12) S D 001石組み (東より)



(13) S D 001遺物出土状況 (南より)



(14) S D001断面 (南より)



(15) S D001 (北より)



(16) S E001断面 (南西より)



(17) S E201遺物出土状況 (南西より)



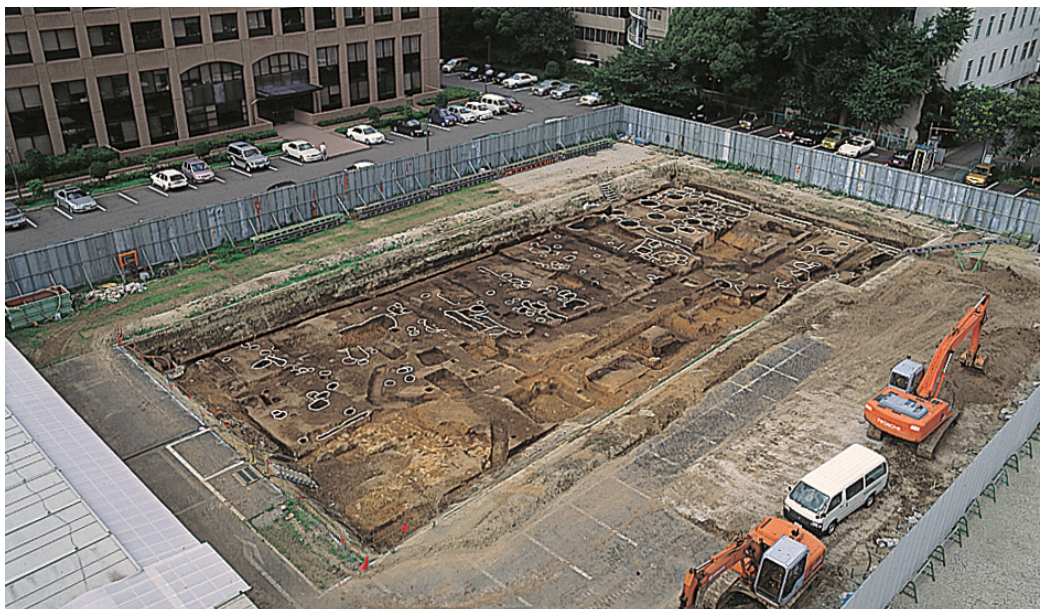
(18) S X002遺物出土状況 (南より)



(19) S X007断面 (西より)



(20) 調査区上面全景 (北より)



(21) 調査区上面全景（南西より）



(22) 調査区北東角（北より）



(23) 調査区東側部分（南より）



(24) 調査区西側部分（南より）



(25) 調査区中央部分（南より）



(26) 調査区南東角（南より）



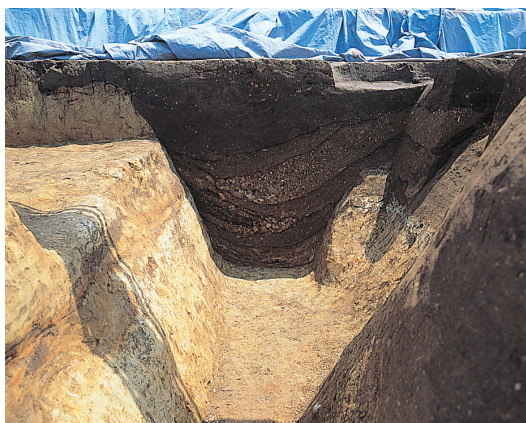
(27) S X 007周辺（南より）



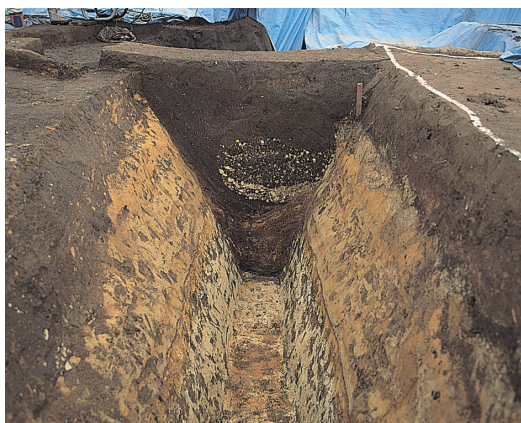
(28) S K 532断面 (南東より)



(29) S D 505断面 (東より)



(30) S D 508断面 (西より)



(31) S D 508断面 (南より)



(32) 調査区下面全景 (南西より)



(33) 調査区下面全景 (北東より)



(34) 調査区下面東側部分（北より）



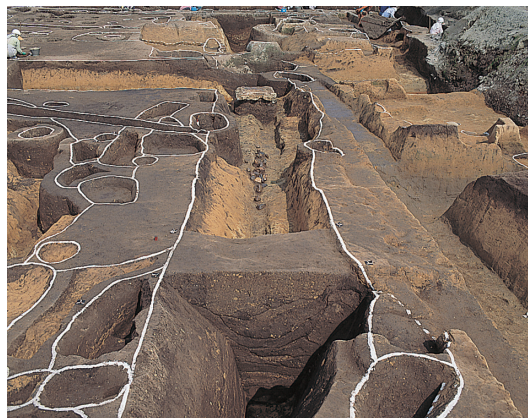
(35) 調査区下面西側部分（南より）



(36) 調査区下面中央部分（南より）



(37) 調査区下面北東部分（南より）



(38) S D 505（西より）



(39) 土層サンプリング風景



(40) 写真測量風景



(41) 作業風景

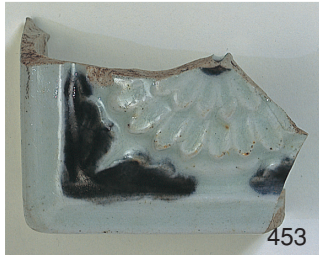
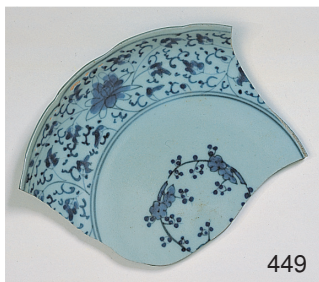


遺物写真 (1)





遺物写真 (3)



報告書抄録

フリガナ	ナゴヤジョウサンノマルイセキ
書名	名古屋城三の丸遺跡（Ⅵ）
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第115集
編著者名	松田 訓・鬼頭 剛・森 勇一・上田恭子
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番					
ナゴヤジョウ 名古屋城 サンマル 三の丸	なごやしなかく 名古屋市中区	23106	—	35° 10′ 33″	136° 54′ 5″	20010509 ～ 20010907	1000	名古屋地方裁判所・簡易家庭裁判所合同庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名古屋城 三の丸	中・近世 城館跡	古代		埴仏	那古野城関連遺構
		中世 (戦国期)	堀・溝 土坑	中世陶器 土器	
		近世	溝 土坑 井戸	近世陶磁器 瓦 土製品 金属製品 石製品	名古屋城三の丸武家屋敷を区画する溝

愛知県埋蔵文化財センター第115集

名古屋城三の丸遺跡（Ⅵ）

2003年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 ブラザー印刷株式会社